平凡は、いちごと共に消ゆ

フリードg

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最近続編があるのを知って、結構喜んでたり。月刊誌なのが残念。勢いで昔書いてたのを投稿。駄文なのは許してください。

これは、作者の中で人気1位の西野さん。オリ主と西野さんをくっつけたかったが為の小説。

つまり　真中くんは東城さんとくっつくべきだったかな、と今でも。

投稿１０分後……

ハーメルンで同じ題名のいちご小説発見。なのでちょこっと変更しました。

タイトル名が思いつかんので本当にちょこっと……。すみません。

２０１７　６／２７　タイトル考えてみたので変更。お騒がせしました。

目次

0話 1
1話 6
2話 11
3話 16
4話 24
5話 31
6話 38
7話 46
8話 52
9話 58
10話 68
11話 76
12話 84
13話 94
14話 101
15話 110
16話 118
17話 124
18話 131
19話 135
20話 144
21話 154
22話 162
23話 172

36話 ブラコン＋……　276
35話　267
34話　260
33話　251
32話　242
31話　233
30話　223
29話　217
28話　209
27話　201
26話　196
25話　188
24話　180

0話

「ねぇねぇ知ってる？」
「えー　なになに？」
「ほら、放課後の屋上の話――」
「あっ、それ訊いた事ある！　何か夕方ごろになると……出るんだってねー？」
「え？　私は別の話を訊いたよ？　んー　っとすっごく綺麗な歌声が聞こえてくる～　とか？」
「歌って、それ断然ゆーれいじゃん！　出た～～！　と一緒じゃん！」
「でも綺麗な歌声らしいよ？」
「綺麗だから何だか怖いじゃん！　……引き込まれたら逃げられなくなるよ～～??」

それは何気ない　いつもの女の子同士の会話だ。

女子中学生はこの手の噂などでは大いに盛り上がる事が出来る。……けど、生憎実際に確かめに行くまでは出来ないんだ、それが私は以前から少しばかり気になっていた。
その噂は最近聞き始めたばかりだし、ありきたりな学校の階段ものじゃないのだから。怖いのは得意！　と言う訳じゃないんだけど、何故だか、今日は特にこの話には興味があったみたい。
「ふ～ん……」
何だか今日は特に気になってしまうから、今の今まで別の話、関係ない話をしていたんだけど、いきなりで悪いけど話を変えてみた。親友と一緒なら、怖いのも全然へっちゃらだから。
「ね？　行ってみない？　今日の放課後！」
「ええっ!?　放課後って……お、屋上？」
「そーだよ？　さっき、皆で話してたヤツ」
「え、えっとぉ……　きょ、今日はちょっと……用事があって、ね？」
ついさっきまで一緒にカラオケ行かない？　と話してたばかりな

のに、もうちょっと上手い言い訳は無いのかな？　と思わず笑ってしまったよ。
「えー　付き合い悪いなぁ。別に怖くなんてないってば」
「こ、怖がってる訳じゃ……」
「あははっ　ユリってば動揺しすぎだよ。ま　いっか。何となく言ってみただけだし」
「で、でしょー？　あそこって基本立ち入り禁止なんだから！　バカな事言わないで今日も大いにカラオケで盛り上がろーよ！　つかさもっ！」
私の背中をぐいぐいと押しながら行くよう催促する親友のユリ。

あぁ……　思い出したんだけど　ユリは怖いの滅茶苦茶苦手だった。
前に、『彼氏が出来た時の為の映画デートに付き合って！』と、彼氏を作ってからやりなよ！　とツッコミながらも、面白そうだし、一緒に遊ぶ様なものだから、とついて言った映画の内容が……ガチのホラー系だった。
なんでも、怖かったら隣りに座ってる彼氏の手をぎゅっ　と握りたいとか、終わった後　怖いから家まで一緒に～　等等のシチュエーションが出来るかららしいんだ。
だけどーー、結果は散々なものだったよ。
ホラー映画。まだ前半部分だと言うのに、何だか雲行きが怪しくなった。本当の本気で怯えていた。特に最後のシーン。テレビの中から白い服を着た髪の長い女のひとが出てきた時、両手で耳を塞いで、目を思いっきり閉じて　凄く震えていた。
正直、私も怖かったんだけど、ユリの方が心配だったから　映画の内容全く頭の中に入ってこなかったよ。……ユリ曰く、それは幸福だったって事らしいけど……　映画代は痛いよ？

「あれ？　ユリ。携帯光ってるよ？」
「あっ　ほんとだ。ありがとーつかさ」

ふと、見てみると　ユリの鞄から見えるユリの携帯が点滅している事に気付いて教えてあげた。落としたりしたら散らばっちゃうし、何より変なヤツに盗まれたりする可能性だってあるから、鞄はちゃんとファスナーまで締めましょう！　って言い聞かせたばかりなんだけどなぁー。

「わーー、つかさっごめんっっ！　今日、弟の誕生日だったんだ!!は、早く帰らないと……っっ！」
「え？　サト君の誕生日って今日だったんだ？」
「うん――。ねーちゃん遅いっ！　ってぷんぷんだって……」
「あははっ、相変わらずのお姉ちゃんっ子だよねぇ～　何だかそう言うのも可愛いなぁ。羨ましいかも」
「駄目駄目。幾らつかさでも、サト君は上げないよー！」
「取らないってば。ほんっと弟君の事大好きだよね？」
「そりゃ当然。私の理想の男性に育て上げちゃりますので！」

危ない方向にいかないでね？　と脳裏に思い浮かんだが……口に出さないで上げたのはやさしさなのかな？
それは兎も角、ユリの家と私の家は正反対で　いつも用事が無かったら皆と一緒に遊んだり、話したりするんだけど　今日は皆用事があるっぽいんだ。
「じゃあまた明日ねー　つかさー！」
「うんっ！　また明日――！」
ユリも帰っちゃったから　久しぶりの1人の下校になるなぁと思ってたんだけど……、やっぱり何だか気になるから、私は踵を翻して学校の方へと戻る事にした。
「ん？　おい西野。もう下校の時間だぞ？」
「あー、すみません。沖先生。ちょっと教室に忘れ物しちゃって……」
「ああ、そう言う事ならまだ鍵は閉めないでおく。……だが、6時までには帰れよ？」
「はーい」

途中で先生とも出会ったけど　何とかうまい言い訳をして回避！
そう、これくらい自然に出てこないとダメなんだゾ？　ユリ君っ！
……嘘つきが好きって訳じゃないけどね。
それは兎も角　さっさと屋上へと続く階段を上って、ちょっぴり疲れちゃったけど、勢いよく扉も開いた。扉を開いた先の景色に、私は眼を奪われた。

「わぁ……すっごい。夕日、綺麗……」

ちょっぴり冒険してるって気分だったんだけど、大きな夕日を見たら　何だか全部吹っ飛んじゃったよ。その代わり別な事が頭の中に浮かんできちゃった。

『あぁ～　ロマンチックな出会いをしてみたいなぁー。ほら、彼氏と夜景の見えるレストランとかっ！　オーロラとか！』

何だか　判らないけど　この時、ユリの言っていたことが頭の中に過っちゃってたよ。
確かにとても綺麗だし、好きな人と一緒に綺麗な景色を見るのって素敵だとは思うよ？　でも、オーロラってなんだヨ！　って　今でもはっきり言えるよ！
「っとと、目的忘れてた忘れてた。ええっと、出るとか出ないとかー……。う～ん」
今はほんと夕日、とても綺麗！　それ以外の感想はないんだよ……。
それっぽい声も無いし、風の靡く音と間違えたのかな？　とかも思ってたりしたけど、どうしても　それっぽく聞こえない。
まぁ、噂なんてそんなものだし。
「あーあ。ユリも呼べばよかったかな？　私が彼氏になってあげて～、一緒にこの景色みてーーっ　……って、私は女の子と付き合うつもりないってば！　彼氏役彼氏役」

自分で自分の事をツッコむなんて、ちょ～っとむなしかったりするけど仕方ないよね。いつものメンバーは誰も今日はいないんだから。私の事をビシッ！　とツッコめるのは私だけなんだから！

「はぁ～　もう帰るかな。流石に夜の学校は……絶対無理だし。そもそもそんな事したら怒られるから、違う意味で怖いし……」

と言う訳で今日はお開き！　と思って帰ろとした時だったんだ。

『――――――っ』

屋上に靡く夕方の風にのって――何かが聞こえてきたのは。

1話

『――――――――』

それは夕風に紛れて確かに聞こえてくる。
最初はとっても怖かったけど、それ以上に想ったんだ。

「――ほんとに綺麗な、素敵な歌声。英語、だよね？　すっごく上手……。外国のひとみたい」

私は思わず聞き惚れてしまったんだ。
目を瞑って、風と歌と共に微かに聞こえてくるハミングを感じ取ると、全てが上手。まるでプロのひと？　と思っちゃう程、綺麗で……。

『――――――――』

本当に心地良いよ。……無料（ただ）で聴いちゃうのが悪い、って思っちゃう程。

「これって……　確か　有名な映画の主題歌だったよね……。うん……　でも、どこから聞こえてくるんだろう」

確かに少しばかり怖い気持ちはあったけど、それ以上にすっごく気になった。カラオケは何度か言ってるし、友達の皆も上手な子は沢山いるんだけど……、皆にはちょっと悪いけど、比較にならないって思っちゃう。
微かに聴こえてくる位なのに、すっごく透き通ってて……。

「うん……。心に響くって言うのかな……？　この映画って　悲しい物語だったから、って言うのもあるかもだけど。んー……」
もっと傍で訊いてみたい！　って凄く思った。ゆーれいが歌ってたって良いかも！　って本気で思っちゃったかもしれない。
でも、ここは屋上で　軽く見渡してみたけど人がいそうな場所はもう……。
「うーん。もう　あそこしかないかな？」
屋上は学校の中で一番高い場所だけど、その更に上があるんだ。
一度だけ上がった事ある。
あの時も梯子を登るのはちょっぴり怖かった。風がちょっとでも吹いてると更に怖かった。……でも　それ以上に困った事があったんだ。下にいたユリにパンツを見られちゃって、いちご柄を大きな声で言われちゃった事。

あの時は　顔がいちご見たいに赤くなっちゃったけど、今は1人だから良いもんっ。可愛いって言われてすっごく恥ずかしかったけど……良いもんっ！

って、そんな事より　何よりも今聴こえてくる綺麗な歌をもっともっと傍で聴いてみたいから、ぱんつなんてそんなの、カンケ―無いよ。

「いよし！　んっ」

私は1％の恐怖心と99％の好奇心を胸に抱いてこの上を登ったんだ。
まだ見た事がない景色が見れるって思っちゃったから。この綺麗な夕焼けの空よりも綺麗でドキドキする様な景色が……。
「よい……しょっ　と。もーちょっと……　ふぃ～　風つよーい。んっ　下みない下みないー」

高所恐怖症って訳じゃないけど、それでもやっぱり限度はあるから。高すぎる所は……得意って言えないからね。

『――――――――』

間違いなく、あの歌声が大きくなってるみたい。
うんっ　間違いない。この先だよ！　でも、もう歌が終わっちゃいそうかも……。あまり聞いた事無いけど、この辺が確か最後の方な気がするから！

「ま、まって　終わるのもーちょっと……！　ついたっと！」
漸くたどり着いた！
えっと……、うん。とりあえず――。

「……ん」

ゆーれいじゃないみたい。
ちゃんとした人間。もっと言うなら制服着てるし、私と同じ学生だよ。男の子。
ちゃっかり　アイマスクをつけて　寝っ転がってた。

「ふぅ……もうひと、眠り……」

歌をうたい終わったから　もう満足したー、って感じで眠ろうとしてた。
なんだろ……　このひと　すっごく気になる。
顔が見えないなぁ。だれ……だろ？　どこのクラスの子？

「……」
「……」

いつの間にか、私結構傍にまで来ちゃってた。
声――かけてみようかなぁ、って今私は思ってる。

寝てるの邪魔しちゃ悪いって思うけど……、もう放課後だし、6時までには帰れって言われてるし、起こしてあげた方が良いんじゃないかな？　って。

「……えーっと　もしもー「ん？」っ」

ほんとビックリした。
殆ど同時だったから。私が声をかけたと同時に、彼はアイマスクを取っちゃった。
当然だ！　って思われるかもだけど　すっごい近くで目が合っちゃった……。こんな傍で　男の子と目を見合うなんて、最近ではお父さんとも無かった事だったよ。
だから、すっごくビックリしたんだ。

「わぁぁぁっ!?」
「っ……!?」

お互いビックリしたんだと思う。
私は思わず尻もちついちゃったし。……あー　お尻痛い。

「……」

彼はじぃ　と私の事をみてた。お昼寝の邪魔しちゃったから怒ってるのかな……？　今　お昼じゃないけど。
でも、違ったみたいなんだ。

「ふぅ。……ほら。立ちな」
手を差し出してくれたから、怒ってるようにも見えないし。でも、肝心の私は力抜けちゃったみたいで、手をとれなかった。なかなか動けなかったよ。
「えと……、その……」
「そのままじゃ、多分マズイと思う」
それで、彼はまずいって言ってるのは判ったんだけど、なんでかは判らなかった。
「え……？　なんで……？　……なにが？」
「……見えてる」
少し顔を背けてそういってた。手はしっかり伸ばしてくれてるけど。
それで、彼の言ってるのをもう一度思い返してみたら……。
私は尻もちついちゃってる。……そんな状態で　しっかりとその、スカートを抑える事なんて　できっこない。うん、仕方ないよね？
つまり、彼が言う意味は、私はまた屋上で……み、みられ……っ。
「きゃあああっ!!　も、もうっ　見えてるならもっと早くいってよっっ!!」
「だから見えてるって言っただろ？」
「もうっ　えっち！」
「……過失あるか？　オレに。見事なストーキング技術を持った女子に、ここまで接近されたんだぞ。　ぜんっぜん気付かなかったし、驚きたいのはオレの方だったんだが」
これが、彼との出会いだった。
ちょっと、衝撃過ぎて忘れることなんかできない出会い。
——出会って3秒でぱんつ見られちゃうなんて、忘れることなんかできないよ。

2話

なんだか知らんが、今オレは正座をさせられる勢いだ。今は彼女の説教タイム。

正直　何でこんな事になってるのか、正直判らない。……解せない。

確かにパン……　下着を見てしまったのは悪いと思う。

でも　さっきも言った通り過失があるのは相手の方だと思う。だって突然目の前にいて、当然びっくりしたよ。　でも　彼女の方もびっくりしたみたいなんだ。おまけにびっくりし過ぎてひっくり返ってた。

それで、見えてしまったんだよ。見たくてやった訳じゃない。大人だったら逮捕されるかもしれない様な事する訳ないし。

それに　倒れてる所を起こそうとしてあげただけでも、感謝されても良いだろ……？

そんなオレの想いとは裏腹に、眼前にいるのは腰に手をあてて仁王立ちしてるあの彼女。その顔『今、私すっごく怒ってます！』と言わんばかりだ。

ぶっちゃけ面倒くさい。

「もー！　ちょっと！　聞いてんの!?　えっちなのは駄目だよ！」

「あー、はいはい。もう　耳ダコ」

「何よー！　耳タコって！　それに　はいは、いっかいだゾ！　不躾っ！」

何？　この子供みたいなやり取り。

一体　何がどうなって　こう言う状況になったんだっけ？　少し前の事をオレは思い返す事にした。

――この学校に転校してきたのは、中学二年に上がった直後くらいだった。

ありきたりな理由だけど親の都合。

どちらかと言えば　前の学校が良かったけど、中学生如きが何を言ったって覆る訳ないし、あくまで『どちらかと言えば』だったから、そこまで苦痛ではなかった。

それなりに会話はするからボッチだった、と言う訳じゃないけど基本的に1人が好きだ。

1人が好きだから　この新しい学校の中でも特に屋上が好きだった。殆ど誰も来なかったから。

「それで　なんで屋上(ここ)にいるんだ？　って言うか　何で上にまで上がってきた？」

たまに屋上に誰か上がってきてる感じはあったけど、この給水タンクの影のトコにまで上がってきたのは彼女が初めてだ。

何だろう、……嫌な予感が頭ん中に過ってた。

「えー　わかんないかな。あんなに気持ちよく歌ってたんだもん。そりゃ　近くに行ってみたいじゃない。歌、すっごい上手かったよ！」

「っっ!!!」

嫌な予感――的中。　嫌な事に　こういう時の勘は当たる昔から。

と言うかさっきまで『怒ってます！』だったのに『実は嘘でしたー』みたいな顔。いや寧ろ良い笑顔で言ってる。

そして　聴かれてしまった事に関しては　実に、嬉しくない。すっごくうまかった……、美味かった？　何それ美味しいの？

と言う訳で、さっさと降りようと横切った時だ。

「こらー！　ちょーっと待ってよ。何で無視するんだよ!?」

此処から先は通さない！　とでも言いたげに両手を広げてる。

「いや　もう下校の時刻　とっくに過ぎてるし。……校内に残ってる生徒は寄り道しないで帰りましょー。だろう？」

「あ、まぁ　確かにそーだけど……、って　こらっ逃げるな！」

さらっと躱そうと思ったけど、なかなかに動きが良い様で　逃げれなかった。
別に紳士って訳じゃないけど　幾らなんでもオレは　女子を押しのけて帰ろうとする程　酷いヤツでもない。
そもそも　ここで暴れるのは非常に宜しくない。冗談抜きで危ないから。
「ああ、わかったわかった。とりあえず　降りよう。危ないだろ？」
「む……。それもそーだね。うん。でも　先に降りないでよ！」
「……？」
「むー」
スカートを抑えてるけど、覗くって思ってんのかな？
「……どっちかっていうと、見せられたに近いけど。つまり痴「誰がだよっ!!」ごめんごめん。調子に乗った」
また長い長い説教が始まりそうだったから、直ぐに謝った。
「ふんっだ。じゃ　先に降りるからねー。1人ずつ降りる事！　安全第一！」
「（……どの口が言ってるんだか）」
「あ！　どの口が、って思ってるでしょ！」
どうやら、心を読んでくるエスパーな不思議少女らしい。ほんと厄介ですね、はい。
「別に考えてないって。ほら　早く降りて」
頑張って自然に振る舞った事がよかったのか、何とか誤魔化す事が出来た。
ちょっと鼻息は荒いけど　さっさと降りてってくれた。
「よいっしょっと！　さー良いよー」
と彼女が言った殆ど同じタイミング。
オレは狙ったよ。本気で。
「って　わぁっ!!」
狙ったのはジャンプするタイミング。ちゃんと彼女が降りたのを見届けてから降りたから、文句は無い筈だ。
「ちょ、危ないのはキミの方って……あれ？」

そして　誰もいなくなった――――と言う事にしといてくれ。
彼女が驚いて怯んでる隙にこの場から脱出する事に決めてたから。

「もー、なんだよー！　別に逃げなくたって良いじゃん」
私は何だか腹が立ってた。
パンツ見られたことなんか忘れるくらい……まではいかないヨ。
うん。えっちなのは駄目だからね。
でも、それでも逃げる事は無いって思う。

「うーん、あの男子って　誰なんだろ？　背は私より大分高くて……
この辺り？　それで赤みが掛かった茶色い髪で……、アイマスク
を胸ポッケに入れてて……」

さっきの男の子の顔　頑張って　頭の中に収納する。明日辺りに
ユリに訊いてみるんだ。
でも　ちょっとばかり違和感があるかな。
「……あの人　私の事　知らないのかな？」
自分が校内の有名人ですっ！　なんて言うつもりはないんだけど
……、いつも沢山私の周りには男子たちが集まってくるのに、あの人

は知らないのかな？　って思っちゃう。
前に　ユリが『つかさが学校一番の美少女って事だよー？　だから学校中の男どもがつかさの事ほっとかないってさ！』って言ってたけど　やっぱり大袈裟だよっ！　恥ずかしくて　顔を赤くさせてる私を見ながらユリは笑ってたもんっ！
……それは兎も角、追っかけは迷惑だよ。私は誰ともお付き合いするつもりないっ　て言ってるのにも関わらず　結構な頻度で集まってくるし。
傍にいるだけで良いから、って言われてもほんと困ったものだよ。女友達の皆が何とかガードしたり、ちょっと行き過ぎ気味だったら私も声を強めたりしてるんだけど。
「まぁ　私もあの男の子の事知らないから、他人の事言えないんだけどね。……むー。　でも　今はさっきの子の事　私すごく気になってるみたい。……すっごく」
やっぱり　あの歌の事だよ。
まだ耳に残ってるから。それ程までに上手で綺麗な歌声だったから。
ウォークマン……今度お母さんに買ってもらって録音したいな。

「私も今日は帰ろ。……明日　覚えてろよーーっ！　ぜーーったい見つけてやるんだから！」

なんだか、大きな声でそう言いたくなった。
風に乗って『……勘弁してくれ』って聞こえたきがするんだけど、きっと気のせいだよね？　うんうん。

3話

昨日は　なんだか色々とあったけど、とりあえず目立たない様に、それでいてボッチとは思われない様に。
無難に過ごす事。つまり普通。それが一番。すごい楽だ。

それが15年生きてきて一番学んだ事だ。……大して生きてないじゃん、と言われそうだけど。

新しい中学に来てもする事は変わらない。毎日を無難に過ごす。

まぁ　先生にまで『中坊らしくない』って結構言われてたけど、今までだって別に気にした事なかった。

……でも、このクラスは少しばかり今までとは違ったけど。

「おーい、神谷～　神谷　蓮～～！」
「……いつもいつも思うんだけど、たまにフルネームで呼ぶの止めてくれよ」

別に名前や苗字が嫌いって訳じゃないけど、フルネームで呼ぶヤツ他にはいないから、目立ってしまうんだ。それが……まぁ　ヤダ。
後　あの声がでかいからって理由もあるけど。
「別に良いじゃねーか！　そんなもんさ～！　それより今はこれだこれ、これ見てみ！　あゆみちゃんのグラビア写真♡　真中が持っててよぉ～～！　とうとう手に入ったんだよぉぉんっ!!」
「わかったわかった　しがみ付くな。　……と言うか、それぐらいで泣くなって」
「うぉぉんっ!!　……って、そんぐれーってなんだよ！　オレが望みに望んだお宝なんだぞ！　13号の付録にしかついてない限定品な

んだぞ！　言うなら家宝クラスなんなんだぞっ！　これ探すのにどんだけ苦労したか……。中坊じゃ売ってくれないから変装しつつ探してたりして……、来る日も来る日も古本屋巡り……　長かったんだぁ……」
「その努力を他の面にも向けろよ……。テストがヤバイって嘆いてた癖に。もう受験も近いんだぞ」
「うぉぉぉ!!　嫌な事思い出させんなよーーっ！」
「受験を忘れてどーすんだよっ！　流石に進路大事だろ」
転校生って、最初の内は珍しがったりして　結構話しかけてきたり、クラス全体の話題にあがったりするんだが、それは一定期間だけで　転校生ブームが去ったら　ある程度は静かになるってイメージだったんだけど、このクラスはアットホームと言うか、お気楽と言うか、当時のテンションのままの付き合いが続いてる。

勿論、基本的に疎ましいとか思ったりはしてないぞ？　打ち解けが早かったのはありがたいって思った。

だけど……　目の前の号泣してるヤツ、小宮山はまた別だ。

そんな感謝の気持ちなんか、遠の昔に消失しる。もうなんの遠慮もしないくらいの存在になってる。……別に特に嬉しいとは言えないけど。

「よぉ、大声でなーにやってんだ？　お前ら」

もう1人話の輪の中に加わってきた。

「真中……。お前がヤった刺激的な餌のおかげで興奮しきってる様だぞ、このゴリラ顔。落ち着かせてやってくれ。あの悪夢っつってたグランド５０周があったっつーのに、懲りないねぇ」
「おい！　誰がゴリラ顔だコラっ!!」

真中が教室に戻ってきたから、このまま　バトンタッチをしようとしたが無理だったよ。……ゴリラって言ったのは余計だったかもしれん。でも思うトコはある。それをネタにして使ってたから。

「ほれ　ゴリラの物真似して笑わせてたじゃん。けっこー　何回も女子たちの前で。だからゴリラ好きなんだろ？　って

「あ、あれは……　ほ、ほら　笑ってくれたら嬉しいじゃん！　オレの持ちネタだし！　な？　判るだろ？　真中も」

「そんなん知らんって、変な時に　オレに縋りつくなよ小宮山！」

顔を真っ赤にさせながら言う姿みたら、妙に純粋っぽいトコがあるんだが……　意地の悪さと妄想癖もそれ以上に強くて　結局は色々振り回されてしまう事が多かった。……まぁ　妄想癖って言えば小宮山の隣にいる真中だって負けてないって思うけど。

小宮山は可愛い女子に対しては　エロい妄想ばっか。で、真中の場合はもうちょっとマニアックで、映画のシーンがどうとか、ってぶつぶつ言ったりする事が多かった。誰もが知ってる様なA級映画じゃなくて、誰も知らない様な映画が多くて、誰もついていけないから、1人でやってる。妄想癖、と言うより空想壁かもしれないけど。

「あっ！　それより聞いてくれよー！　この間さぁ　西野つかさちゃんが笑ってるとこ、見てよー！　やっぱ可愛いよなぁ……♡」

「急に話題変えたな……」

そして、小宮山が突然話題を変える時は大体　『西野つかさ』の話になる。

学年一のアイドルって言ってて　かなりの入れようなんだ。

「そうだなぁ。ほんっと最近は何でもかんでも西野つかさの話。無理矢理もってくんだよな～」

「うっせぇなー！　好きなんだから仕方ないだろー！」
「……大声で言う様なセリフじゃないと思うけど」

だれそれが好き～なんて、学校の教室で大きな声で言うもんじゃない、って思う。アイドルとかならまだしも、同じ学校の生徒にってのは……。多感な中学生が。

「その意見では流石のオレも同意だな。流石は神谷。そこらへんの男子より大人びてるよな」
「ん？」

声で大体誰か判ったけど、振り返って確認した。それで間違いなかった。
「ああ　大草か。あれ？　さっき女子に呼ばれて出てったんじゃなかったっけ？」
「ん？　ああ、今度遊ぼうって誘われただけでもう終わったよ。……勿論、オレはＯＫを出した」
「別に誰も聞いてないって……」

クラスでも屈指のイケメンである大草。スポーツ万能で成績も良く絵に描いた様な存在だ。

冗談抜きで大草がいるトコには女子も集まってくる感じで最初は正直苦手だったりする。……でもまぁ実際にはある意味デカい光である大草の傍にいたら、影になって隠れられるから特に問題なかったけど。
「それよりさぁ。神谷。今度サッカー部の皆と集英中の女子とで飯食いに行くんだけど、行かないか？　丁度良い人数になるんだ」
「ああそうか。うん。行かない」
「即答かよ！　１０秒くらい考えても良かったじゃん」

そんでもって、たまにだけど、こんな感じで誘いを入れてくる。
「はいはい！　蓮が行かないんならオレが行くーー!!　りっこーほっ!!」

そんでもって……、こういう時の小宮山は地獄耳だ。速攻で話に加わってくるんだ。勿論結末はいつも変わらない。
「小宮山は駄目だろ……、絶対」
「んだとコラ!!　真中!!　まだ何にも言ってねえだろうが!!」
そう、ＮＧだと言う事。
そして　小宮山は真中のぼそっと言ったツッコミも決して聞き逃さないんだよね。凄い。
「いやぁ、小宮山は勘弁してやってくれ。その顔で迫ってきたら女子たちが怖がる」
何処か爽やかな顔してる大草も結構毒舌だったりする。
「どういう意味だ!!!」
「そう言う意味だろ？　……ほれ、お前らも席に戻れって。そろそろ授業始まるぞ」
「うぐぐっ……」
と言ったらタイミングよく開始を告げる本鈴が鳴った。
未練がましくしてるみたいだけど、次の授業の山岡先生は、小太り気味で無精髭が特徴的な怒らせたら面倒な部類の先生だ。ちょっと前　２人に罰としてグランウド５０周！　を宣告した教師でもあって、またまた　怒りを買おうものなら今度は内申点にも響くんじゃないか？　と言ったら　少なからず自粛すると２人は言っていた。
正直、この時は　『くだらない事で教師に逆らって無駄なエネルギー』と言っていた大草に素直に賛同した。
オレも席がすぐそばだから　危うく巻き込まれそうになってしまったんだから。

そして、ちょっとした事件が起きたのは次の日だった。

とりあえず、あの日。屋上でいた時に出会った女子との鉢合わせは無かった。
『ぜったい見つけてやる！』と恐ろしい事を言われて　結構警戒したけど……取り越し苦労だったよ。
あの日から　屋上は危険かな？　と思ってたんだが、あの場所は自分にとって憩いの場でもある。簡単に放棄できる様な場所でもないから。
「――歌、ちょっと自粛しよっと」
そうだ。
そんな大きな声で歌った訳じゃないんだけど、訊かれたらしくてああなったから。
「……やっぱし　気持ち良いな。ここが学校の中で一番」
目を閉じれば、更に気持ちいい。
誰にも邪魔されずに　無心になれる場所なんて早々無いから。
でも――、またまた来訪者が来たんだ。

「よい……しょっと」

丁度、給水タンクの影になってたから、ここで転がってるのはバレてない様だったけど。
「……ん？　誰だ？」
前の子かな？　って思ったから　ちょっと警戒してたんだが違った。長い髪は同じだけど、髪の色が違う。
「ん……」
その子は、手にノート、ペンを持って何かを書いてた。
こんなトコで勉強？　って思ったけど……　落ち着ける場所での勉強は結構捗ったりするから　そこまで不思議には思わなかったけど……。
「（まぁ……あんまり人が来ないってだけか。ここは）」

全く人が来ないって訳じゃなさそうだと思った。
今の今まで鉢合わせが無かっただけで。

そして、オレは頭の中で選択肢を選んでいた。

①　素直に出て行って　軽く会釈し下に降りる。
②　先に来たのはオレだ。オレの場所！　と出ていく様に言う。

①は　まぁ……驚かせてしまうかもしれないけど、無難かな？　と思う。
だけど、つい先日の事もあるし……もしかしたら　あの子の刺客？
かもしれないし、と言う事で無し。

②は　……なんで選択肢に入れたんだ？　と自分で自分を責めつつ却下。
何処のガキ大将だ。
と言う訳でありきたりだが

③　このまま隠れて、いなくなったらオレも帰る。

をチョイスした。
幸いな事に気付いていないし、屋上はそれなりに広い。
もしも　あの彼女もここがお気に入りで　ちょっとした至福の時間を過ごしているのだとすれば、邪魔するのも悪いだろう。時間帯を考えても　何時間もここにいるとも思えない。
オレだって、後３０分くらいゆっくりしたら帰ろうと思ってたし。
「……（風が結構吹いてるのも幸運だな。風音で色々と紛れる）」
ちょっとした息遣い程度は気付かれない程吹いているから良かった。
丁度給水塔の裏側と表側で過ごす男女。

一体どういうシーンだ？　って映画とかにうるさい真中だったら、ツッコミ入れられるかもだけど、こういう事だってあるんだろ。たまには。

「さ……、もうひと眠り……」

と言う訳で、オレは目を閉じた。

それで、ちょっとした事件が起きるのは、この直ぐ後の事だったよ。

４話

あれから多分、まだ２０分も経ってないと思う。

いつもは、ここにいると時間が経つのは結構早いんだけど……今日は別だったみたいだ。

何かで訊いた事だが、アインシュタインの相対性理論だったか？

こんなにも長く感じるもんなんだな……。

「ん……。ふぅ　今日はここまでで、もう帰ろうかな」

色々考えてたら、あの女の子は帰ろうとしていた。長く感じたけど……まぁ　よしとしようか。

「（うーむ……、暫く屋上に来るの止めておこうかな……）さて、とりあえずオレも準備を「きゃっ！」は？」

本当にいきなりだったよ。

さっきまで静かだったのに、確かに小さな悲鳴が聞こえてきて、反射的にそっちを向いたんだ。あの子がバランスを崩してて、変な体勢で倒れ込んで　おまけにその身体が視界から消えたんだ。衝撃映像を見た気分だったけど、何とか咄嗟に捕まる事が出来たみたいで、捕まってる手だけは見えた。

――転んだ？　でもここは平らで段差もないし、足を取られる様な地面じゃないんだけど……。

って思ったけど流石に危ないとも思った。

そこまで高くないとは言っても、変な体勢で落ちてしまったら危ない。……前にジャンプして降りたけど、結構足に響いたし。

「おい、大丈夫か!?」

「えっ!?」

とりあえず、オレは彼女の手を取る事が出来た。
見てみたら片手だけで自分の身体を支えている様で、あと少し遅かったら下に落ちていたかもしれない。
「落ちついて足でしっかり梯子を踏め。ほら、右足を１０cmくらい横にずらせ。直ぐそこにあるから」
「あっ　は、はい！」
何とか足でもしっかりと体勢を整える事が出来たのを見届ける。
「よし、ほら　支えといてやるから　左手も梯子を掴んで」
「わ、わかりました」
パニックを起こさなかったのが良かっただろう。しっかりと指示は聞いてるし、ちゃんと捕まる事も出来たみたいだ。……そろそろオレの手もしんどくなってきた。
「もう放しても大丈夫か？　掴んだままだったら降りれないだろ」
「あ、だ、大丈夫です。ありがとうございます……」
頷いたのも見たし、しっかりと両足と右手で身体を固定出来てるのも見た。
ここまで来たら……　普通は大丈夫だ、って思うだろう？　普通。
なのに――――。
「きゃんっっ！」
「……へ？」
多分、つるっ　と滑ったのかな？　足も手同時に。しっかりと支えれていたと思ったけど。
……そんな事ってある？
そのまま　どさっ　と下に落ちてしまった。
オレの苦労はいったい……。オレが落とした事になる？　そんな訳ないよな？

「……って、自問自答してる場合じゃないか。おい、大丈夫「い、いちごの……パンツ♡」は？」

そんな時だ。もう1人の声が聞こえてきた。

今まで、少女の姿しか見てなかったけど、ここにはもう1人いたみたい。そいつは、マジマジと倒れてしまった少女の事を見てた。

そりゃ、穴が開く程見てたよ。うん。スカートの中を。

結構風は今も強いし、はたはたと棚引くのも上からでもしっかりと判ったんだけど……。

「おい馬鹿。真中！」

「うぉっ!?」

誰が来てたのか、と思ったら真中だったよ。兎に角　オレは足が痛くなりそうだけど、また飛び降りた。

「うわっ！　って神谷？　何でここに？　なんでお前まで上から降ってくるんだ？」

「これにはいろいろと事情があるんだが、話しは後。まずはあの子だ」

大丈夫かな？　と振り返ってみると……　あの子はぱっちりと目は開いてて　必死に捲れるスカートを抑えてた。

あぁ……　見られたって判ったみたいだ。

「きゃ、きゃあああっ！」

「お、おい　落ち着いて」

ぶら下がった状況ででも、結構落ち着けてたみたいなんだけど、今更パニックを起こして走り去っていった。

「あれだけ走れれば大丈夫か……」

「おい、説明してくれよ」

とりあえず、かいつまんで説明。

落ちそうになってたから助けようとしたこと。……だけど、よく判

らないタイミングで落ちてしまった事。そしてまた、見事なタイミングで真中が来た事全部。

嘘みたいな話って自分でも思ったけど、真中に一通り説明したら判ってくれたみたいだ。

「成る程……。っていうか上から降ってきたらオレの方が驚くだろ？　驚くのはオレの方だって」

「まぁ気持ちは判らんでもないけど。　空から女の子が～　なんて真中風に言えば映画の展開。中々現実じゃ起こらんよな……」

「だろっ!?　って、それより……あんな美人ウチの学校にいたっけ？」

真中は、あっと言う間に顔を赤くさせてた。

夕日のせい？　って一瞬思ったけど、違うみたいだ。

「誰なんだ？」

「知らん」

「知らん、って上でいたんだろ？　2人で」

「いやいや、オレが上で寝てたらあの子が来ただけ。ダブルブッキングってヤツだ。話してもないよ」

名前なんか確認する間も無ければ、顔をまじまじと確認する様な事も出来ない。落ちかけてたあの状況だし。

「でもよぉ　あーーー！　すっげぇいいシーンだったよ!!　ほら、綺麗！　美少女！　夕日に照らされてスカートがめくれて……。アレが映画のシーンなら、起き上がる瞬間は絶対にスローモーションだなっ!!」

「おい、それじゃ単なるエロビデオにしか見えんぞ」

「……あ、それもそうかな？」

「んでもって、倒れてて無事かどうかも判らない少女を助けて介抱するどころか、『ぐへへ、スカートの中が丸見え。儲けもんだぜ～』ってな具合で襲うとする変態役が真中って事だな」

腕を組んでうんうん、と頷いてたら。
「なんでそうなるんだよ！　オレは監督だっっ!!」
盛大にダメ出しされた。と言うか、ツッコむトコそこ？
「はいはい、真中監督〜　すいませんでしたー。って、そうだ」
オレは1つ思い出した。
あの子は屋上で何かを書いてた。そんでもって逃げ去る時手には何にも持ってなかったし。
「上に忘れもんがあるかも……」
「え？　忘れもん？」
ひょいっとまた元の場所に戻って確認してみると、ノートが落ちてた。
「3年4組……って、オレらと同じクラスか。東城、綾……ああ、確かにそんな名の子いたな」
「おーい！　神谷ー。忘れもんってヤツはあったのか？」
「ああ、あった。このノート」
今度はジャンプしないで　梯子使った。足がしびれるし。
とりあえず真中に渡すと、真中は首を傾げてた。何でも名前も知らなければ、容姿も全く記憶にないとの事。
「クラスメートくらい覚えとけよ……って、言いたいが、オレもピンと来てない。……あんな状況だったし、はっきり顔も覚えてないし」
「それを言うならオレだって殆ど一瞬だったぞ！　夕日に照らされて、捲れるスカートしか！」
「おーい、それ以上言わん方が良いぞ。オレも男だし、判らなくも無いけど、口に出して言ったら変態だ」
「オレは芸術を求めてんの！　そっち系じゃない！」
「大声で否定してもボロが出るだけだから。良かったな？　ここにいるのがオレだけで。……真中の性癖はオレの胸の中に留めとくよ」
「違うっっーの!!」

これが　ちょっとした事件だ。
オレにとっては、突然の救出劇。無事助けれたらクールってもんだ

が、何でか失敗した。
それで真中にとっては　突然美少女が空から降ってきて、スカートめくれて　いちご柄のパンツが見えた衝撃シーンの目撃者。
1つ間違えばあの子だけじゃなく、真中も怪我したかもしれない状況で、誰も怪我が無かったのは良かったと思うんだけど……、妙な火が真中についてしまったのが、面倒かもしれない。あの後、何度も同意を求められたから。
逆光の中振り向くシーンが最高とか、夕日と美少女といちごパンツのマッチアップが最高だとか。どの映画よりも美しかったとか。

もう、最後の方は　オレを変な世界に引き込もうとしてるとしか思えなかった。
ノートに関しては、真中が渡したい、って言ってたんで　よろしく頼んだ。……とりあえず釘刺しといたよ？　犯罪者にはなるなよ、と。

「やれやれ……真中の空想癖も困ったもんだ。周りに誰もいなくて良かった」
「そうだねー。誰も周りにいない方が良いよね？　キミとっては」
「はぁ？　まぁ　確かに1人は好きだけど、何か含みのある言い方だな」
「えー。だってさ。キミ逃げちゃうじゃん。逃げちゃったじゃん」
「何でオレが逃げるんだよ。……って」

ようやく気付けた。こんな事ってそれこそ映画とか漫画の中の話だって思う。
普通に独り言を言ってる最中に自然に会話の中に紛れ込んできてた。違和感が無かったから、思わず続けちゃったけど……一気に悪寒が走ったよ。いつの間に、後ろにいたのか判らないし。

「よーーやく、見つけたゾ!?　何で逃げたんだよー!」

後ろにいたのは、あの時　最初に屋上で出会った少女だった。

あれ？　でも髪が短くなってる？

5話

「質問を質問で返すのは悪いと思うが……。何で追いかけてくるんだ？」
「キミが逃げるからだよ」
「……」

確かに、逃げた理由は勿論あるんだけど……、だからと言って追いかけてくるか？　と聞かれたら　オレなら首を横に振るよ。

それより、いつの間にか後ろを取られただろ。いやほんと　いったいいつの間に……？
何処で修行を積んできた忍者ですか？　君は。　……いや　女の子だから　くのいち？

「まぁ……それは兎も角。……はぁ」

オレはとりあえず深く深呼吸したよ。色々とあって今日は疲れてたって言うのもあるし。いや　でも深呼吸、と言うよりため息か？
多分　ちょっとそこもイラっ　と来たんだろう。頬がぷくっ　と膨れてた。『私、怒ってますよ！』とまた言われてるみたいに見える……。
オレ何か怒らせたかな？
「あっ！　もー忘れてるんでしょ!?　キミは私の……見ただろっ！」
「ああ、いちご柄の」
「わぁっっ!!　もーーー！　柄まで言わなくて良いだろっ！　このえっちっ！」
「……あ、いや悪かった。今のは失言だ」
実にタイムリーだ。
あの屋上で、見た（見てしまった）彼女のパンツだけど、彼女のもさっきの東城って子と同じくいちご柄だった。真中のヤツが　いち

ごパンツパンツうるさかったから、思い返してしまった様だよ。……ひどく間の悪い事に。
「むー……」
「どうどう。うーん……。……まぁ　確かに　オレが見てしまったまでの過程はとりあえず置いて。君に恥ずかしい想いをオレがさせてしまったー、と言えば……。……うーん。……うぅーん……」
「すっごく恥ずかしかったんだよ？『あれ？　オレの何処が悪いのかな？』って顔しないでよ！　もうっ」
うん。とりあえず……。

～勝手に近づいてきて、驚いて転んで　その拍子にスカートめくれて、中が見えてしまった～

短くまとめたらこんな所で　今思い返しても、彼女がピタリと当てる様にオレが悪いとはどうしても思えない。
でも、今後も続くんであれば、はっきり言って　オレは穏便に済ましたいって気持ちの方が強い。
「詫びるよ。ほんとごめん」
謝る方が早そうだ。例え非が無いって思ったとしても。

「うんっ。よろしい！」

それが正解だったのかな？　彼女　あっという間に笑顔に戻った。
んーと、今まで気づかなかった……とは言わないけど　彼女　にかっ　と笑う顔は、お世辞抜きに可愛いい。いや　怒ってる膨れた顔も、慌ててる顔も……。寧ろ全部が。
「それじゃあな。オレこっちだから」
まぁ　可愛いのは判ったけど　これ以上話す事も特に無いので帰ろう、って事でくるりと向きを変えた。ちょっと家までは遠回りになるけど……　まぁ良いだろ。ちょっとだけだし。

でも、帰る事出来なかったんだよな、これが。

「待ってよー」

「うん??」

がしっ、と肩を掴まれてしまったから。前にも言ったけど　女の子相手に振りほどいてまで……　はしたくない。ま、命の危機とか感じたら別だけど。今はそこまでは無いだろ？　……多分。

「ねー。キミってほんとに歌うまいよね!?」

「……」

パンツのおかげで忘れてくれた？　って想ってたんだけど……それは希望的観測に過ぎなかったみたいだったよ。

「えへへ。実はね。その……見た事に関しては私怒ってないよ？だって、キミが言った様に　ぜんぜん悪くないじゃん。私が近づいて行って　ころんじゃったんだから自業自得っ！」

実に、実にオレが言いたかったセリフを見事に代弁してくれたよ。……今更だけど。

「でも、やっぱ女の子の見たんだから、それなりにー……ね？」

「悪かった。悪かったから。その話題から離れてくれ……」

今はほんとに間が悪い。真中から散々　『パンツは良い』って言い聞かされて洗脳タイムに入ってしまったから、変に考えてしまいそうだ。

「あははっ　キミって最初からあんまり興味無さそうな顔してたのに、今さらだよ？　顔赤くなるのっ」

胸元あたりを人差し指でつんっ　と突っつかれた。

正直、女子とここまでのコミュニケーションは取った事ない。いやスキンシップかな？　慣れもないからかな、どうやらオレは顔が赤くなってるらしい。

「そりゃ、オレだって健全な中学男子。女の子に、それもアンタみたいに可愛い子にそう言われりゃ反応だってするだろ？　仕方ない事だ」

「……へっ？」
ん？　なんできょとんとするの？
……あぁ　可愛いって言ったからかな。ストレートな褒め言葉って　大体は引かれるか照れるかの二択しかないって聞いた事あるよな。
この場合どっちだろ……？
「うー……（他の男子にいろいろ言われてるけど……　な、なんでかな？　この人に言われちゃったら、ちょ、上手く言葉が……）」
「んー……（引いたかな？　それとも照れ？　……夕日のせいで顔色が判らん）」
色々考えてる時間がちょっと長かったせいだろう。暫く沈黙が続いたよ。時間はもう夕方で人も誰もいない静かだからか、余計に感じてしまう。
「ま、まぁ　ありがとね」
「うん？」
「その、可愛いって言ってくれて！　どーも、って事！」
「ああ成る程……」
この場合……照れた　の方かな？　でも見た感じ、接した感じではサバサバしてる様な性格みたいだから　ちょっと判りにくいな。
「んじゃあ、これでほんとに「待ってって！」……」
今度は、ふふんっ　と得意気な顔してるよ。
そう言えば彼女　心を読む様な力があるんだったっけ？　オレの意図気付かれたかも……。
「歌の話にもどすからねー。お願いを訊いてあげて　確かに話題は変えてあげるけど、　歌の話題の方は変えないからねー」
「……はぁ」
そうだよ。話題を頑張って自然に変えよう。小宮山の様なあからさまじゃなくて、極自然に変えつつ、そのまま帰路に～　っていうのが、オレの下校プランBだったんだけど、ものの見事に撃墜されてしまった。
ぱんつの話題とそれとなく合わせて歌の話題も一緒に消そうと

思ったんだけどなぁ……。駄目だったか。
「そんなに嫌(や)なの？　歌の事話すの」
「……いや、なんつーか……、恥ずかしいだろ？　屋上とかで　1人で歌うたってるーなんて　痛いヤツ～みたいで。それも聞かれてた事も知らないでさ」
　頭がむず痒くなってきたから、掻き毟った。
　……強くし過ぎてちょっと髪の毛が抜けちゃったよ。
「でもさー。とっても素敵だったんだよ？　私　キミにすっごく興味が出てきたのだって、ここまで追いかけてきたのだって、切っ掛けはキミの歌だったから。何だか、聴き入っちゃってて……、その　どういっていいのか判んないんだけど、……感動しました！　ってヤツかな？」
「……どういうか判んないって。判ってるじゃんか……」
「あははっ　また照れたね？」
「夕日のせいだよ。顔が赤く見えるの」
「ふーん。じゃあ　そう言う事にしておきますか」
「そう言う事にしといてください。よろしく」

「あはははは！」
「……ふふ」

　何だろうな。最初は直ぐに帰りたかった、って気持ちが強かったんだけど　話してる内に楽しくなってきたのかな？　さっきまでの疲労感が少しずつだけど和らいでくみたいだ。

「私、西野。西野つかさ！　えーっと、キミの名前は？」
「ん？　ああ、そうだったな。そう言えば名乗ってなかった。……オレの名は……って、え？　西野？」
「え？　うん。そうだよ？　私の名前は西野つかさ」
「……」

真中レベルって言われるかもしれないけど、基本的にオレも女の子への興味ってヤツは希薄って言っていい。あれだけ小宮川が熱弁をふるってて、それ以外にも他のメンバーも　その手の話題になったらほぼ１００％西野の名前があがってたんだけど、見に行ったり、顔を覚えたりはしなかったから。
それに多分、転校してから一度も会ってない筈だし。
「ん？　どうしたの??」
「あぁ、いや。可愛いのも納得って思って。確か『学校一のアイドル』ってオレの友達も言ってたし」
「わーわー！　恥ずかしいってば！　そんなの本人を前に言わないでよー！」
むぎゅっ　と手で口を塞がれてしまった。
「だっふぇ、けっふぉ　ゆうへぃ……」
「恥ずかしいってば！　素直に口塞ぎなさーい！」
「ふぃふぃ」
中々塞がれてたら上手く声出せないから、最後は首を縦に振って意思表示。
彼女、西野は今回は間違いなく照れてるみたいだ。
「むー。キミって　そう言う事簡単に言っちゃう人だったの？」
「んー……　どうだろうな。家族を除いて、ここまで話し込んだ異性って、アンタが初めてだし」
「へぇー……そうなんだ（たらしじゃないって事かな。嘘言ってる様には見えないしなぁ……って）もう。私は自己紹介したんだよ？　返してくれないなんて、ずるいよ」
「ああ、ごめんごめん。オレは神谷。神谷蓮」
名前に関しては　親が花が好きでそこから～　とかまで言いかけたけど止めた。
そもそも、なんで言いかけちゃったのか判らないな。自分の名の由来なんて他人には関係ないことだし。
「神谷……蓮……？」
「そ」

西野は、何だかオレの事まじまじと見て考えてる。
さっきも言ったけど　オレだって健全な男子中学生なんだって！
……恥ずかしいって。

6話

私、こんな気持ち初めてだったんだ。

あの日　ほんとに屋上に行ってみて良かったって思ってるよ。ユリが怖がりだった事もこの際　感謝かもしれないね。ユリと2人で行ったら……きっと　ああはならなかったと思うから。

あっ！　でも　ぱんつ見られた事は良かったなんて思ってないからね！

って、今は違う違う。そんな事じゃないやっ。

えっとね、今日学校に来て　時間が許す限り結構歩き回ったと思うんだ。流石に別のクラスに入って言ったりはしないけど、あの男子を頑張って探してた。ユリやほかの友達にちょっと変に疑われたんだけど、それ以外はいつも通りに振る舞ったつもりだったよ。

他の男子たちが近づいてきて、あしらったり、テキトウに流したりしつつ、あの男子を探したんだ。

あの夕日の中で聴こえてきたすっごく綺麗な声。

男の人なのに綺麗って言葉が一番しっくり来たし、また聴いてみたいってずっと思ってた。

でも、それだけじゃなかったのかもしれないかな。ただ歌が聴きたいだけじゃなかったかも……。また　会ってみたいって思ったかも……だね

それでどうにかあの時の男の子！　見事に探し当てる事が出来たのだった！　私凄いって自分で自分を褒めちゃえた程だよ？　屋上も行ってみたけどいなくって、今日は諦めるかな～って思ったんだけど、その時ピーンっ！　と何かが来たんだ。いつもなら左に曲がる。だってそっち以外じゃ完全な遠回りになっちゃうから。でも、その時は違ってね？　何だか『右に曲がった方が良いよー』って私の

中で。
そしたら、いたんだ。あの時の男の子が！
間違いないよ？　だって　逃げる時の後ろ姿　実はあの後しっかり見たからね。あの時は　消えた～って思ったんだけど、人間そう簡単に消えれるものじゃないし。　足は速かったけど、後ろ姿はしっかりと見てた。
声だって間違いなかったし。
うん。最初はやっぱり嫌々って感じだったけど、粘りに粘って、とどまらす事が出来た。それに沢山話す事が出来たよ。その、可愛いって言ってくれた事は……恥ずかしかったけどさ、ほんとに嬉しかった。
それに私の事をよく知らない男の子とこんなに話すのって結構珍しい事なんだ。えっと、知られてるって事、別に自慢って訳じゃないよ？　正直沢山男子が来て話したってあんまり嬉しくないし。それだったら、友達の皆と話したり遊んだりする方が断然楽しいし。
それに……彼と話す方が凄く楽しいから。
それでお互いに自己紹介をし合う事になったんだ。それで……名前を話した途端に　目を白黒させたかと思えば　また……か、可愛いとかアイドルとかって言ってくれた。嬉しい事は嬉しいんだけど、そんな気軽に口に出てくる男子って　正直キザって感じがする。要は口だけ男みたいな。そんな子結構いたし。私の事は色々と褒めてくれる癖に　他の友達の事は見下した言い方したりするヤツもいた。……そう言う系の上辺だけ男ってぜんっぜん信用出来ないから。
でも、彼は違ったんだよ。『家族以外の異性とここまで話した事ない』って言ってて、きょとんとしてて、　嘘言ってる様にぜんぜん見えなかった。うん、色んな意味で正直者って事なんだよね……。私の事　可愛いって言ってくれた事もそうだけど、……私のパンツの柄まではっきり言ってくれた事も含めてっ!!
まぁー私に非があるし　あまり怒ってないって言った以上　これ以上蒸し返すつもりはないけどね。彼が正直に言って来たら別だけど。

それで、びっくりしたのはここからだったよ。
「えと、神谷蓮？」
「だから、そうだって。ちょっと近い、近いって」
離れる様に言われて漸く私、結構近付いてた事に気付けたよ。だって、彼と一緒だったから。名前は知っててもｔ会った事も見た事もないって所。
「あはっ。似た者同士だねー」
「うん？　どゆこと？」
「あのね、私も知ってたよ。キミの名前。……キミも人の事言えないじゃん」
「???」
ほんと面白いくらい、頭に《？》が浮かんでるのが判るから、更に笑いを誘われちゃうよ。ほんっと、顔に出るよねー。
「えっとねー。女子の間じゃ結構有名なんだよ？　キミ」
「……は？」
今度はきょとんっ　と首を傾げてる。なんだか小動物みたいで可愛かったりするよ。キミの方がさ。
あっ、何か思いついた顔した。
「ああ、なるほど。……オレって結構大草と一緒にいる事が多いから、おまけ、みたいな感じで知られてたって事か？　大草のアドと番号訊いてみて～　って感じの要望も受けた事何度かあるし」
口許に指をあてながらずばり推理してる。何処かの名探偵のつもりかな？　だけど残念だったね。その推理は外れです。
「ぶー。ざーんねん。キミ自身に興味がある、って話題だよ」
「……☒　転校生だから？」
「え？」
「だから、転校生だから？」
転校生だったんだ……。あ、そう言えばそんな話もしてたかも。忘れてた。
「それも違うよ。だから、キミも女子に人気があるって事だよ。あ、

ひょっとしたら　私なんかよりもずっと有名かもね」
「それは絶対無い（あってほしくない）」
　あ、何だかまた嫌そうな顔した。……色々と騒がれるの嫌っぽいんだね。世の男の子にとっては嬉しい事だーって何処かで訊いた事あるんだけどなー。
　彼は彼って事かな？
「ふふっ、蓮ってほんと面白いね？」
「……オレに言わせれば、そっちも何だが。（追いかけてくるなんて、見ようによっては相当……と思うし。ん？）って、いきなり呼び捨てとは随分と踏み込んだな」
「だってもう知らない間柄じゃないし、良いじゃん。私のこと　つかさって呼んでくれていいからさっ」
「それも謹んで遠慮させてもらえないか？」
「えー、なんでそんな丁寧に拒否するんだよ」
　私の名前に不満でもあるのかー　って思っちゃったよ。つかさって名前私は好きなんだけど……。そりゃ　男の子の名前っぽいと言えばそうかもだけど。
「本人に実感が無いのはお互い様かもしれんな。オレも言われても正直信じてないし」
「どういう事？」
「オレが名前で親しく呼ぶとして、それが男子生徒諸君らの耳に入れば、……どうなるか火を見るより明らかって事だ。……謂れのない嫉妬やらイヤガラセやらのオンパレードだ。つまり（もう、普通とは程遠くなってしまうって事だよなぁ……）」
「むー……」
　そんな事ある訳ないよ！　と言いたいんだけど……ちょっとしつこい人がいる事は確かだし。そう言うヤツってほんと何するか判んないし。
「なら、私が蓮の事を呼ぶのも危ないのかもねー？　他の子達に嫉妬されちゃうよ」
「それは絶対ない」

「その言葉、そっくりブーメランだよ。だって　私もそんな事無いって思ってるし」
「……」
　話は平行線になっちゃったよ。でも正直一部の男子は判んないんだけど、そんなオンパレードって絶対言い過ぎだって思ってるし。
「……苗字で頼めない？　オレは西野って呼ぶから。神谷で。」
「むむ。……判ったよ」
　でも、何だか納得いかないから、最後はこう言っておこうって自然と思ったんだ。
「今日の所は判ったよ。か・み・やくん」
「……」
　あー何でかな。ちょっとすっきりした気分かも。
　蓮って　他の子達が言う様に、断然大人っぽいんだもん。顔に出やすいんだけど、何となく雰囲気と言うか佇まいと言うか、そんな感じがするんだ。それにそこが蓮の人気ポイントらしいし。今までだって、なーんか色々とリードされてるって感じだったし。そういうのは性に合わないからね。
　えへへ。舌でもぺろっと出しとこっと。
「（はぁ……、ザ・○ールド！　って言ったら時でも止まらないかなぁ。いや　戻ってほしいから　○イツァ・ダ○トか。……まぁ言わないけど）んじゃあ、またな西野」
「えへへ。うん。また学校でね？」
「ああ。（会っても逃げよっと……）」
「あ、逃げたら名前で呼んじゃうかもだよ」
「……心読まないでくれるか？」
「あはは。蓮が判りやすいんだよー」
　やっぱり面白い。蓮と話すのすっごく楽しい。
　んー、今日の所はって言ったんだけど……やっぱ　蓮の方が良いな。
「……今日のところは～って言っといて早速だな」
「あ、あはは……つい、ね。その……やっぱり　２人の時だけで良いか

ら、蓮って呼んじゃ駄目かな？　学校は　少ーしだけ自重するからさ」
「うーん……。まぁ学校以外なら……。ってか　信用できるのか？」
「わ、何だかひどいな！　まぁ　早速破っちゃった私もアレだけど。ちゃんとするからさ。なるべくね？　だって蓮と話すの楽しいから。……蓮は楽しくない、かな？」
「っ……。あのなぁ。そう言う言い方されて、『はい、嫌です』って言えると思う？」
「蓮なら言いそうっ♪」
「……言うと思った」
　時間ってアッと言う間なんだね。楽しい時間は本当にあっという間。携帯が静かに震えたんだ。多分、お母さんからだと思うし、心配はかけたくないし。
「もう時間も時間だし、そろそろ終わりにしないか？　……もう逃げたりしないから」
「っと。あはは。それは本当っぽいね。うん。ちょっと名残惜しいけど、私もちょっと用が出来たみたいだから」
　携帯を見せて言ってみたけど、『番号教えてー』って言わないかなぁ？　……言わないよね。
「あぁ。じゃあな、西野」
　やっぱり……。
　ん、まぁ　良いや。今日の所はほんとに……。
「じゃあね！」
　送ってくれる～って言うのもちょっと期待したんだけど。それも良いかな。……今はね。

家に着いたけど　ほんと　まるで嵐の様な時間だったよ。嵐～なんて生易しいかも。ありゃ大型台風。暴風雨って言っていいかもだ。
ま、楽しかったって言えば楽しかったんだけど。
「とりあえず……、明日ちょっと心配。まぁ　自重するって言ってるし、……西野もあんまり無茶はせんって思うし。そう信じたい……かな」
少しばかり不安はあるけど、ずっと普通をー平凡にー、って考えてた自分が変わりそうな気がするって思ったり？
まぁ、それは難しいか。だって　オレがそう思い始めた理由って……。
「おっかえり～～！　どーしたの蓮ー。随分遅かったけどー？」
「……お出迎えに抱擁しようとするの、やめっ！」
「えー、良いじゃん良いじゃん！　姉弟のスキンシップだよー。こんなの普通だって！」
「ウェイト！　ステイ！　ゴーハウスっ！」
「ふふーん。お姉ちゃんを調教しよう～なんて、過激なんだから～♪」
「……」
「わー。無視していかないでー！」
これのせいだ。
絶対……。
あぁ、歌の事も　ある意味はこのブラコンのおかげって事もあるか

もしれないな。
歌に関しちゃ、コイツ冗談抜きで天才だし。……まぁオレにとっては、天災かも。
自分で言っといてなんだけど。

うん。面白くないな。

7話

「じゃあ行ってくる」
「いってらっしゃいのキッスをっ♪」
「あ、かーさん　今日晩飯は良いから」
「蓮は私とディナーだもんねー♪」
「ああ、後明日の朝なんだけど、体操着がいるから。あ、でも勝手に洗濯機使うから」
「いけず～～!!」
　多分、何にも知らない人がこの会話を訊いたら、まず間違いなく耳を疑うだろうな。
　テンションがおかしい、って思うかもしれんけど　コレのテンションは年中変わらない。それこそ常にテンションＭａｘのバーゲンセールだ。
「こらこらこら。愛ちゃん。蓮を愛でるのは良いけど、事務所から連絡来てるよ?」
「えー、蓮と話してるから、待たしといてよ。お母さん！」
「もう、マネージャーさんを困らせないの」
「……母さん。止めるならもうちょっと激しめでお願いするよ」
　母さんとの話しから大体判ると思うんだけど、我が姉の職業は……まぁ　世間一般で言う万能型のアイドルってヤツだ。多分、間違いなく世の男であったら、オレを羨ましがるって思う。そりゃ　アイドルクラスの美少女と同居だとしたら、オレだって良いじゃん！　って思うかもだし。
　だがしかし‼　考えてみてもらいたい。オレ達は家族。姉弟。血がつながってない～とかの義姉弟とかじゃないんだ。
　この姉を前にすれば、羨むより同情して欲しいわ。この女、下手したら人類の三大タブーの１つを大喜びで犯しそうだから。

テレビ番組かなんかでのトークタイム時『将来結婚してみたい人はどんな人??』的なＭＣの質問に、１００万ﾄﾞﾙのスマイルで『弟です！』って大声で叫んじゃったんだよ……。

ちょっとしたユニットと言うか、ツッコミ要員と言うか、相棒と言うか、そんな感じの人が痛烈なツッコミを入れてるのを見て、アイドルと言うより芸人さん？　って思った程。

そんなキャラだから、大御所にも気に入られた～とか、特番で出る～、とか　話しがワールドワイドになっちゃってて、非常にオレにとってはヤバイんだ。色々と追っかけとかがきそうだったし、母さんの方の爺ちゃん家に行ってて　難を逃れたんだけど　取材が来た事だってある。

テロップとかで『噂の弟くんの所在は～～……??』

って番組で流れた時はほんと肝が冷えたよ。妙な演出とかも加わったりして　期待感も出てくる様に煽ってる。うん、他人事なら面白いかもだが。全くをもって面白くない。ただただ激しく安堵したのを覚えてるよ。

抜け殻気味だったのを、婆ちゃんが慰めてくれたのも良かったかも。多分、理由は判ってないと思うけど　それだけでも十分さ。

色々と多感な時期って自分ながらも思ってたけど、そんな中で　身内に強烈な爆弾がいたから、あれだけ普通を求めたんだろうなぁ……って思ってる。

ほんと、他人事の様に言っちゃってるけど、ただの現実逃避だから。

「んじゃあ、行ってくる」

「蓮～！　ホテルとか取ってるんだけどー行こうよー。ほら、蓮が好きって言ってたフランス料理とかバンバン出てくる一流レストランもあって、他にも好きって言ってた某プロボクサーも常連さんで～会えるかもよ～？」

「……絶対行かないから」

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ心が揺らいだけど、そんな揺らぎ　姉同伴と言うペナルティがあるんなら、ただの苦行も良いトコだ。
一度、結構真面目に怒った事もある。記者さんたちの追っかけがありかけた時だったよ。本気で怒ってるの判ったからか、そこからの根回しは異常なまでに早かった。アッと言うまに来なくなったから。
……弱みでも握ってんじゃないの？　って思うくらい。
とりかえず……、朝っぱらから疲れた……。

外の空気は新鮮で美味い。うん、心が癒される気分ってもんだ。
「おーい！　はよー、神谷！　なーに猫背になってんだよー」
でも、やや猫背になってるのは、少しどんよりとしてるって事かな。
「はよ。そっちは朝っぱらから元気だな？　真中」
「そりゃそうだろ！　いちごパンツの美少女の事がやーっぱ忘れられなくてよー」
「朝からぱ……」
さいごまで言いかけたけど、何とか口を噤めた。
毒されてる、ってマジで思っちゃったから。
「なぁ、神谷も見たのか？」
「何かその訊き方嫌だな。オレを共犯っぽく言わないでくれよ。大草」
因みに、大草や小宮山も一緒だ。家がそばだからか、結構この４人で登校が多い。
「なんてゆーのかなぁ、空から舞い降りた……まるで天使？　逆光の中で少女が振り向いたシーンとかがやっぱオレの中では――」
真中は周囲とか関係なく、自分の世界に入っちゃってる。
昨日、あれだけオレに語ったのに　まだ語り足りない、って感じだ。
……でも、こういう強い強い芯を持つ様なヤツって　映画監督に向いてる様な気がしなくもない。表現物にはそれぞれ作り手の個性が出るし、それも大事だろうと思うから。
「あーあ。始まったな……」

「いつもの事だろ？」
「んあ、でもあの空想癖はいつもよりは強烈って思うぞ、オレ」
「小宮山が言うなら相当だな……」
「どーいう意味だ!!」
　とりあえずまぁ、周囲にはオレ達以外に誰もいないのは良かったって思うよ。……あんなの皆に見られたら目立って仕方ないって思うし。
「でも、パンツってのは置いといたとしても真中があんなに興奮するって事はよっぽど可愛かったんじゃないのか、神谷？　アイツ、ある意味お前よりそういう手の話しないじゃん」
「ある意味ってなんだよ」
「ん？　たまに神谷って女子と話してるし」
「ぜーんぶ、お前のとばっちりなんだけどな！　もう、黒板に大きく書いといてくれよ。メアドとか、番号とか」
　西野が言うには……、オレに人気があるらしいけど、まーったく信じられないんだなこれが。大体が『大草君も誘って～』とか、『大草君とどこ行ってたの～～』とかばっかりだったし。
「いやいや。流石にそれは……。ふっ、オレは女の子に頼まれたら断らない主義なんだけど、皆判ってないのかなぁ……」
「誰と話してるんだ？」
「さぁ、多分　ＰＣ（画面）の向こうの人達とだろ」
　真中ほどじゃないけど、大草もたまに変なトコある。ナルシスト～ッ気があると言うか、何か決めポーズを取りながら実況したり説明したり。……正直、そう言う場面に限っては残念イケメンって感じなんだけど、女子ウケは抜群だから　主に男の意見だ。あんまり大きく言うと　僻み～って言われそうだから皆気を付けてるけど。
「おっと、話しを戻すぜー神谷～。どれ程美人だったんだよー」
「うん？　ああ、オレは会ったんは会ったんだが……状況が状況だったし、そんな余裕無かった」
「「ん??」」
　大草と小宮山に多少は端折ったけど大体の事を説明した。

「落ちそうな女の子助けるなんて、王道だねぇ。とうとう神谷もこっち側に来るかい？」
なんか、大草が　ずりっ！　と踵で地面にラインを引っ張って　小宮山とか真中を置き去りに　引き込もうとしたけど、ご生憎。
「謹んで遠慮させてもらう」
「丁寧に話すときって結構嫌がってるよね。お前って……」
しれっとスルーのつもりだったけど、何だか大草苦笑いしてるし。
「それはどーでも良いんだけどぉ～　なぁ、蓮くん～」
「……君づけ止めろ」
「名前とか知ってるって言ったじゃんか。教えてクレって～」
「おっ、オレも知りたいな」
「ああ、名前ね。確かにそれは知ってるけ「ちょっと待った！」んあっ!?」
さっきまで妄想空想ワールドに入ってた真中だったけど、帰還したみたいだ。
「小宮山レベルの顔のヤツならともかく、大草には止めてくれよ。大分モテてるし、教えたくねー」
「変に嫉妬すんなって……。それくらいで」
「ゴラァァ!!　そこをさらっとスルーすんな！　どーいう意味だよ！　オレレベルの顔って!!!」
こんな感じで朝っぱらから結構賑やか。
朝の家の疲れも忘れられるから、ある意味ではこいつらには感謝してるかもな。

でも、最終的には名前を公表したよ真中が。
受験シーズンだからって事と、大草は協力をする～って言い出した事もあって了承してた。
確かに勉強に身が入らないのは正直きついんだろう。真中って泉坂に行きたいって言ってたし。あそこ、結構難易度高いからな。
「それで東城綾って名前なんだけど、知ってる？　オレらのクラスな筈だけど――」

女子の名前を言ったら2人ならまず間違いなく知ってるだろ、って真中の読みは的中するよ。2人は詳しいから。
でも、さっきまでのテンションが急に下がったのはちょっと気になる。
「東城……？　ああ」
「いたような気もするな、そんな名前のヤツ」
大草は、女子の事ならノータイムで言うんだけど、ちょっと少し考える仕草をして遅れた。小宮山に至っては「ふーん」って感じ。女子の話題なのに。
そして、その理由も直ぐに判明する事になる。
「ええっ！　いんの？　うそっ!?　いやー　オレって女子の名前と顔、いまだに覚えられなくってさぁ！」
「他人の事言える筋合いはないってオレでも思うけど、もう直ぐ中学卒業だろ？」
「何言ってんだよー！　神谷だって1年は一緒だったじゃん」
「……仕方ないだろ。クラスの人数だって、前んトコよりずっと多いんだから」
と、2人で暫くそこそこ盛り上がりつつ話してると……、大草が神妙な顔をさせて真中に言ったよ。
「残念だけど、そのノートの持ち主はいちごパンツの美少女じゃないと思うよ。間違えて持ってた、とか借りてた～とかじゃないか」
ま、オレは別に気にしないし、ノートは真中に預けたから義務感ってヤツも譲渡したようなもんだし、違ったって別に深く考えてなかったよ。
ああ、話は変わるけど大草の話を訊いた後の真中の顔はちょっと面白かったかな。

8話

まぁ　真中は違うって言われたからって『そうですかー』と引き下がる様な性格じゃない。
「わかんねーだろ！　ちゃんと確かめてやる！　同じクラスなんだったら直ぐだ！」
と意気込んでいるんだけど……空回りしそうな気がするな。
あ、走っていった。
「そんなに可愛かったのかなぁ……。あそこまでの意気込みだし」
「映画と連動させてるからだと思うな。今の真中」
「あ、それはオレも思う。アイツの中じゃ東城綾ってヤツは美少女だし。……ま　実物見たら１８０度変わると思うけど」

小宮山の意見でも　たまには当たるってもんだったよ。
学校に着いて、真中は東城って子に会いに行ってたけど　その表情メチャクチャ引き攣ってたよ。頭の中のイメージが一気に崩れたって感じだ。

でもはっきり言って、正直失礼だと思うのはオレだけか？

幾らイメージが崩れたからってあからさまに表情に出さなくても良いのになーって思う。
「あたしの数学のノート拾ってくれたの!?　昨日からずっと探してたのー。ありがとう、真中君っ！」
それに　お礼を言ってくれてるんだから無反応なのはおかしいだろ？

と言う事で　とりあえず、真中の隣にいたから、反射的に肘打ちしたよ。
「痛てっ！」
「いやいや、自分で言っておいて無視するなって」
「っ！　ま、まぁ　そうだな、そーだよなぁ……」
意気消沈って言葉が一番しっくりくる。それ位意気込みが強かったって事が判るからなぁ。あの時。
「ああ、でも良かった見つかって……」
真中の顔を東城が見てなかったのがせめてもの救いだよな。うん。
でも……両手に持った荷物が気になる。ノート見つかった事が本当に嬉しかったのかな？　随分と喜んでるから落としそうだ。
って、考えてる傍から。
「ほっとしたよぉ……って、きゃっっ！」
ほっ　としたせいか、手に荷物持ってるの忘れちゃったらしい。
元々不安定気味だったし、ちょっと気になったから。
「おっ……っと」
何とか、落ちる前に間に合ったよ。
プリントの束だったから、弾みで何枚かは落ちたけど大参事だけは免れた。結構重いし、落とさなかったの奇跡だ。
「わっ　ありがとー。えと　神谷くん」
「いや。構わないよ」
「ナイスキャッチだな……。ああ、ほら　まだ落ちてるぞ……」
真中も何かして気を紛らわせたいのだろうか、せっせと落ちてるのを拾ってくれてるけど、今朝までの覇気は何処に行ったんだろうなぁ。
「（確かに別人だよなぁ……、記憶にないってのもうなずけるよ……、こんな地味ぃ～～な女子だったとは……）」
「よ～いしょっと！」
「うげっ！」
とりあえず、ずっとしゃがみ込んで通行妨害してる真中のケツに向かって軽く前蹴り。

「痛いな！　何すんだ！」
「いやいや、いつまで座ってんだって。邪魔だろ？　もう　紙落ちてないし、一体何探してんだ？」
「あっ、いや……そ、そーだな」
まるで　イジけてるみたいだし、それに　真中の顔みたらよく判る。『別人だ……』って明らかに思ってる感じが。
まぁ、流石に東城の前でその追及をするつもりはないケド。

それに、オレは大体判るんだ。

何がかって、多分　東城があの時、屋上にいた子って事で間違いないって事。
朝、大草や小宮山にマジマジと見たつもりはないから、って言った事は嘘じゃないけど、結構切羽詰まってたとは言っても顔はしっかり見てる。
確かに雰囲気は全然違うけど目とか鼻とか口とか、それが変わった訳じゃないし。色々と頭ん中で組み替えたら……あの時の子になるんだ。

何で判るかと言うと……、身内に色々変装するヤツがいたから。

それは、黒歴史の1つでもあるからあまり思い返したくはない事だけど……。
不覚にもあの姉と一緒に出掛ける約束をしてしまった事があって、それで『これデートだねっ♡』と意気揚々、ホクホクだった。でもでも姉はメチャ有名人。かなりの注目が集まる。
そう言うの昔から嫌だったオレの事を判ってるからか、雰囲気１００％変わる見事な変装をしてのけた。化粧等も殆どせず　地味な恰好になって誰からも気付かれる事は無かった。
その日は乗り切ったんだけど……『うぅ～折角のデートだったのに。……蓮の前でもおしゃれして、手を繋いでデートしたいのに』と

メチャクチャ落ち込んでた。はっきり言ってどうでもいいケド。

その後も　何度か誘われる事があって、いつもスルーだけだったんだけど、『謹んで遠慮させていただきます』と丁重に断るようになったのはこの時からだったかな？

それでもしつこく迫ってくる時は、完全なる無視（パーフェクトスルー）をしてたよ。今朝みたいに。

兎も角、東城は七三分けにした前髪をちゃんと下ろすだけでもガラっと変わると思うって事。

「あ、あのー　それであたしのノートは？」

「おおっと、そうだったよな。ほれ真中。来た目的ちゃんと果たしてけって」

ノートを返すって名目で東城って子を確認しに来たとはいえ、ちゃんと返すべきだろう。

一応、第一発見者としては　しっかりと返す所は見届けたい、って思っちゃったりしてるし。

「そうだな。ええっとノート、ノート……」

暫く鞄の中捜索してる真中。でも、この指定鞄はそこまで大きくないから、そんなに時間は掛からない筈なんだけど、と言う事でオレは大体察した。

……名目で、とはいえノート返しに来た癖に。

「……ごめん忘れた」

「アホか」

真中が答えた瞬間に、オレ　ツッコんでたよ。察した通りだったし。

「ええ――――っ!!」

ここでちょっとびっくりしたのは東城の反応だったよ。大人しそうな印象だったんだけど、大きな声で結構取り乱してたから。

「ええっと、いーじゃん。今日数学ないんだし」
「まぁ……落とした東城にも責任あるとはいえ、返しに来たって言ったヤツが忘れんなよ……。返しに来た～って言っときながら、忘れた～～って、一体何のいやがらせだ」
「うっ……　し、仕方ないだろ。今日数学ないし……オレのノートと一緒に出しちゃったんだよきっと」
　呆れてると、東城が一歩前に出てきてた。

「ねえ真中くん！　あたしの……なか、見てないよね？」

　色々と誤解を招きそうな言い方だと思うんだけど……、まぁ　ノートの事だろう、きっと。
「え、えっと……、ノートの事？」
「うんっ！　そう！」
「あ、ああ。見てないけど」
「おねがい!!　絶対絶対、絶ッッ対に中、見ないで！　ねっ！　真中くん!!」
　物凄いお願いの仕方。
　この言い方じゃ、誰だって気になるけど……、まぁ　所詮はノートだろう。誰かの悪口書いたり、……うん。そんな子には見えないかな。
「あ、えっと、ほら　その……あたし　字　物凄く下手だから見てほしくないな……って、思って」
　結構な剣幕だったから、真中も呆気に取られてたみたいだけど。
「わかったよ。見ないよ」
　と約束してた。
「見る見ないの前にちゃんと持って来ような？　手にでも書いとけよ」
「うっせーな！　今度は忘れないって！」
「前に貸した漫画、帰ってきたの随分遅かったの忘れたか？　ほれ、天国先生べ～ぬ～31巻」

「う、……あ、あの時は悪かったよ」
　オレもこの時まで忘れてたけど　真中って結構おっちょこちょいと言うか物忘れがあると言うか……、マイペースなんだ。よくもわるくも。だからこの位の釘はさしといたほうが良いって思った。
「ともかくだ。東城。ちゃんと明日持ってくるし、中も見たりしない。ほら、早く行こう。鐘なるぞ」
「う、うん……。あ、神谷くん。ずっと持ってもらっててごめんなさい。私の当番だから……！」
　ずっと取り乱してたせいか、プリントの束の事漸く思い出したみたいだ。
　まぁ、オレ自身もちょっと忘れてたケド。
「いや良いって。同じクラスだし。それにコレ結構重いし、ついでに運ぶよ」
「え、そんな……」
「大丈夫だって。んしょっと」
「どわっ!!」
　とりあえず、半分程真中にパス。
「手伝ってもらうから」
「渡す前に言えよ！　危ないだろ！」
「え、えっと……、ま、真中くんにも悪いよー」
「はぁ……、ああ、良いって良いって。ノート忘れちゃったお詫びって事で」
　と言う訳で、仲良くプリント分けて教室へ向かった。
　あ、半分の方がやっぱ楽だわ。

9話

とりあえず、授業に遅れなくて良かったよ。
色々落ち込み気味の真中には正直『鬱陶しいわ！』って思ったりしたけど、流石にストレートにそうは言ってない。ちょっと可哀想な気もしたから。
大草や小宮山が言う通り、真中があそこまで入れ込んでるのは映画以外では初めてだった、って思うし　その想いが打ち砕かれたのなら……仕方ないのかな？
でも、うん。……東城には失礼だよな。絶対。
んで、今はちょっと長めの休み時間。通常の１０分より２倍長い２０分休みだから　少しゆっくり出来る。と言う訳で屋上にでも……と思って階段に向かったんだけど、昨日の今日だし、ちょっと自粛を……と思いなおしてUターンしたよ。良い場所だけど、良く考えてみたら先生とかに目をつかられちゃ大変だし。
「あっ　神谷くん！」
「ん？」
そんな時だった。東城と廊下でばったり会ったのは。
「東城さん？　どうした？」
「あの、その……もう一度お礼を言いたくて」
「プリントの事？　それなら別に良いよ、ほんとに。真中に手伝って貰ったし。……それに実は詫びのつもりでもあるんだ」
「え？　お詫び??」
そうだよ。オレが真中にノートを渡したおかげで、遅れちゃったんだよくよく考えたら。まぁ前にも考えた通り、落とした本人にも責任はあるけど、ちょっと軽率だったかな？　と少なからず自己嫌悪してた。役割を全部真中に渡した～と思ったとは言え　一番最初はオレだったから。
「いや、ノートを一番最初に見つけたのはオレだったんだけど……、真

中に渡したんだ。オレが渡しとく、って言ってたし」
「あっ、そうだったんだ……。で、でも　別にどっちが悪いって事は無いと思うよ。だって、忘れちゃう事だって誰にでもあると思うし、神谷くんが見つけてくれてなかったら、あたしのノート……見つからなかったかもしれないし」
「そっか。ならちょっと安心できるかもな。っと、そうだ。東城は大丈夫だったのか？」
「え？　何の事……？」
　もうちょっと早めに訊いといた方が良かったかもしれない。……ちょっとカマかけになるけど、オレは自信があった。
「あの時、落ちただろ？　足とか怪我してないか？」
「っ……！」
　あ、東城驚いてるみたい。
　この様子じゃ本人も判ってるって思ってなかったかも。
「え、えっと……、その、それって……」
「そ。屋上での事。……どうにか捕まえられた、って思ってたけど……、落ちたから、正直オレも焦ったよ」
　東城は、今度はさっきとはくらべものにならないくらい、大慌てで頭を下げたよいきなり。
「ご、ごめんなさいっっ！　あ、あの時助けてくれたのに、あ、あたし逃げちゃって……」
「……いやいや。別に構わないって。でも　ちょっと……こんな所で大きな声でするのは……」
　思いの外、東城の声は大きかった。それに頭を下げてるし。
　ここは廊下で、その他大勢の生徒さんたちも往来してる。目立つ事この上無いって訳だ。
「あっ　ご、ごめんなさい……」
　少しだけ小さくなっていってるけど、まぁ　大丈夫だ。
「大丈夫だって。あの場所、東城さんもお気に入り？　……隠れてて、驚かせて申し訳なかったけど、先に来てたのはオレだったから、そこん所は許してほしいな」

「いや、あたしを助けてくれたし……、許すも許さないも無いよ。えと、今度は感謝を受け取ってください。……ありがとう、神谷くん」
にこっ　と笑う東城の顔は、うん　謝ってる時よりずっと良い。皆地味地味って言ってるけど、別にそうは思わないかな。大人しそうなのは間違いないと思うけど、オレにも真中にもはっきりと返事を返してる所を見ると、人見知りって訳じゃなさそうだし。
「えっと……最終的には助けれてないけど、受け取っておくよ。ノートの件はオレからももう1回くらいは真中に言っとくから。念を押しとかないとな」
「クスっ……　漫画が返ってくるのがおくれたんだよね？」
「そーそー。……あのせいでオレ結構面倒くさい事になったんだよなぁ……」
その後は時間こそは短いけど暫く東城と談笑してた。
西野に続く、家族以外の異性との交流ってヤツかな。……今の所は特に問題ないよ。
っていうか、あまり交流が無かったのは、小学生　それも低学年時代から　姉に、『女子には気を付けろ～～　怖い生き物だからね～～』って何度か刷り込みされてたせいだきっと。
怖い云々は別にしても　交流してると姉が凄く絡んできそうだったから、と本能から判ってたからだと思う。きっと。……流石に今は学校だし、見られる心配なんかないから大丈夫だろ。
と言う訳でそろそろいい時間だ。
「さて、そろそろ予鈴も鳴るし、戻ろうか」
「うん。あ、あたし先生にちょっと用があるからまた教室で」

東城と別れて、教室に戻ろうとした時だったよ。
何時からかは判らないけど、何だか視線を感じる気がした。
気のせいかな？　って思ってたその矢先。

『違うんだよ！　オレの場合は好きとか嫌いじゃなくて！　ただ　あのコのパンツがめくれる瞬間をビデオに収めたいだけなんだ!!!』

何だか、視線とかそんな些細なのが一気にぶっ飛んでしまう様な衝撃的なセリフが廊下の隅々に響いてる気がした。
うん、空耳だよきっと！　そんな正直な男子なセリフ。幾らなんでも理性が勝つって！　考えたとしても理性が勝つに決まってる！
口にまで出てこないって！

『あっ！　違った!!　捲れるのはパンツじゃなくて、スカートね、スカート!!』

もう一度、聞こえてきた。
聞き覚えのある声……。いやぁ　とても身近にある声。さっきも何度か聞いたし、話してたヤツの声。

『パンツとかスカートとか、そーゆー問題じゃねぇだろ!?』
『わ――――っ　真中が変態だあああああ!!!』

そうそう、真中って名前だったよ。忘れてた。……も、友達止めようかな？
ガックリと頭を抑えた後、追いかけっこしてる3人を発見。
「違うっつの！　芸術なんだよ！　オレが求めてんのは芸術!!」

まぁ、確かに判る面もある。女性の裸体を描く裸婦画って言うのもあるし、芸術と言っても良いかもしれない。でも、ここは平凡な中学校。芸術美術専門学校！　なーんて肩書なんかない極普通の生徒達が集まる中学校なんだ。
そんな場所に、そんな感性を持ち込んできて……。

「そんなんで周りに弁解なんかできる訳無いだろ！」
「ぷげっっ！」
　オレは勢いよく横切りそうな真中の足を引っかけた。盛大に頭からダイブする姿を見て、少しだけ溜飲下がる。
「……欲望に忠実なのは良いかもしれんが、周囲の目を考えろっての」
「いってぇなぁ！　って神谷!?　違う違うって！　欲望じゃなくて芸術!!」
「その芸術を強く求めようとする欲の事言ってんの。傍から聞いたら普通に変態だから。……オレ、結構念を押したつもりなんだけど、真中の耳には届かなかったか……。くっ……オレの声はお前には届かないの……か？」
「何悲壮な顔して、んなセリフ言ってんだよ!!　妙に感情も込めやがって!!　知ってるんだぞ！　絶対、それからかってる時の表情と声ダロ！」
　うん。判ってるならよろしい。
　でも、お仲間だと思われたくないのは事実だった。偽らざる本心ってヤツだよ。
「それによぉ！　オレなんかよりよっぽど小宮山の方がエロいじゃねーかよ！」
「エロと変態は、正直違う気がするケド。まぁ　否定はしないな」
　矛先が小宮山に向かったと思ったら、逃げてた小宮山が引き返してきた。
「コラァァ……！　ぬぁに言ってんだぁぁぁ？　真中に神谷ぁ！　オレのどこがエロいっつんだよぉ……！　否定しろや！」
「否定なんかできっかよ。神谷の気持ちは判る！　もうそれなりに長い付き合いだ。変態でエロは小宮山の方だ!!」
「なぁ……大草。オレちょっと距離置いた方が良いかな……？」
「止めたり纏めたりする役が減るから勘弁してくれ……。唯一の常識人が減られるのは困る……」
「……はぁ」

「なら、口直しに今度合コンにー」
「断る」
「デスヨネー」
　真中は小宮山と、オレは大草とちょっとした言い合い。
　いや、真中と小宮山だけかな？　言い合いしてるのは。

「それにいつもいつも、つかさちゃん、つかさちゃん、って女の事ばっかじゃねぇか。考えてんのはよぉ！」
「んだとテメェ！　オレのは健全な感情なんだよ。つかさちゃんの魅力も知らねえくせにこの野郎～～～」
「おめぇだってつかさちゃんの履いてるパンツくらい想像すんだろぉ、布団の中とかでよぉ～～～～～!!」

　……何だか、矛先がおかしくなってないか？

「なんで、西野の話になってんの？」
「あぁ、それは　かくかくしかじかで……」

　大草に説明して貰ったけど、２人して盛大に間違えてる事に同時に気付いたよ。
　あの屋上の女の子は東城だったんだし。

「布団の中であ～～んな事やこ～～～～んな事考えて、いろいろとシちゃってんだろ～！」
「そー言う事はまじめな恋愛をした事ねぇヤツが考えてんだよ！」
「んだよ、片想いのくせに!!」
「片想いをなめるな!!　お前、誰かのことを想って　枕を涙で濡らした事があるのか!?ええっ!?」

　話しが何だか重い。……想い、じゃなく　重い。
　誰かの事を想って涙を濡らすのは……オレだってないな。う

ん。ってか、そんな事より。

「お前ら大声で何言い合ってんだよ……。せめて誰もいないトコでやってくれやこのアホ共」

「その点は、私も同感だよ。もうっ　蓮の事見習ってほしいよ」

そーだそーだ！　って思ったんだけど……、なんだろ、この感覚。つい最近も　この感覚感じた事あるゾ？　ごく自然に会話の中に入ってきてて、本当に自然に一緒にいて、違和感を中々感じる事が出来なくて驚くって展開。

「……」

一度経験したから、直ぐに反応する事が出来て良かった。後ろにいるのって絶対……。

『あはは、ごめんごめん。名前で呼んじゃった』

目が合うなりにこっ　と笑みを見せてくれる女の子がいたよ。

うん、西野だ。

後ろに沢山の男子生徒諸君を引き連れてる。……良かった。あの笑顔がオレに向けられてる、って事が判った様子はないし、皆ただただ顔を赤くさせてるだけだし。

ここの中学校の皆って結構純なんだな。直ぐに顔を赤くして。

西野は、オレの事をぐっ　と引き寄せて後ろに追いやると、真中達の前に立ってた。

それにしても、結構力強い……？

「キミたちー！　突然の告白。気持ちはとってもありがたいかもだけどぉー　ここは廊下ダゾ！　告白するなら　もっと人目につかないところでしろ！」

突然の西野の登場に度肝抜かれた事だろうな、特に小宮山。

「つっ、っっっっっっっっっ!!」
だって、口が上手く回ってないし。
「つかさちゃん!!!」
あ、漸く口に出せたみたいだ。
「も――っ　こーゆの、嫌いなんだよなぁ～～」
「つかさちゃん髪切ったの!?　いいなぁ、その髪型もすっごく似合うなぁ～～♡」
「うん、ありがと」
あ、真中も顔赤くさせてる。
……でもよく考えてみると　不思議じゃないか。西野可愛いし。結構傍で見てたら、オレも恥ずかしかったし。
「こんなヤツはほっといて！」
西野は真中の事見てたみたいだけど……、それに気づいた小宮山、真中を片手でぶっ飛ばした。相変わらずのパワーだ。
「あ、あのつかさちゃん、オレは……」
おっ、告白タイム？　って思った。あれだけ、西野の話題を出しまくってて、本人を前にそれを伝えるなんて、相当な勇気だな、と思ったんだけど……。

「悪いけど。あたし、怖い顔の男って駄目なの」

見事に一蹴されてた。
西野って、結構容赦ないんだな。小宮山に至っては、何処から降ってきた??　って思う、ドリフもびっくりな量の金盥が頭上からガラガラどっさりと振ってきて、埋まってしまってた。
「それと、夜な夜なパンツの事考えてるのはキミ？　パンツの柄の事まで口にするなんて、えっち過ぎるぞ!?　判るっ!?」
それって、オレの事も含まれてない？
と言う訳で　ゆっくりゆっくりと移動して逃げようとしてたら、西野って背中にも目があるの？　って言うくらいのタイミングで。

「逃げたらまた呼んじゃうかもしれないよ」

皆は、誰に対して言ってるのか判んないだろう。……だけど、十分伝わったよ。だって、動けなかったもん。さっきの東城の時とはくらべものにならない程の人数に囲まれてて、こんな場所で言われようものなら……、どうなってしまうのか。小宮山なんか、ゾンビのごとく復活して、襲い掛かってきそうな気がするし。

そもそも、先に約束破ったのそっちだろー！　って言いたいけど、それ言ったら火に油どころじゃなく、火薬だから止めといた。

それは兎も角　西野の言ってる意味が判らず、顔を赤くさせて固まってる真中にもう一言。

「あたしの今日のパンツはいちご模様！　判ったらこれ以上えっちな事、大声で言わない、考えない！　判ったな？」

自分でバラしちゃってるよ。

うん？　でも昨日も同じだった様な気がするケド。

それは兎も角、西野は2人に笑いかけた後　この場から去っていこうとしてオレの前を横切った時。

「また後で」

「???」

「話したい事あるから」

「何が？」

「授業始まるから　早く帰ろーっと！」

小声で話してくれたのは、良かったかも。誰も聞いてないと思うし。

と、言う訳で嵐の様な西野は去っていった。嵐が去っていったら当然の如く　この場も静かになる。男子生徒達も一緒になって消えていったから。凄まじいの一言。ここにも1人天災クラスがいたか。

「おぉい！　神谷！　手伝ってくれぇ！　この2人動かねぇ！」

「ん??　……ああ、なるほど」

大草のヘルプを訊いて、真中たちの方を見てみると……、真中は石化しつつ　顔を赤くさせて、小宮山に至っては　瓦礫の山に埋もれてピクリとも動けてない。

死んだ？

「もーーー！　おまえら授業始まるってば～！」

「オレは知らんぞー。庇ったりもしないぞ。次の後藤先生、結構なスパルタだって事判ってるくせに」

大草の大声が効いたのか、オレの脅迫めいた事実が効いたのか判らんケド、２人は何とか復活してた。

それにしても、西野の話って何？

その次の授業内容が頭の中に入ってこなかったよ。

嫌な予感　ビンビン感じたから。

１０話

とりあえず、さっき西野が言ってた『また後で』ってセリフなんだけど、西野は正確に『何時に～』と言ってないからなぁ。

ボクとしては何時アナタに会えば良いのか判らないのですよ、はい。

だから、休み時間も用事が出来たって不思議じゃないし～下校時間になったって、大切な友達の方を優先させたって別に不思議じゃない、よな？

オレは悪くないよねー？　オレは悪くねーって叫んでも良いかもだよね？

うん。絶対しないけど。

「さ、帰ろうぜ！　オレは謎が解けた！　ぜーーーったいそうだ！間違いない!!」

真中はと言うと、何でか最初からテンションＭａｘだった。固化現象解除された途端にこのテンション。

あ、実は西野じゃないって事、ちゃんと真中に教えてあげたかったんだけど……。

西野の言葉。云わば何か得体のしれないプレッシャー？　をずっと感じてしまっててて　そんな余裕皆無だったんだよ。

まぁ、学校から離れたら余裕が出来るって思うし、大丈夫だろうな。うんうん。

「どうしたんだ？　神谷。何だか表情がコロコロ変わってて変だぞ？」

「……そう？　別に何でもないケド」

「何でもないって顔じゃない、って思うケドな……。ま、無理には聴かないよ」

大草は、何やら察してたみたいだけど、はっきりとは絶対に判らないだろう。西野と面識を持った事を知るヤツはいないから。ずーっとくたばってる小宮山辺りに知られたら　ちょっと厄介だ。

でもま、得体のしれないプレッシャーをずーーっと感じるよりははるかに良いので、とりあえず帰宅準備準備。

「おーい！　神谷ー、神谷ー！　ちょっと待ってくれー」

「え？」

帰ろうとしてたら、担任の先生に呼ばれた。

行って聞いてみたら、明日の日直の件だったよ。ちょっと忘れてたんだけど、明日はオレが当番で、ＨＲが終わった後に教材運ぶの手伝ってくれ、と言う事。勿論、先生の頼みを『嫌です』なんて言える訳も言う訳も無く、了承する。だって、日直当番の仕事、皆の仕事だし。受けるのが当然だし。

「ＨＲの後、と。うん、ちゃんと覚えとかないとな」

生徒手帳にせっせと記入して、さっさと帰ろうとしたその時だったよ。

「はーい。こっちの約束もちゃーーんと覚えてるよね？　そうやって忘れないよーにしてるよね？」

ぽんぽんっ、と二度程肩を叩かれた。

声からして、誰だか判ったよ。しれーっと逃げようものならきっと、持ち前の読心術で見抜かれて『蓮ーーー！　逃げないでよー、蓮～～!!』って言うだろうな。そう、西野の性格ならな。うん間違いなく。

だけど、何となく嫌な気配がするから、振り向く動きも固いよ自分。

「よし！　今逃げようとしなかったな。エライぞ！」

「ま、逃げたら　西野サンに酷い目に合わされるし」
「ちょっとっ！　人を悪女みたいな言い方しないでよ！」
　ぷくっ　と頬を膨らませる西野。
　うん、後ろには誰もいないな。さっきみたいな大行列は。
「それにしても、何処の大名様ですか西野は。教室移動する毎についてきてるんじゃないか？　皆。まるで参勤交代だな」
「もーーっ！　それも茶化さないでよ！　アレは頼んでも無いのに、ついてくるんだから仕方ないだろっ！」
　腕を腰に当てて仁王立ちしてる西野。……これ以上言うとちょっと被害が大きくなりそうだから、直ぐに本題に。
「それで　用って何だ？　西野。……まぁ　あの時に大きな声で言わないでくれたのは感謝しとく」
「ふふっ、蓮って目立つの嫌う恥ずかしがり屋さんみたいだからねー」
「……そう言う西野は、直ぐに忘れちゃうから　忘れん坊ってヤツか？　坊じゃないか。忘れん嬢？　いや、坊って確か女子にも使えた様な」
「何だよ！　忘れん嬢って！　それに別に間違ってないぞ。今２人じゃん。学校とは言っても２人の時は～って言っただろ？」
　そう言えばそうだ。
　揚げ足取られてしまったよ……。
「わかったわかった。それで用事って？　何だったんだ？」
「……うん。えっとねぇ、蓮ってうそつきだな～って思ったから、その事のお説教を、だよ」
「……はい？」
　西野さんが言ってる意味、いまいち判らない。いまいち～どころじゃないよ、全然わかんないよ。いつだれが嘘をついたと言うのだろうか？
「ついたよっ！　蓮、あの時『家族以外の異性と交流殆どないっ』って言ってたじゃんっ！」
「……若干ニュアンス違うと思うけど、まぁ　そうだな。似た様な事言ったよ」

「それが嘘だったじゃんっ！」
「???」
　いやほんと、何言ってんの？　って素で思った。
「『何言ってんの？』みたいな顔しないでよ！　……だって、あたし見たもん！　休み時間に、……その、女の子と楽しそうに話してただろ！」
「んん？　休み時間？　女の子……??　あー」
　西野が言ってる意味、漸く理解出来た。
　そう言えば、真中達のおかげで頭ん中から速攻で抜けちゃったけど　あの時　妙な視線を感じてた。アレ、西野だったんだ。……そう言えば直ぐ後に西野着たな、確か。
「思い出したかっ!?」
「ああ。うん。……楽しそうかどうかは判らんが。でもそりゃ話すだろ。真中ってヤツと一緒に重そうな荷物持ってあげて、その礼を、だったんだ。……幾らなんでも　そんな状態でオレが無視するなんてするわけないだろ？　そりゃ、あんまり無いって言ったけど　オレから話す事があんま無い、って事で」
　確かに、つまらない会話とは言わないよ。東城と話す時もオレ自身は楽しかったし。それを他人が楽しそうな会話、ととらえるかどうかは判んないけど。……あ、西野が捉えてるから見えたのかも。
「ふーん……。そー言う風には見えなかったけどなぁ～。何だか笑顔だったし～　あの子　何度も何度も頭さげてたしー。物持ってあげただけで、あそこまで頭下げるかなぁ？」
「んー……。ああ、礼はそれだけじゃなくってだな」
「わ！　隠し事してるの!?」
「何でだ……。言う程の事じゃないって思ってたと言うか、あんまり言いふらすのもどうかと思っただけだよ」
「あ……、それは確かに。あの子も聞かれたら嫌かもだし」
　西野は頭冷えたのかな？　って思えるくらい　声色が変わったよ。トーンも。
「だろ？　ってか　何でそれ位で怒るんだよ……。オレにはそっちの

方が不思議だ」
「べ、別に怒ってなんかないよ！」
「そうか？　正直　屋上での一件より怒ってる様に見えたけど……」
「おくじょうの……って　もうっ！　忘れてよ！　あぁ、そうだった。あの男子たちの友達なんだよね？　全く君たちは!!　えっちは駄目だぞ」
　あ、また元に戻っちゃった。……これはオレのせいか。
　でも、怒らす事になると思うけど、言いたかった事があるから　ぼそっ　と。
「自分で柄をバラした癖に……」
「なんか言った!?」
「いーや。別に。ただ、西野が2日も同じのはいてる何てちょっと想像が、って思っただけで……って」
　あ、……これはマズイ。
　思わず、思った事そのまま言っちゃった……。確かにあの時間違いなく思った。真中にパンツの柄を告白した時に。
「ちょーーっ！　そんな同じな訳ないだろーー!!　な、何考えてんだよ！　ばかっ!!　えっち!!」
「あ、いや　その……」
「あたしは、その……いちごのが好きなのっ！　だから、好きだから同じの、持ってるからなのっ!!」
「わ、悪かった。今のはほんとに。……確かに、考えたらその可能性の方が高いし、わざわざ確認する様な事でもないし……」
　口は禍の門だってことわざ……、今更だけど身に染みたよ。うん。
「判ったら良いよ！　もう　蓮は考えすぎだぞ！　えっちな事ばっかり！」
「うーん……、そう言うつもりで考えてた訳でもないんだけど……、ふとした疑問と言うか、何と言うか……」
「それも何だかあたしに失礼じゃん！」
「んじゃ　どーすりゃいいんだよ！」
　互いにツッコミが冴えるね。

それにしても良かった。……この場にいるのが西野と2人だけで。他に男子生徒やらがいたら一体どうなってた事やら……。女子生徒だったとしても、色々な噂を立てられる事間違いないだろうし。
今は下校時間で　先生に会ってた時間を入れたら更に時間が経ってる。
「うぅー、なんだか　蓮に色々とヤられてばっかりだ」
「変な言い方しないでくれって」
「でも言ったのは事実だもんね！」
「わ、わかったわかった。ほんと、悪かったって。――うぅん、オレは西野に謝ってばっかだ。……それに　冤罪が多い気もするし」
そう思ったって無理ないだろ？　ぱんつ見た事だって偶然と言うか西野の自業自得。
東城と話してた事だって、別に嘘ついたつもりはない。そんなの人の捉え方で変わってくるし。
つまり失言だけだ。オレに非があるとすれば。……口にチャックだ。色々と。
「よーし。ならお詫びしてもらおうかなー」
「うん？」
「良いでしょ？　無茶な事言うつもりないよ。でも、チャラにしたげるから」
「……へいへい。西野サンの仰せのままに～」
何だか色々と理不尽気味なんだけど、……いや　正直に言おう。

西野と話すの、すごく楽しいんだ。

怒らす事が楽しい、って性格悪い様な事は言わないつもりだけど……、やっぱり色々と表情いっぱいに出して反応する西野を見たら楽しい。可愛らしいし、気さくな西野の性格も相余って更に楽しさに拍車をかけてるって感じかな？

流石に何度もそう言う事を本人に言うのは恥ずかしいから言えないけど。

「うむうむ。苦しゅうないぞ蓮クン？　えっと　それでお詫びなんだけどねぇ～」

コツっコツっ、と芝居が掛かった歩き方で、西野はオレに近づいてきたよ。

それに中々止まらなかった。

えっ、ええっ!?　って思う間もなく、滅茶苦茶近くに来たよ。

互いの前髪が触れるか？　って思える程至近距離だった。うん。近いね。

……って、いやいやいやいや！

「ち、近いって！　それぜったい近いってっ！」

ちょっと間違ったら……唇さえも合わさいかねない程の距離だよ。ドラマとかでしかないんじゃない？

オレだって男子なんだから恥ずかしいんだって！

だけど、これに匹敵するかもしれない様なお詫びの内容を西野から依頼されちゃったよ。

「蓮の歌、また聴きたいなっ？　あたしに聴かせて欲しい！」

うん。すっごい笑顔だよ。

綺麗で可愛くて、輝いてるって言えるよ？

でもちょっとね……。

歌はちょっとした諸事情。私事だけど……色々ときついお願いな

んだ。

「う、ん……。それ以外は駄目か？」

だから、内容の変更！　その要望を出したよ。思いっきり。

だけど――　次に帰ってきたのが、本日一番。或いはこの学校に転校してきてから含めて、一番のモノだったんだ。さっきの超接近や、歌のお願いとかよりもずーっと凄いモノが。

「えー、なんで？　あたし蓮に惚れちゃったから！　お願いっ」

「……」

だって、オレ頭ん中完全にフリーズしちゃったから。

何にも考えられなくなって……『〇・ワールド』発動されちゃったから。

イッタイ、何テ言ッタノカナ？

11話

蓮は出会った最初から　こんな感じだったよね？　そう言えばさ。
でも蓮って、あんなに綺麗な歌声で凄く上手だって思うのに、なんでこんなに隠すんだろう。
うーん　男の子ってこうなのかな？って思っちゃったよあたし。だって　やっぱり『綺麗な』歌声って言われるよりは『格好良い』って言われた方が男の子にとっては良いのかもしれないし。
でも、蓮の歌はとにかく凄かった。英語の歌詞をネイティブな感じって言うのかな？　ほんと帰国子女って思えるくらい　すらすらすら～　と英語で歌ってるんだ。直接見た訳じゃないんだけど、そこの所を見たら　きっと格好良いかもしれないね。……うん、でもやっぱり格好良いより綺麗な声って言うのが一番しっくりくるかな。

それに　あたしは思うんだ。

蓮と出会って、何だか毎日が違った色に見えてきてるって。

あ、でも別に蓮と出会う前までの生活や学校に不満があった訳じゃないよ？　沢山囲まれちゃう時は正直困っちゃうけど　頼りになる友達も沢山いるし、とても楽しい。もうちょっとで中学卒業は　とても寂しいし。だってだって　沢山の思い出があるんだから。
でも、やっぱり違うんだ。違った色に見えるって言う表現以上に何だか上手く言えないんだけど、そんな感じがするの。
だから、このお願いだけはどうにか聞いてもらいたいんだ。だって、あの歌があたしと蓮を引き合わせてくれたって思ってるんだもん。チャラにしてあげるって言ったけど……交換条件でも良いんだよねー。蓮はあたしに何かしてほしい事とか無いかな？　勿論っえ、えっちなのはダメだって断るよ！　だって　そう言うのって好きな人とするものだって思うし……。そもそも　蓮がそんな事言うと

は思えないけどね。今まで散々怒っちゃってるし。

――ん？　でも　あれ？　どうしたんだろ？

蓮が何でか固まってるよ。歌をうたうのやっぱり嫌なのかな。……でも　あたしは聴きたいんだ。また、あの時の様に聴いてみたい。

「蓮？　やっぱり……　嫌、かな？　あたしは……その……」

「……」

「？　蓮？　おーい　れーん！」

あれ……？　何だかいつもと違う気がする。

よく見てみると、顔が凄い赤い……？

「って、どうしたの？　すっごい顔が赤いよ？　大丈夫??」

「……」

「ねー、ねぇってば！　もうっ　無視するなっ！　……うー」

無視するな、って言ったけど　そうは見えないよ。

ここまで固まってる蓮を見るのは初めてかも。

そこまで嫌だったのかな……？　何だか罪悪感があるかも。

「ご、ごめんね？　そこまで嫌がるとは思ってなくて……」

「……あ、あの　に、にし……の？」

「う、うん？」

蓮の顔が凄い赤い。……歌をうたうのって蓮にとってはそれ位の事なんだ。そうだよね。だから誰もいない屋上とかで歌ったりしてたんだよきっと。……あまり無理言う訳にはいかないかな。チャラにしてあげる、って言ったけど　元々　蓮は殆ど悪くないんだし。

でも、あたしの考えとは何処か違う気配だったよ。

「ひょ、ひょっとしてだけど……　いま、なにを言ったのか……、わかってなかったりするのか？」

「……へ？　どういうこと？」

「だ、だって　に、にしのが……　そ、その……っ」

蓮がめちゃくちゃ動揺してたから。

でも　なんで？　あたし変な事言ったかな？

「あたしは蓮の歌をーって言ったんだけど……。それが何か変だった？」
「……はぁ、はぁ、はぁ～～……。……なぁ　西野？」
顔が凄く赤いままだけど、深呼吸を何度かした後　蓮は少し調子を戻したみたいだった。
「歌が、なら　最初からそう言ってくれよ。……いきなりそう言う風に言われたら　オレだって驚くから。メチャクチャ驚くから。それに　前にも言ったけど　オレだって男子なんだぞ。西野がどう思っているのかは知らんけど、全く興味ない、って訳じゃないんだからな？」
「えっ？　えっ??　どういう事？」
「……さっきのセリフ、西野自身が言ったセリフ、もう1回ゆ～っくりで良いから思い出してみてくれ。と言うか、オレとのやり取りも全部。数秒前だし　ゆっくり考えたら思い出せるよ。……オレの口から説明するのは　ちょっとハードルが高すぎる」
蓮は真剣な表情でそう言ってた。
あたしのセリフ……？　さっきのセリフを思い出す、か。
よく考えたら蓮の歌のことばっかり考えてたから、さっき言ったセリフなんて殆ど頭から抜けちゃってたよ。

じゃあ、蓮の言う通りゆっくりと思い出してみよっかな。
えーっと　確かあたしが『蓮の歌また聴きたい』って言ったんだよね。チャラにしてあげるからーって。それで　蓮の答えが『それ以外じゃ駄目か』だったよね。
うん。最初は断られちゃったんだけど、あたしはどうしても諦めきれなかったんだ。蓮の歌、また聴きたいってずっと思ってたから。

だから、確か　あたしは『蓮にほれ……』ん？
……ん??

あ　あたし　なんて言った？

蓮に　何？　蓮に……ほ、惚れ？　え、ええ!?

「あ……」

「……判った？」

頭の中が……急速に熱く、それと同時くらいに冷たくなってく気がした。一気に血の気が引いたのと同時に　頬が真っ赤に染まってると思う。だって　だって　あたしは蓮に　思いっきり言っちゃったんだから！

「わ、わぁぁぁぁ!!　ご、ごめっ　え、えとそのっっ!!」

そうだよ！　なんであたし、今の今まで判ってなかったんだ??
あ、あたし　蓮にほ　惚れちゃったって言っちゃったんだよっ!?
蓮の歌のことばっかり考えててとんでもない事口走っちゃってたんだよ!?
れ、蓮が顔を真っ赤にさせた理由がよく判ったよ！
でも……顔が赤くなってるって事は、蓮も……。

「ふぅ、今回のコレは　ほんとうに時間が止まった気がしたよ。西野は　人を驚かす天才だな。いつの間にか背後に現れるし、いつの間にか会話に紛れたりするし……」
「べ、別に天才なんかじゃないし、嬉しくないよ！　元々そんなつもりだって無いんだし！」
「つまりは、天然と言う事か？　随分と性質が悪いぞ……。心臓にも宜しくないな」
「た、ただ蓮が困ってる顔みてやりたかっただけなんだよーっ！」
「今は西野だって　言った事理解して慌ててたじゃん！　つまりぜんぜん説得力無しだ！」
確かに蓮の言う通りだよ……。
今回ばかりは蓮の勝ちだって思う。勝ち負けなんて無いって思う

けど……。あたしの負けだ。
でも、この後だったんだ。

蓮の顔が　さっきとは違った風に見えたのは。

「でも、西野がオレの歌で……。そんな風に言っちゃったって事、正直嬉しいよ。褒めてくれた事もそうだし、聴きたいって言ってくれた事も嬉しい。光栄だ。ありがとな」

少し恥ずかしそうにしてるけど、笑顔だった。はにかんだ笑顔って言うんだと思う。
なんだろう……。歌を聴いた時みたいに　あたし　胸がドキドキしてるのが判るんだ。
「オレはな。その……、『歌』をうたう事が嫌いって訳じゃないんだ。……まぁ　歌は昔からちょっと色々とあって。そのおかげで　以前は人前でも歌ったりしてたんだけど……　ちょっとした出来事があって　あまり歌う事が無くなって……、そこからずるずる　と今の状態って感じかな」
「え、うん……そっか……。そうなんだね」

胸がまだドキドキしてる。蓮の言ってる事がなかなか聞きとれないよぉ……。でも何とか辛うじて聞きとれてる。
歌を聴けないのはやっぱり残念って思うけど、今日の所は良いって思ったりもしてるよ。
ちょっと、あたしの頭も冷やしたいから。帰ったら水シャワーだね……。だって頭から思いっきりかぶりたい気分だから……。

「だけど、西野にチャラにしてもらえるなら、やっぱり構わないよ」
「……えっ!?」
「ははっ、最初は　他のにしてって言っておいて格好悪いけど。……

そこまで褒めてもらえたのは、久しぶりだからな」
蓮が　にこっと笑った。さっきのあのはにかんだ笑顔に戻った。

でも次に、困ったのはあたしの方だったよ。

蓮がそう言ってくれたのは凄く嬉しかったんだけど、その後一体どうなった？　どうやって家にまで帰れたかが判んないんだ。
気付いたらあたしは家に帰ってて、考えてた通り思いっきり頭から水シャワーを浴び続けてた。まるでワープでもしたの？　って思えるくらい。子供かあたしは。

「うー　背中が、すっごい熱い……。ぜんぜん冷えないよぉ……」

どれだけ水シャワーを浴びてるか判んない。でも全然冷えないんだ。季節柄普通は寒い筈なんだけど……。

うん、そうだよね。もう　自分にくらいは白状しないといけないよね。

あたし　あの屋上で蓮と出会ってから、蓮の事ばかり考えてる。確かに切っ掛けは歌だった。あんな綺麗な歌声初めて傍で聴いたから、惹きつけられて、引き寄せられたんだと思う。それから、蓮の事ずっと探してたんだ。屋上で逃げられちゃったあの時から。

見つける事が出来て本当に嬉しかったし、別の女の子と話してる時は　胸の奥がちくっ　とした。嫌な気分になっちゃった。

「そう、だよね。あたし……　蓮のこと……」

うん。そうなんだ。

でも　蓮はどう思ってるんだろう。顔は凄く赤くなってたけど『健全な中学男子なんだから』と言ってたから……やっぱり照れちゃっただけなのかな？

特別に……って事は無いのかな？

「うぅぅ～～～……!!　もやもやするーー！」

この後は、いつまでお風呂にいたのかは判んないんだけど、お母さんが心配して呼びに来てたよ。おまけに水シャワーだったから　身体が冷えてて『何してるの！　風邪ひくでしょ！』って怒られちゃったよ……。

ちゃんとお風呂にその後入ったんだけど、身体が冷えてるってお母さんに言われたんだけど、背中はまだ凄く熱かったよ。

でも、心配かける訳にはいかないから　ちゃんと入ったよ？

それに風邪引いて……蓮に会えなくなるのも嫌だからね。

「よし……っ！　あたしからぐいぐい行っちゃおう。そうだったよね。あたし　本当は告白を待つんじゃなくて、自分からガンガン告っちゃうタイプだもん！」

攻めに攻めてが心情！　受け身なんて性に合わないもんね。

歌を聴きながら告るって言うのも面白いかもね。

「うぅ～ん……。ユリは告白はロマンチックに～って言ってたけど、歌も結構そうだよね？　あたしは好きだもん」

「ちょっとー！　つかさちゃん！　今度はのぼせちゃうわよー!?」
「わわっ！　ごめんお母さん！　直ぐにあがるよー！」

意気込んだんは良いけど。
なんか、今日のあたしダメダメだよ……。

12話

――――本当にびっくりしたんだ。

西野の言葉に本当に。

それに　あそこまでびっくりして動揺した事って今まであったどうか判らないんだ。

いや、今も思い返してみてるけど　やっぱり多分無いって思う。実の姉がオレに色々とカミングアウトした時の衝撃よりもずっとずっと上だと思った。

……それはそれでどうかと思うけど、まぁ　良い。姉のアレは日常茶飯事になってしまってるから、もう記憶も薄れてるんだと思う。寧ろ永遠に忘れ去りたいって思ってるくらいだし。

『あたし蓮に惚れちゃった』

西野からそう言われて、オレの頭の中でずっとその言葉がぐるぐると回ってる。今も回り続けてる。

当の本人は　何だか判ってなかったっぽいけど、それはそれで有り得るの？　って後から思った。でも、西野の慌てっぷりを見てみるとあるんだろうな。きっと。

それに殆ど告白に近い。いや　まさに告白だって思う。そんなの今まで……受けた事無いとは言わないけど、他人に言われたのは初めてだったし。

慌ててる西野を見て、逆に何とかオレは平常心を保てたけど　やっぱりまだ胸の奥が熱い。顔もきっとまだ赤いって実感してる。

そんな時だったよ。皆と合流したのは。

その時は正直嬉しかったかもしれない。幾ら西野の勘違い《？》だったとしても、色々と考えすぎてて、頭の中が悶々としてしまっていたし、今は気を紛らわせたかったんだ。

でも……　違う意味で疲れる事になるんだよな、これが。

「なぁなぁ！　やっぱあの女だと思うんだ！　髪型は違ったけど切ったとかなんとかって言ってたし、あいつスカートめくれてもパンツ隠さねーよーなタイプっぽいもん！　オレのことなんか　気にしてた気がするし、いちごのパンツ履いてるって言ってたし!!」
「……こんな住宅街地でんなもん力説すんな。訊かれるとメチャ恥ずかしいだろ」
そう言えば、真中に説明してなかったよ。あれは西野じゃない、って。
「でもさぁ……。真中がそう言うのならそうかもしれないけど、西野が2日も同じのを履いてるなんてちょっと想像したくないなぁ～～……」
「んなら　想像しなきゃいいダロ……（オレ、直接言ったけど）」
「でもよー。神谷も見ただろ？　知らんって言ってたけど、学校じゃ1番可愛いって評判の女の子だぞ？　そんな子が……って思っても」
「気持ちは判るよ。……真中。大草の様に単語に気を付けて話せよ？　これなら変質者扱いされない、って思うから」
大草は、必要最低限の単語を使用して、意図を伝えようとしてる。パンツパンツって大声で言ってる真中とは大違いだやっぱり。
「うっせーな！　オレは今メチャ熱くなってんだよ！　やったぞー！　とうとう見つけたんだ！　それに、パンツの件はオレは許すね！　2日なんて大甘だ！　オレなんて最高5日間履きっぱなし！」
「だから力説すんな！　聴きたくもないわ！　んな情報！」
「そーだ！　それに西野とお前を一緒にすんなよ!!」
真中のコレは熱が冷めるまで無理だって判った所で、はてさて、ど

のタイミングで話せば良い事やらって考えてた時だったよ。うるさいのが復活したのは。
「おいコラっ!!　そこのさんにんッ!!　フラれたオレに慰めの言葉も無しかよ!　ええッ!?　真中や神谷が屋上で見た女の謎が解けりゃそれでいーのかよ!!」
今の今まで死んでた小宮山が復活したのだ。
オレは、途中で合流したから魂の抜けた様な顔した小宮山を見てるんだけど――、まぁ　つまり『返事がないただのしかばねのようだ』となりそうだったから、放置してたよ、うん。多分　大草と真中は完全に忘れてたっぽいけど。
だって、あからさまに顔に出てるし。こう言うのを表情に出るって言うんだと思う。
じゃあ、西野から見るオレってこんな感じだったって事なのかな……?　だったらちょっと複雑だよ。でも今は小宮山だ。
「そんなもん仕様がないだろ。……大体、廊下であんな大声であんなやり取りされりゃ、誰だって嫌がる。女子なら尚更だ」
「そ、そうだが……。って待て、それってつまり……」
あ、小宮山が真中の方に行った。何か不穏なオーラを纏ってる気がする。
「てめぇのせいかぁぁぁっぁぁ!!!　真中ぁァぁァ!!!!」
「んぎゃああ!!」
小宮山の渾身の右ストレートが炸裂したよ。真中は綺麗に放物線を描きながら飛んでいったよ。……おお　すげぇ　人っあんなにて飛ぶんだなぁ。
「痛ぇぇぇ!!　なんすんだよ!　だいたい、フラれた理由っててめぇの顔のせいだろ〜〜〜!!　怖い顔駄目、って言ってたじゃん!!」
「うるせぇぇ!!　大体お前がつかさちゃんのパンツがどうのこうの、ってあんな場所で言うからだろうが!!」
「だから　本人がそこじゃねぇー!　って言ってたろーが!!」
真中はちゃっかり無事だったみたいだ。
その後は　見てられない男同士の取っ組み合いと言うかじゃれ合

いと言うか。受験シーズンで色々と肌寒いと言うのに、見てて暑苦しいし。今はオレの頭の中は、こいつらと同じ様に(なんか嫌だけど)西野がいるから。それに加えて更に熱くなってしまってるんだよ……。
　さっき会った事、そして　合った出来事を含めて話したら、オレも小宮山右ストレート喰らうかもしれんから気を付けよ。
「真中ぁァ!!　おまえも告れ！」
「はぁ!?」
「おまえもつかさちゃんに告白してみろっつったんだよぉ!!　おまえも告ってオレみたいに、フラれてみろ!!　同じ痛みを味わえぇい!!!」
「んぎゃあぁ!!」
　おっ、今度は左アッパー。
　真中死ぬんじゃないか?　……ああ、大丈夫みたいだ。
　小宮山の気持ちは判らんでもない事もない。つまりは　ただの八つ当たりじゃん。って思うよオレは。だから　正直それは反対だったよ。……色んな意味で、賛同出来ないんだ。
「そうだよ。告ってみればいいじゃん」
　オレが何か言う前に大草が先に言ってたよ。
「よくわかんねーけど、西野のパンツを撮りたいんだろ?　はっきり言って彼氏にでもならねーとそんなカッコ、撮らせてくれねーぜ?」
「そもそも、幾ら彼氏だっつっても　そんなトコ撮らせる方もおかしい、って思うのは気のせいか?　大草」
「惚れた相手なら、何されても許すってよく言うじゃん。そりゃ暴力とか超えちゃなんない一線はある、って思うけど『可愛い所をビデオに撮って収めておきたいんだ……』って、甘い言葉で誘えばどうにかなるってオレは思うよ。オレは成功する場面しか想像が出来ないな」
　そんなん許すのって、大草の周囲の女子だけだと思う。
　例え大草だったとしても、相手が西野だったら『そんなえっちなの駄目だろ！　ぜったい!!』って言いそうだ。いや、間違いなく言う。しつこかったら　小宮山顔負けの攻撃放ってきそうだし。
　……うん。ここに西野がいなくて良かったよ。持ち前の読心術使われたら、オレが被害を受けるから。……絶対。

「う、うぅん、確かにそうだよな……」
「馬鹿言ってんじゃねぇって、大草！　何本気にしてんだよ。オレは真中がフラれる所を見るだけで十分なんだ！　それに、つかさちゃんは、今までどんな野郎が告っても、一度も『うん』って言わねぇ強者中の強者なんだぞっ」
　真中が悩んでるのを見たからなのか、大草の助言があったからなのか、今度は止めに入ろうとする小宮山。一体どっちなんだ？　お前って言いたいけど……。今は頭の中整理が先だ。
「でもさ、西野って誰かと付き合ってるって噂ないしさ、やってみなきゃわかんねーじゃん」
「そりゃそうだけどよぉ……」
「当たって砕けてみるって言うのも有りかもしれないなぁ……」
　何だか方向性が決まりかけてきたって思ってしまった。だから、オレは。

「それは駄目だ」

　真中が意気込む前に止めたよ。自然と口に出てたよ。多分いきなりだったからと言う事と全員が色々乗り気気味だった所に反対の意見だったから　反応したんだと思う。
「何でだよ。折角やる気が出てきたのに！　それに上手く行けば学年№1アイドルのカレシだぞ！　野望が叶うに続いて、そんなでけぇ特典がついてくるんだ。男ならやらなきゃ損だ」
「……理由、か。理由。うん、そうだな。……たぶん、真中が後悔するって判ってるからって所だ」
「どういう事だよ！　オレはフラれたりしねぇよ！」
「おっ、真中がいつになく強気だ！」
「へーん、ぜーったいフラれるもんねー！」
　何だか、盛り上がってるけど　もう、このタイミングじゃないといけない、ってオレの中で言ってるよ。西野じゃない、ってちゃんと言わないとって。

「悪い。話すタイミングがつかめなくてアレだったんだが……、屋上での件だけど　アレ西野じゃないよ真中」
「「は？」」
　何だか爆弾発言？　でもしたのかな。って思うくらい３人の空気が固まった気がする。
　別に大した事じゃないって思ってるんだけどなぁ。
「そんな訳ないだろー！　色々符号が一致してってるじゃん。状況証拠は揃ってるし、あれ程の美人だし、答えは１つ！　だろ!?」
「何かの映画のセリフかそれ？　それは兎も角、オレの話聞いてって」

　一先ず、オレは３人に説明したよ。
　あの屋上で女の子……東城の事をオレが助けた事。幾ら短い時間で慌ててたから、ってあそこまで間近で見たんだから、間違える訳ないって。

「確かに――神谷にそう言われたら説得力あるな。ある意味真中より一番近くで、その美少女の事見てるんだし。……真中が見た部分以外は。ってかもっと早くに言ってくれれば良かったじゃん」
「だから言っただろ？　タイミングがアレだったんだって。後は　こいつらが暴走し過ぎなんだよ」
　そもそもパンツパンツ、って連呼してる連中の中に加わりたくない、って大草に目で伝えたら、伝わったよ。うん。気持ちは判ってくれてるみたいだ。
「オレは、この変態野郎よりは神谷の事は信じられる！　信頼もできるぜ！」
「小宮山にだけは言われたくねぇよ!!」
「……なんかすごいな。信じてくれて、信頼されてるってまで言われてるのに、全く嬉しくないって事があるんだな、この世に」
「どういう意味だ!!」
　小宮山も色々と暴走してるから仕方ないし。
「それじゃ、誰なんだよー……。あー　最初に戻っちまったじゃん

……。もっと早くに言ってくれりゃ、こんな消沈する事無かったのに……」
「だーかーらー、タイミングっつーのがあるって言っただろ！　そもそも、お前らがもっと落ち着きがあれば早かったっつーの！　逃した理由はお前らに原因ありだ！　それにまだ続きあるから訊けって！」
とにかく、オレは続きを説明したよ。

あの少女は東城だったって事。

ちゃんと本人にも確認したし、証拠だって簡単に用意できるんだけど……。

「流石にそれは無いって思うぞ、神谷」
「オレもだ。ソレは絶対気のせいだって」

大草と小宮山が盛大にダメ出ししてくれたよ。
……最後まで聞けっての。

「東城の前髪を下ろしてメガネをのけたら直ぐ判る」
「いきなり東城に、『髪型変えて　メガネも取って！』ってお願いするのか？　それこそ彼氏彼女にならんと厳しいだろ？」
「……いやいや、確かに厳しいとは思うんだ。それに関してはオレもな？　でも、真中が欲しがってる映像の恰好をしてもらうより、断然難易度低いと思うんだけど。いったい何を基準に難易度考えてんだよ、お前は」

「うぅん……。真中を信じるか、神谷を信じるか……」
「オレは現時点では難しいかもなぁ。神谷は信頼できるヤツって判ってるんだけど、……流石に相手が相手だから。いきなり信じろって言われてもな。……西野なら大体一致してるし、信じやすいんだけど。前は髪長かったし」

小宮山と大草はちょっとばかり悩んでるみたいだった。
「うーん……。とりあえず、神谷の事を無視出来ないし、西野の事も気になるし、……オレ2人に確認してみるよ」
「そうしろ。2人があの時の子って訳無いんだから、もしどっちかに真中が告白したとして、……それに応えてくれた場合さ。違ってたらどうするんだ？『人違いだったから、さっきの無しにして』って言うのか？　……流石にそれはオレはどうかと思うぞ」
「あっ、それに関しては神谷に賛成だ。告白しといて、別人だったからゴメン、って最低な男だぞ、それ」
芸能人とかでその手の話題は沢山あるっぽい。身近にその業界人がいるし、色々と話は聴いたりする。

『不倫とか浮気って最低だよね!?』
『蓮はぜーーったいしないでよ！　あんな事する蓮なんて、見たくないんだから！』
とか何とか。
つまりは勝手に話してくるから嫌でも頭に入ってるんだ。しかもちょっと端折ったり、隠したりしないで、モロに名前を言ったりするから現実味があって、その世界の闇がスゲェ見えてきたから　初めて聞いた時マジで幻滅したし。
因みに、暴露してるのは姉だけど、姉は姉で色々問題があるけど嘘を言ったりはしないからその点においては　嫌な事に信用できるんだよなぁ。

「た、確かに……　そこまで考えてなかったよ。皆サンキューな！　んー　でもやっぱ　映像を取るとなったら、彼氏彼女にならないと……だから、そっち方面も頑張ってみる！　あの時の子に告白して、それで成功させてみせる!!」
「……あぁ、頑張れよ」

真中は、あの時のいちごパンツの美少女《東城》に告白をするつも

りの様だ。間違いなく東城だったから１００％。
それはそれで良いって思う。
でも、何でだろう……。オレこの時なんだか凄く安心したんだ。
ずっと強張ってたって思う表情も、柔らかくなっていってるって実感してるんだ。
「うー……　つかさちゃんに真中が告って　フラれるシーンこそを一眼レフカメラで撮ってやろうって思ってたのに！　ちょっとオレとしては残念過ぎるぞ」
「小宮山ぁ～……おまえ性格悪過ぎだぞ！　それじゃどの女子からも嫌われるって！　神谷も言ってやれよ。フラれたの必然だーって」
そうだったな。ほっといたら　真中は西野に告白するつもりだったんだよな。

「西野に告白するのはダメだ」

……っ。考える前に、口に出てた。
「……ん？　なんだ？　いやにこだわるんだな。神谷。西野に告る事」
「……だって、ダメだろ？」
「いや、別に告る告らないは　本人次第だから。オレらの学校にそんな決まりなんて無いって。暗黙のルールってのも無いって。西野は小宮山が言う通り鉄壁の要塞だし。……んー」
大草は、何か考えてる様子だ。
でも、ちょっとオレの方も調子がおかしいよやっぱり。いつもなら、こんな風に言わない筈なんだけど、つい言ってしまったんだ。
「（神谷……西野の事好きになった？　んー　でも2人って確か接点無かった筈だし、それは本人も認めてるし……。一目ぼれ？　いやー、神谷に限ってそれは無さそうだしなぁ。前に別の学校だけどそこで一番の子と一緒に誘った時も一蹴されたし。……性格には難ありだったけど、容姿だけだったら西野に匹敵する子だったし）」

「なんだ？　人の顔じろじろ見て」
「ん？　いや別に何でもないよ」
「……なら、さっさと帰るぞ。あの角曲がってから全然先に進めてないし」
「それ絶対真中と小宮山のせいだから」

小宮山と真中のじゃれ合いのおかげで全く進めてないって言うのは正解も正解、大正解だよ。

とりあえず、オレ達は帰宅再開。数分後皆と別れた。

うん。今日は色々とあった。たった数十分の間だったけど、メチャクチャ濃い時間だったよ。

「……とりあえず、帰って頭冷やすかな」

頭がまだまだ熱い。今夕方だったから、皆に表情が見えにくいんだと思うけど、間違いなく顔は赤いって思う。

その後、家に帰って　当然の如く　誰かさんに色々と表情の事で追及されたり、風呂場にまで突入しそうになったりとしてたらしいんだけど（後の母情報）。
いつもより強力な完全なる無視（パーフェクトスルー）になってたらしく、姉は色々と断念して　散々喚いたそうだった。

全然気づかなかったけど、それはそれでよかったかな。

13話

学校が始まって、まだ午前の休み時間。
オレは短い休み時間だけど屋上へと行ったよ。
だって屋上が学校の中でやっぱ一番良い場所だから。
今までででも考えすぎてて、頭の中が大変だった事は何度かあったけれど、ここだったら忘れられるんだ。
でもまぁ、今までは、の話なんだけどな……。
これまでは　面倒事に巻き込まれたり（大体がいつもの面子絡み）とあって、その度にここに逃げ込んできてた様な気がする。
もうここは憩いの場と言うよりは、駆け込み寺だな。うん。
だから、今日も色々と考える事が多すぎるからここに来てみたんだけど、どうしても考えてしまうんだよ……。

「……やっぱり、無理かな。簡単に吹っ切れる程、オレは単純じゃないって事か。……それもなんか複雑だけど」
何度も何度も頭の中でループ再生されるのは、西野のセリフ。歌に関してを言ってるんだ、って何度も言い聞かせても……、やっぱり難しい。
『蓮に惚れちゃった』
ずっと、残ってるんだ頭の中に。一晩寝ればと思ったんだけど　どうにも駄目だったんだ。
「こういうのって、時間が解決してくれるんだろうけど……」
色んな意味で長い間格闘するハメになってしまいそうだって改めて思う。

それに　西野と顔を合わすのが……正直難しくなってしまってる自分がいるから。
歌の件、約束したんだけど現時点では無理難題です。はい。
それに学校内だから、クラスは違っても合ったりはするんだ。午前

中だったのに2度も……。以前までは見た事無かった筈なんだけど……、遭遇率が上がってるとしか思えないし。
でも、あからさまに無視とかはしないよ？　流石に、それはどうかと思う……んだけど、そうも言ってられないんだよなぁ。
何せ、視界の端に西野の気配を感じたら、それとなく方向転換してる自分がいるから。殆ど条件反射になってしまってるみたいで、この分じゃ『逃げたら名前で呼ぶから』って言ってた西野のレッドラインに当たってしまってる可能性が高いかも知れないし。
「……ただでさえ、こんなんなのに　今　西野に名で呼ばれると……。うーん……、ちょっとどーなるか判らんな。……破裂するんじゃないか？　オレ……」
色々と悩みがあるけど、この手の悩みを打ち明けれる相手がいないのが少々痛い。
家族は大々NGだし、まぁ　大草には割と話せそうな気がするんだけど、……なんかまた強引な誘いをしてきそうだから、とりあえず現状その案も却下の方向。それに小宮山は論外だ。真中に関しては、考える前に反射的に～とはいえ　自分が止めろ、と言った手前　どの面さげてこんな相談すりゃいいのか、自分でも判らん。
つまり、自己解決しか方法はないのが辛い所です。はい。
「……気晴らしでもするかな。今じゃ焼石に水って感じだけど、ちょっとだけ――」
オレは、ゆっくりと　静かに、誰にも聞かれない様にハミングを奏でた。
声に出さないのは　何やらこの屋上で歌が聴こえる～なんて、妙な噂が女子の間では持ち切りらしいからって理由もある。
自粛を～と考えてたんだけど、やっぱりここ以上に安らぐ場所が他にはないんだ。だから、せめて数日くらいは、って思いながらハミング。そして　目を瞑って一眠りしようとしたそんな時だったよ。

うん、最近はずっとこんな感じだったよそう言えば。

「あっ！　やっぱりここだった！」

そう、誰かがいつの間にか傍にまで来ているんだ。考え込んでる時、色々と意識をカットしてしまうのかな？　オレって。

「西野……」

「おっす！　蓮」

敬礼ポーズをする西野。

いや、うん。とっても可愛いよ。ちょっと前までは普通に言葉にしてたんだけど、今は何だか喉がつっかえてるみたいだよ。出てこないんだな、これが。心臓がスゲェ鳴ってるし。……大丈夫かな？　オレ。

「……どうしたんだ？」

「えへへ。なかなか蓮と話す機会が無かったからねー。言ったでしょ？　あたしは蓮と話すのが楽しいって！　蓮も言ったもんね？『そう言う言われ方して嫌とは言えない』って！　蓮は言いそうだけどー、こんなタイミングで言っちゃう程　Ｓって訳じゃないでしょー？」

とりあえず、何とか自然に話せて良かった。

西野は、『あたしの事いじめないでよー？』　って　にこにこ笑いながら言ってる様に見える。凄くアンバランスな気がするんだけど、やっぱり今の西野の笑顔はオレにとっては刺激が強いよ、ほんと……。

でも、無視する事は出来ないな。オレは。

それに、西野には思った事をそのまま伝えた方が良いんだ、って思えた。

そう思えたら言える。少しずつでも言ってみようって思う。恥ずかしいセリフな気がするケドな。

「ああ、そうだな。……何だか不思議だよ。西野と知り合ってまだほんのちょっとなのに、……ずっと前から一緒だった様な、そんな自然さがあるんだ」
「っ！　い、いきなり何言いだすんだよー。びっくりするじゃん！」
「だってそんな感じがしないか？　また、こうやってオレの傍に西野がいるんだ。……最初に会った時も、ここだったし、こうやって寝っ転がってた時だ。今もだろ？」

あぁ、因みに刺激が強いと言う意味では今の現状だ。
西野がオレの顔を覗き込む様にしてる。
オレは寝てるから距離を取る事は出来ない。西野が離れない限り普通に無理。
そして　西野との距離は非常に近く、離れる気配は０だし。会ってない時もめちゃくちゃ葛藤してたのに……。
あ、頭ん中で一周まわったから出来てるのかも知れないな。つまりもう感覚が麻痺ったって事かな。
「知り合って直ぐって感じは全くしないんだよなぁ、これが」
「……ふふっ、そーだね」
西野はオレの顔を覗き込むのを止めた～と思ったら、更に刺激的な事になった。麻痺なんぞ吹き飛ばす勢いだ。
「よいっしょっとー！」
「お、おい。制服汚れるぞ??」
「だいじょーぶだよ。ここって結構綺麗じゃん。蓮が寝床にしてるからだねー」
西野も、オレの隣で寝転がってたんだ。
丁度隣り合わせになってる……。
健全な男子には、色々ときついよほんと。だから、オレは上半身を起こしたんだ。流石に寝るのは……なぁ？
それで　西野は不満だったみたいで、口をとがらせてたけど、直ぐに笑顔に戻ったよ。
「さっ、リクエストするからねー？　歌、よろしくっ！」

オレは色々と大変なのに、西野は凄い普通に接してる。
何でだろうな。それが、何処か複雑だったんだけど、それ以上に西野の事を見習おうって思ったよ。
あ、因みに　歌のリクエストに関しては　好都合だって思う。歌をうたってる時は　紛らわせる事が出来るかもしれないから。

「ここで聴くって言うのも何だか良いよねー。蓮と初めて出会ったのもここ。それで初めて歌を聴いたのもここだしね？　やっぱり最初はここからだよー！」
「……最初はって事は、まだまだ続くって感じ？」
そこがちょっと気になった。いや　結構気になったかも。確かに、歌に関してＯＫと言ったんだけど……、広がっていくのは好ましい所ではない。大勢の前で～とかになったら流石にＮＧ出すし。
でも、西野が考えてたのはまた別の事だった様だ。いや、ある意味一番強烈なのを考えてたよ……。

「もちだよ！　何ならデュエットでもどーかな？　ってさ！」
そう来たか!!　ってマジで思ったよ。でも、何か企んでそうな西野の表情も結構気になってた、というか勘付けたよ。

「ま、西野は　この後オレが何言うか判ってるよな？」
「あははは っ、もっちろん！　うーん、あたしとしては　一緒に歌うのも良いかな？　って思ったりしてるんだけどー　蓮の邪魔になっちゃうかもだからね」
「邪魔？」
「だってー、蓮に比べたらあたしの歌なんて……。歌うのは好きだけどね。自信はぜーんぜん」

これは何度も思ってる。
本当に不思議だった。

西野に合うまでは、絶対に普通に話す事なんかできないって思ってたのに。ましてやこんな事言える訳ない、思ったとしても　口に出す事なんかできないって思ってたのに。
ついさっきだって　出てこない言葉だった筈なのに、西野と話してるにつれて　柔らかくほぐしてくれるみたいになってくるんだ。
西野と話してると凄く楽しい。だからだと思うんだ。
だから、自然と言う事が出来たってな。

「西野の声、オレは好きだな。透き通ってて　言ってみれば華がある、かな？」

うん。言ったのは良いんだけど……すっげぇ恥ずかしい。
でも　自然と言えた事には花丸だ。

「す、す、すきって……!?　え、えっ　ええええええ!?」

西野は一気に顔を真っ赤にさせた。面白いくらい真っ赤だ。
それにあたふたしてる。こう言うって結構冷静になれるもんなんだな。自分の事じゃないからさ。
だから、オレは西野のおでこを軽くぴんっ！　と弾いてやったよ。
西野は小さく『あうっ』って言いながら仰け反ってた。
「この間のお返しってヤツだ」
「……へっ!?」
「改めて西野。……オレの歌に惚れてくれてありがとな？」
ここまで言って漸く西野はオレの意図に気付いたみたいだよ。
顔を赤くさせつつも、ぷくっ　と頬を膨らませてたから。
「も、もーー！　からかったんだなー！　なにさ！　あの時の意趣返しってことー？」
「意趣返しって……随分と物騒な例えだな。それって恨んだりとか、遺恨とかだったと思うぞ？　そんなもんある訳ないじゃん。オレの

事褒めてくれたのに」
「ぜーーったい似た様なもんだって思うしっ！　あの時、蓮すーーーっごく慌ててたもんっ!!　慌てさせた事、恨んでるんだろーー！」
「……恨みはぜーんぜん。西野の慌てた顔もまた見れたし、オレとしては上々だ。ま、慌ててたのはオレも否定はしないケドな。……はっ」
「むーー！　ずっるい！　あたしばっかになってるじゃん！　あたしの方が多いじゃん！」
「大丈夫だ。……西野はオレを驚かす天才だろ。……オレは、いつも集中しとかないと、だからな。今みたいに――――」
オレは一頻り笑うと　また寝っ転がって目を瞑った。
頭の中で思い浮かべる歌。メロディーも自分のハミングで奏でる。
西野も、きっと判ったんだって思う。声が聴こえなくなったから。
訊いてくれてるんだって思うから。

オレにとっての初めてのコンサートのお客様は西野ただ1人。
うん――、最高の場所で、最高の相手。最高の舞台だ。初めてにしては出来過ぎてるって思う。
でも、アンコールは無しだからな？

１４話

うん。そうだよ。ガンガン攻める！　それが　あたしなんだ。
どんな事だって　受け身でなんて性に合わないんだ。
それに　よく考えてみたらやっぱり昔からだったと思うしね。
そう幼稚園の時だって、小学校の時だって、中学の今だって　待ちなんて無かったよ。
どんな遊びだって全部全部攻めるのが一番楽しいし、面白い。　守りなんて二の次っ！

ま、まぁ　流石に中学にもなってきたら　それなりに気を使う様にはなったよ？　だって、女の子だからさ。それにいつかは、こう言う時だってくるだろうって、ずっと思ってた。

でもやっぱり、こう言う時だって　ガンガン行くんだ。絶対に負けたりしないように。……誰にも。勿論自分自身にもね。
ずっとそう思ってるのに……　ずっとずっとそう自分に言い聞かせてるのに　なかなか思った通りにいかないんだ。

そうなんだ……。だって今日は、なかなか蓮に会えなかったから。

いや、違う。それはやっぱり嘘だね。
だって会えてるって思ってるもん。でも……　会えていないのは最後の一歩を躊躇してしまってるんだって自覚もしてるから。
これは蓮に出会ってからだった。こんな気持ちになったのは蓮の歌に惹かれて、それで出会った時からだったんだきっと。
普段なら、蓮以外の人なら　絶対自分から行けるって判る。廊下で騒いでた２人組にも躊躇なんかせず入っていけたし！
でも、蓮は違う。蓮だから見えない壁が邪魔してくれてる。蓮とあ

たしの間にあるその壁は、自分が作っちゃってる理性の壁。
でもでも　立ち止まり続けたくない！　とりゃー！　とそんなのなんか蹴っ飛ばしてつき進みたい。このままは嫌だから。ちょっとでも臆しちゃったらずるずると続いてしまうって思っちゃうから。
厄介極まりない壁だけど、隔たったままなのは絶対嫌。何度も何度も自分に言い聞かせて頑張ってきたんだから。昨日のお風呂の中でもずっと考えてたから。
だから　あたしは今度こそ決めたんだ。行く場所はひとつ。きっと、そこにいるって思ってたから。
思った通りだったよ。そこにいた。……蓮がいた。想いが通じたってちょっとだけ思っちゃったかもしれないかな。
やっぱり　蓮と話すのは楽しい。すごっく楽しい。休み時間が本当にあっという間だよ。昼休みの時間が良かったって思ってる。正直短すぎるから……。
ちょっと授業サボっちゃおうかな。　っと提案しようと思ったくらいだったよ。
んー、後でほんとに言ってみようかな？
それで、直ぐ後に　念願の蓮の歌を聴く事が出来たんだ。

「（これは――あの映画の主題歌の……）」

有名な邦画の主題歌だから直ぐに判った。上映してた時はニュースでの何度も取り上げられて、その度に流れてるし、今でもコンビニに流れてるから。
心地良くてゆっくりやわらかなテンポ。だからかな、心の奥にまで響いてくるんだ。

「（後は多分……蓮が歌ってるから、だよね……。いや　絶対そうだよね）」

あたしは　自然と目を閉じていた。

蓮がそうしてる様にあたしも目を閉じて耳を、いや身体全体を集中させた。耳だけじゃなくて、身体全体で受け止めたいって思ったから。

「(あ……、目を閉じたら、ほんとに気持ちいいかも……、蓮の歌が心地よくって、優しいから……)」

これじゃ子守歌になっちゃってるよー。でも　今寝ちゃうのは勿体なさすぎるから駄目！　起きてろよ！　あたし!!

「――――――……」

それで、ほんとにあっという間だったよ。ゆっくりで、それでいてサビの部分では激しさもあって、遊園地にでも行ってる様な気分になっちゃった。だから、終わっちゃうのは寂しさがあったんだ。

「はい終わり。ご清聴ありがとうございます」

「……ん」

「？　西野？」

「あ、いや……何だかふわふわしてると言うか、何と言うか……」

「ん」

「……ひゃっ！」

びっくりしたよ。眼を瞑ってて判んなかったけど突然、おでこが暖かくなったんだ。ビックリして目を開けてみると、蓮があたしのおでこに手を当ててた。

「熱がある……って訳じゃなさそうだな」

「わわっ！　も、もーそんなんじゃないよ！　ほら、ふわふわ浮いてる様な感覚ってあるじゃん。心地良過ぎてーってヤツだよ。浮遊感、ていうのかな？　だから蓮のせいなの！」

蓮が離すのがもうちょっと遅かったら、あたしの熱、勘付いちゃっ

たかもしれない。触れられてるって判って　蓮が手を離した途端に熱を帯びちゃったって判ったから。
「ああ、なるほどそう言う事か。……ありがとな」
「ふふっ　あー　ほんっとまた聴けて良かったよー。これから毎日頼もうかな？　蓮！」
「ＣＤ買って聴いてください。若しくはレンタル。これ普通にビデオ２００においてるから」
「もーー!!　その丁寧に断るのやめてよー！　それに蓮が歌ってるから良いんじゃん！　ＣＤじゃ感動も半減しちゃうよ！」
　何だか歌手の皆さんに失礼な事言ってる気がするケド、いいや　そんなの今は。
「ねぇー　アンコー「ルはダメ」えーー！　なんでだよー」
　先読みされちゃってたよ。何だか笑顔で返してくるのちょっと腹立つな。……でもあたしは蓮の笑顔は　す……っ　えと、笑顔が似合うから良いけどね！
「だって、もう時間がアレだろ？　この歌は大体４～５分だし、時間的に無理」
「うー……　よしっ！　ねぇちょっと授業をさｂ「いやダメだろ」もーー！　ちょっと言い終わるまで待ってよ」
　何だか今は蓮に心読まれてる気がするよ！　あたしの事何度も言ってきた癖に。
「成る程。顔に出やすいってこういう事を言うんだな。よーく判ったよ西野。……ふふんっ　仕返しだ」
「むむっ！　蓮に言われちゃうのは複雑だ……。気を付けないとー」
　あたしは、思わず頬をぺちぺちっと叩いてた。
　そんな時、だったよ……。２人しかいない、って思ってたのに！
　誰かがやってきたんだ。
「……ほんとびっくりしたよ……」
「神谷って、歌メチャ上手いんだな……。オレ知らなかった」

それも――２人も増えちゃった。

これは、想定外も想定外。
完全に油断していた。此処には西野しかいないって思ってたし、風もそれなりにあったから他に聴かれる様な事は無いだろって考えてたんだけど、……まさかの来訪者登場だよ。
それも　真中に東城の２人。
何で屋上（ココ）にって思ったから、その理由を訊こうとしたんだが、……真中と東城の方がメチャクチャ早かった。

「いや、すげーよ！　オレ、歌でこんなに感激したの初めてだ！　マジでマジ！　東城の小説と同じくらい!!」
「ちょっ、ま、真中くんっ!?」
「あ……わ、悪い……」
何か真中が口走って東城が思わず止めてたけど。しっかりと聞こえてるんだよな、これが。
「あのー、なんで２人はここにいるのかなー」
西野だけは何だか不機嫌気味だったよ。視線が結構鋭いし。……

まぁ　西野は可愛いからどうしたって　そっちの方向に考えてしまうケド。
「あ、ご　ごめんなさい。邪魔をするつもりは……」
「お、おう。ってあれ？　西野……さん？」
「そう言うキミは真中くんだったねー。ちゃんと考えない様にしてる？　えっちな事はダメだぞ」
「し、してないって！　今のオレは猛烈に感動してるんだ。２つもデッカイのがあって　オレ今やばいんだって！」
　やばいのはオレの方だっての……でも。
「んん……、はぁー　まぁしょうがないか。こうなったら１人も３人もあんまり変わんないし……」
　という事で受け入れたよ。
　歌を３人って数に聞いて貰ったのは、あの時以来だったな。
　あまり――良い思い出じゃないから、忘れよ。
「うぅー　蓮　機嫌悪くしちゃった？」
「いや、大丈夫だ。……って、西野」
「あ、ご、ごめん!!」
　ちゃっかりいつも通りに名前で呼んでくれた西野だったけど、まぁこの面子ならって思った。
　でも真中だから……ちょっと困りもんだ。
「神谷……、勝手で悪いって思うけど、ちょっと良いか？」
「ん？　なんだ？」
　あ、多分西野の事を言われるんだな、と思ったよ。
　だって　西野に告白はダメって言っといて　当の本人は西野と一緒にいるんだからなぁ。色々と誤解される可能性だって捨てきれないし。
　真中は言いふらす様なヤツじゃないから、まだ助かった。これが小宮山だったら　えらいこっちゃ、だ。
「なぁ！　オレの夢、神谷にも聞いて貰いたいんだ！」
「……へ？」

「オレな！　将来映画を作る人になりたいんだ！」

まさかの予想外のお言葉。

この流れでなんでそうなる！　って聞きたかったけど、とりあえず今は聞き手側に回ろう。というより、真中が返事を待たずに続けてきたし。

「映画作る人……。あー成る程、オレが真中監督ーって言ったのって結構的を射てたって訳ね。変態役じゃなく」

「ちょっ!!　それは今は　どーだって良いだろ！」

「……ふーん、変態役、ねぇ。キミだったらありそーだけど。ね？　そう思わない？　えっと東城さん」

「ふぇ!?　え、えと……　わ、私はちょっと判らないかなぁ」

西野にまで言われような真中。ある意味可哀想だと思ったけど廊下でのやり取りを考えたら仕方ないよ。

んで、西野と東城は互いに自己紹介をし合ってた。

オレは、何故か真中に夢の話を色々と聞かされてた。

「なるほど。……はぁ　けっこー真中って酷いヤツだな。女の子に『見ないで!!』って言われてたノート、勝手に見た挙句に翌日にはその本人の東城を屋上に連れ出して……。将来警察の人にお世話になるのはやめとけよ」

「うぐぐ！　そ、それはオレも悪かったって思ってるけど……、ってんなヤツにはならねぇよ!!　で、でも　おかげでオレは東城の事訊けたんだ。本当に凄く面白い話で、今でも頭に浮かぶ。文字しか見てないのに、まるで映像が見えてたような感覚があった。自然とカメラワークまで考えてて……」

いつもの真中の空想癖……とは思えなかったよ。

そこまで真剣なんだ、って事が　情熱的なんだ、って事がよく判った。嫌でも伝わったからな。東城のノートの件も、まぁ本人が許して

るんなら大丈夫だろ。あれだけ見ないで、って言われたら見たくなっちゃう心情も判らないでもないし。

「うん。それでな。オレ……東城の物語に彩る歌声が、神谷のものにピタっ、ってくっ付いたんだ。色んな演出、キャストもそうだけど、それら全部を更に彩るのが歌。映画のエンディングだけじゃなくて、途中でもあったりするじゃん。それがお前の歌だって思ったんだ！」

「お、おお。そ、そうなのか……、なるほど……」

西野とはまた違った意味で強引な真中だよ。

でも、真中でも西野でも同じなのは……、ここまで言ってくれて悪い気なんて全然しないって所。それでいて、それ以上に恥ずかしいって事だ。

「それでよー！」

「あ、東城さんって　確かどの教科も学年トップクラスだったよね？

今度さ！　あたしに数学教えてよ！　ちょっと一次関数の問題が辛くって――」

「え、えっと　私で良ければ……。でも　数学だったら――」

真中が延々と話し続けてるよ。言葉のキャッチボールが出来ない。まー　映画関係だったら大体こんな感じだったけど。恥ずかしいって思ったり、声に出したりする暇が無いくらいだし。

だけど、うん。皆仲良さそうなのは良い事だな、うんうん。

真中に至っては　ちょっと最低なタイミングでの西野との出会いだったし。東城に関しては　いきなり友達を作れる様な感じじゃないって思ってるし。西野の性格なら、外見だけで色々と反応を変える様な奴じゃないし。流石に、最低ラインっつーのはあると思うけど。

あ、西野は東城とばかり話してるから、真中と仲良いかどうかは判らないかな。

でもなぁ……。

キ～ン　コ～～ン　カ～～～ン　コ～～～～ン♪

「……」

学校休みとかの時にやらない？　そのやり取り。せめて昼休みとかにさ……。

１５話

屋上で鐘の音を聴くのも乙なもんだな、と思ったり思わなかったり。

ただ、もうちょっと慌てても良いって思うんだけど、案外皆ケロッとしてたよ。いや　東城だけは慌ててたかな。

それは兎も角、当たり前だって言われるかもしれないけど　あの後先生に怒られて大変だった。

まぁ　西野のクラスでは運が良かったのか、先生が来るのが遅れたらしく、全くお咎めなしだった様なんだが　ちょっとオレの中で何か引っかかってたりするケド。

今はもう放課後。色々あって　直ぐに帰らず　ちょっとゆっくりしてた所に真中がまた出てきた。多分、また映画関係の話になってくるんだろうけど、先ずは言いたい。勿論午前中の事だ。

「はぁー朝はたいへんだったな？　注目されんのは正直嫌なんだがなぁー　真中は慣れてると思うケドさ」

「って　別にオレだって慣れてる訳じゃねぇって……」

「そうか？　小宮山や大草と授業中に、まぁ色々とカミングアウトしてたらしいじゃん。メッチャ目立ってたらしいぞ？　お前ら。……オレ保健室行ってて良かったって心底思ってるよ。そこに　いたら１００％巻き込まれてるパターンだろ」

「っ……」

因みに、前にも少し話してたけど、改めて説明すると　それは小宮山が抜き打ちの持ち物検査で引っかかった時の事だ。

原因は　グラドルの写真集を集めた写真を張った下敷きだった、らしい。
まぁ　その後は、先生に取り上げられて、それに抗議する真中がそれはそれは勇ましかったらしいよ？　うん。……裸じゃない水着だーとか、それはオレ達の活力剤だとか、清涼飲料水だとか、色々と言ったらしいわ。
おまけに大草を巻き込む形になって、最終的にグラウンド５０周を課せられた真中と小宮山。
此処でもう一度。大切な事だからもう一度言っておこうか。
『オレ、そこにいなくて良かった！』

因みに東城も残ってた。今日一日ずっと暗いのは絶対今朝の事だろうな。怒られたから気分が悪い、とかではなく　東城はずっと気にしてる。
「あの、ごめんなさい……神谷くん」
「いやいや大丈夫だって。それに　大体は真中が悪いって事で片が付くし」
「何で大体がオレなんだよ！　ってか、オレで片付けるなよ！」
因みにこれは最初じゃないから。２，３回目くらいだよ。何度も良いって言ったんだけど、気にしてるみたいだったから、ここは真中に活躍してもらおうと思った。
勿論　オレは真中が全部悪いとは思ってないよ？　だって　あの時屋上に先に行ってたのはオレだし、その後西野が来て、あの場で歌う事を決めたのも最終的にオレだし。歌をうたってたら　２人が来て……
ん？　つまり、オレが一番悪い……？　って少なからず思ったケド。それは全力で否定したよ。オレの中で。

真中は兎も角、東城ははっきり言って優等生だ。
授業態度等の内申点も申し分ないし、今までもこんな事無かったと思う。それにずっと気にしてしまう程優しい性格だったのはよく判った。
そんな東城も遅刻したのは同じだから一緒に先生に説教されたんだけど、……される切っ掛けは東城も一枚噛んでるんだけど、何だかいたたまれないんだよ。
と言う訳で　真中に活躍ならぬ、全部かぶってもらおうと言う事だ。性格悪いかもしれんが　今までも真中に付き合わされた事とかを考えたら、絶対釣りがくるって思う。
「ふふふっ……」
それに、こうやって東城が笑顔に戻れたんなら良いだろう。辛そうな顔をさせるくらいなら何も問題なしだって真中も思ってる様でただただ笑ってたよ。
「まぁ、真中の事はとりあえず置いといたとしても、正直……西野だけがお咎めなしっつーのがちょっとばかり納得しかねるだよなぁ……」
「あ、あはははは。それは西野さんは運が良かったんだ、って思うよ。2組の先生。授業準備で遅れたって言ってたみたいだし」
「それは、オレも聞いたが……　一番最初にアイツがサボろう！　とか言いかけてたんだしなぁ……」
うん。西野は間違いなくあの時『サボっちゃおう！』とか言いかけた。オレが途中で割って入ったから最後まで言えてないけど、今回の主犯だって言っても良いくらいだ。
でもまぁ、仮に教師側にオレがいたとして、西野が申し訳なさそうに謝ったりでもすれば……。うん。無条件で許しそうな気がするけど、それは　それ、これは　これ、という事で。
「(……西野さんは、きっと神谷くんともっともっと一緒にいたかったんだって思うよ)」
「ん？　何か言った？」
「んーん。何でもないよ」
何言ったのか判らないけど、さっきまでの顔よりは良いだろう。笑

顔が良い。

なんか、西野と出会ってオレ色々と変わってきてる気がする。
真中とか小宮山、大草はまだ男同士だし　話す事は多いかもだが、基本的に女子と話す事は殆どないって言っていいし、……こんな風に考える事も無かったんだけどな。笑顔が良い、とか。考えるだけで恥ずかしくなりそうだし。

「おーい、2人とも。そろそろ帰らないか？　東城！　後小説の続きもよろしくな！」
「あ、う　うん。でも　真中くんちょっと、その……」
「声デカいって。まだ帰ってない人だっているかもしれないのに。小説の事あんま知られたくないんだろ？　東城は。……あぁ、オレの事も心配になってきたよ。ヤバイ奴にバレたな……」
「わ、悪かったって!!」
真中は声がでかいし、色々な意味で一直線だから。
歌の件も、妄りに言わない様にと約束させたけど、この分じゃいつバレる事やら。
「……あのー、キミたちはまだ帰らないのかなぁ～？」
そんでもって、こんな感じでいつの間にか現れるのは西野だ。もう定着するんじゃないか？　って思う。真中の映画で言えば西野の登場のシーンが。
「あっ、西野さん」
「やっほー、東城さん！」
「もう良い時間だし、オレらも帰るか？」
「……そうだな」

と言う訳でオレ達は帰り支度。
ん？　何だか西野とも一緒に帰る様になったらしい。流れに身を任せたと言うか何と言うか。4人いるから別に問題ないと思うんだ

が……。
「流石に放課後は賑やかじゃないみたいだなー」
「もーー！　だから、勝手についてくるんだってば！　しみじみと言うなよっ！」
　西野に取り巻いてる人数はねずみ講？　って言いたいくらい倍々に増えてるのを見たから、しみじみそう言っても良いって思う。……うん。それだけだと思う。きっと。

「ふふっ（きっと、神谷くんは　ヤキモチ妬いてるんだね……？）」
「ん？　どうしたんだ？　東城」
「いいや。何でもないよ、真中くん」

　うん。神谷くんと西野さんの２人を見てて、私は思った。
　次に書くとしたら、小説の登場人物は２人をモデルにしたいって。真中くんにも凄く褒めてもらえたし　少しだけ自信をもって書けると思う。

　男の子の方は、なかなか女の子のアピールに気付いてくれない。女の子は必死に気を引こうとしてるんだけど……、やっぱり気付いてくれない。そうなっちゃったら、ちょっとありふれた恋愛物語になっ

ちゃうから、そこにファンタジーの要素も少しずつ入れて。
ん。男の子の歌には　神秘の力が宿ってて……、諸外国のトップがそれを狙ってる。でも、男の子は　女の子の前でしか歌ったりしないんだ。
その歌の力が本当に覚醒するのは、本当の力が宿る為には　心から想ってる相手がいないといけないんだよ。そう、男の子にとって唯一無二の女の子じゃないとダメなんだ。
その想いが愛だと知るのは　ずっと先の事で――――。
「って、東城!?　前、前！」
「きゃんっ！」
あ、あたたた……、考えすぎてて電柱に当たっちゃった……。メガネかけてないって訳でもないのに。
「大丈夫か？　結構な音鳴ったぞ」
「わっ、東城さん！　女の子なんだから　顔に傷でもついちゃ大変だよ」
西野さんが、私にハンカチを貸してくれた。
うん。西野さんはすごく優しい。
容姿だけじゃない。男子にも女子にも圧倒的な人気がある理由が本当によく判るよ。
「あ、ありがとー。　あ、ちゃんと洗って返すから」
「んーん。だいじょーぶだって。ぜんぜん汚れてないし」
こんな地味な私にも分け隔てなく話してくれる事が、嬉しかったんだ。
「んー……」
「ん？　どうしたの西野さん。あたしの顔になにか……」
何だか西野さんが私の顔をじっと見てる。……お、女の子でも何だか照れちゃうよ？　西野さんみたいな綺麗な人に見られちゃったら。
「やっぱり東城さんって　すっごくキレイな顔してるね？　何だかその髪型とメガネで絶対損してるって思うよ？」
「え……っ」
「ねぇ　皆もそう思わない？」

西野さん、真中くんや神谷くんの方を向いたけど、私凄く恥ずかしかったりするよ。……だって　き、綺麗って　西野さんが言ってくれたから……。
「え？　あ、まぁ……うん。か、かもな？（これは、神谷の言ってる事を確認する絶好のチャンス？）」
「……かもな」
あ、神谷くんは流してくれた。
よく考えたら神谷くんは知ってるんだよね。丁度　屋上で会った時……そうだったから。
「でしょ？　蓮も真中くんもそう思うでしょ？　……うーん、あたし東城さんがメガネ取ったとこ、見たいな！　ねぇ　見せて！　見せてよ東城さんっ！」
「きゃ、きゃあっっ」
わわわっ！　に、西野さんってこんなに強引な人だったのっ？
「おいおい……嫌がってるなら無理強いするもんじゃないだろ？」
「だって、あたし色々訊い……っ　じゃなくて　東城さんって凄くキレイだって思うから　見てみたいもんっ」
西野さん……　色々って　何だろう。で、でも　今は。
「だ、だめっ！　あたし本当にメガネとっても変わんないし、だ、だから……」
何とか諦めて貰おうと思ったけど、中々止まってくれないよぉ…。
「そんなことないって！　絶対にかわいいってば。ね？　ちょっとだけ、ちょっとだけっ」
「ちょっとは落ち着けって西野」
「あうっ！」
あ、神谷くんが止めてくれた（軽いゲンコツで）
「さっきも言ったけど、無理強いはやっぱ良くないって。ってか、オレん時もそうだが、知り合って間もないのに　結構アグレッシブだよな、西野って。……色んな意味で」
「むー！　授業の内容が飛んじゃったら蓮のせいだから！　って、色んな意味ってどー言う事だよっ！　引っかかるぞ！」

神谷くんには、本当に何度お礼を言ったり　謝ったりしても足りないよ……。
でも、西野さんや神谷くんは気付いてないのかな？　神谷くんの事名前で呼んでる事。確か前は、神谷くんがそれとなく止めてた様な気がしたんだけど……。
「ねぇ、真中くんも思うでしょ？　東城さんの顔見てみたいよね？　絶対かわいいよね？」
「あ……う、うん。オレもメガネ取ったらイメージは変わるとは思うけど……」
「（あぁ、真中にオレ　言っちゃってるからか。んで、東城の反応を見て　そこまで強く賛成できない、と）……難儀だな。お互いに」
な、なんだか　西野さん真中くんに協力してもらおうとしてるのかな??

お願いします神谷くんっ！　なんとかしてくださいっ！

16話

東城に大して結構強引な西野だったけど、結果としたら　その暴走を止めたのはオレでも真中でもなく……。

『コラァ！　お前ら!!　下校の時間はとっくに過ぎてるぞ！』

寒い真冬だっていうのに　ランニングシャツを常に着続けてる男。そうまるで寒さを知らず、季節感と言うものが無く、いつも元気に外を走り回ってる子供の様な男。……まぁ　散々言ってるけどこれでも先生。生活指導の白鳥先生だったよ。

ここで見られたのが　良かったのか悪かったのか、目を付けられたら　教育と言う名のスパルタランニングを強要されてしまうかもしれないし、それが無かっただけで儲けものだ。

それに　まぁ　東城が西野から解放されたから、良しとしようか。とりあえず。

「はぁ……　あの姿を見たら　暑苦しいのか、見てるだけで寒いのか正直判らんな。いつもながら」

「だね。この寒い真冬でも一貫してるあの姿。長袖一着も持ってないって噂も、頷けるなぁ」

「おまけに妥協を許さない性格と来てる。ちょっとルール違反、と言うか帰るの遅かっただけでこれだ。店ん中とか買い食いとか気を付けないとな……」

只今下校中。

真中と東城とは別れて、丁度西野と2人で下校……　いやしかし、何でこうなったのかな。一緒に下校と言うのは真中や東城がいた4人だったからまだ良かったんだけど、流石に2人きりは……ちょっと。

「……西野」

「ん？　なーに？」

気を紛らわせようと、話しかけたんは良いんだが、何だか西野は妙に笑顔だった。直視するのが、非常に難しいくらいに。
「あぁ、何で東城にあんなに強引に行ったんだ？」
「……なに蓮。今日は何だか東城さんの事ばっかだね。何かあるの？」
あ、何だか　むすっ　とさせて　頬まで膨らませた。
……東城に嫉妬？　いやいや　何でオレなんかに。あ、歌かな？
西野は歌に惚れたって言ってたし、独り占めしたいって言う独占欲もあったりするのか、多分。
「いやいやいや、流石に仕様がないだろ？　それにヘルプ視線も貰ってたし、真中は頼りにならなかったし。幾ら強引だって言ったってあそこまで拒否してたら　言いたくもなる」
「……そーだね。蓮って何気に優しいし」
「何気っつーのは余計な気がするケド」
「だってさ。蓮は女子とあんまり話した事無い、だったんでしょ？なのにやっぱ東城さんとはけっこー話してるみたいだしー、やさしーからじゃん」
「その言葉、東城より　まんま西野に当てはまると思うんだが……。寧ろ量で言えば東城より圧倒的に西野だぞ？」
それは自分でも納得出来る話だ。
東城と西野。
東城に関しては　同じクラスだとは言え、まともに話したのはつい最近。
西野に関しても同じであって、クラスは違うが　それでも話し始めたのは同じく最近の事だ。
タイミングは一緒で、どっちと話したのか？　と言われれば西野って言う。
こんな質問と答えに何の価値がある？　って正直思うが……小宮山辺りに訊かれたとしたら、うん。考えたくないな。
「っ……　じゃあ、あたしにも　もっと優しくしてよっ！」
「なんじゃそりゃ……」

優しくしろ、って言う要求にどう答えたら良いか判らん。
「……あたしはね。色々と訊いてたの。東城さんに対する周りの声って言うか、何と言うか……」
「ん？」
西野の要求について考えてたら、話しが変わったよ。
東城に対する周りの声って、東城ってあまり目立たないから　そんなに声なんて上がらないんじゃないか？　って言うのがオレの意見だった。
「ダサイ、とか　ブスな黒縁メガネ、とか……　他にも色々と聞いた。綺麗事かもだけど人間って中身だって絶対思う。外見だけ男なんてあたし絶対嫌だし」
「……」
この時漸くオレは理解したよ。
東城に対する悪口。オレは聞いた事無いけど、西野は聞いたらしい。たまたまだったのか、日常的に陰口叩く様なヤツがいるのかは判らないが、仲良くなったって言っていい相手の悪口を言う話だったら、嫌だろう。
つまり……、あの強引な行動の真意は　東城の事を想っての事だったらしい。本人の意向を訊かないのは正直どうかと思うが、それでもその行動の理由を聞いたら思う。
「やっぱ、そうだよな」
「ん？　何が??」
「優しいって言葉。……オレなんかより」
オレ、自然と手が伸びたよ。
話すだけでも緊張するし、顔を見ても赤くなりそうなのに、自然と西野に手が伸びてた。
「西野の方がよっぽど優しい」
伸びた手は、西野の頭に置かれてた。
ゆっくり頭を撫でる。うん、心地よい感触……。うんうん、自分でやっといてなんだが、異常に身体が熱くなってきた。
「はー……」

西野は暫く何をされてるのか判ってないのか、固まってたけど。直ぐに背伸びする様に頭を出して手を払った。
「も、もーーー!! れ、れんっ!? あたしのこと子供扱いしてるだろっ!! あ、頭撫でられて喜ぶ歳じゃないってば！」
「ははは。悪い。ちょっと不躾だったな」
払われたんだけど、良かったかもしれん。オレの熱が伝わらなくて良かった。
放課後、夕日の下だから更に良かった。顔色なんて判らんから。

東城さんの髪とかメガネとか、改善してあげようって思った。
その理由は、東城さんの事を悪く言うのを止めさせようと思ったから。
東城さんの顔、近くて何度か見てみたけど　やっぱり綺麗な顔してるから。少しでも弄っちゃえば、絶対綺麗になるって確信してるからね。髪の毛やメガネだけで印象が変わるのなんて、ざらだし。
もし、綺麗になった東城さんが　蓮と――――って思ったら正直嫌な感じがしたんだけど、それ以上に折角仲良くなった東城さんが悪く言われるのだけは嫌だったんだ。
強引だって言われたケド、もうちょっとだったのに、白鳥先生が来たおかげで全部おじゃんになっちゃったよ。
あ、でも　どさくさに紛れて蓮と2人で下校出来たのは良かったか

な。色々な話題で盛り上がれるし　話しててやっぱり楽しいから。それに、頭を撫でてくれた事。子供扱いされてるっ！　って言っちゃったし　恥ずかしかったから払いのけちゃったけど　嬉しかった。蓮は不躾だって言ってたけど、そんな事なかったよ？　本当はさ。

　ただ、やっぱり恥ずかしいから。蓮に撫でられるのは気持ちが良いんだけどね……。

「あっ、優しくしてって言ったから行動に移したの？　な、なら良い心掛けだよ。うん」

「嫌がっといて今更だよ」

　嫌がってはいないんだってば！

「も、もう！　良い心掛けだって言ったでしょ!?　別に嫌がってなんかないよ……」

　うぅ、大きな声で言っちゃって何だか恥ずかしくなっちゃった。

「そうか。……ん？」

　あ、蓮の携帯電話が鳴ったみたい。

　この着メロは……確かあのアイドルの歌？　蓮ってアイドルとか見るんだ。ちょっと意外だったかも。あ、歌が好きなのかな？　それだったら判るかも。洋楽、邦楽どっちも凄く上手だったし。

「……」

　あれ？　何だか蓮の表情が険しくなっちゃった。あまり良い内容じゃないのかな？

「あー、西野。悪いな。用事が出来たみたいだ」

「ん？　そっか。じゃあここで、だね。もう家も近いし」

　嘘じゃないよ？　……ちょっと正直に言えば家に招待して、とかいろいろと考えてたんだけど……。

「じゃあな」

「うん！　また明日ねー」

　今日は楽しかった。

　途中から、とは言っても蓮と一緒に下校出来たのも良かったし……、ね？

でも、この後だったんだ。
とっても、……とても衝撃的な光景を目にしたのは、ね。
蓮と別れて、暫く歩いてもうちょっとで家って所で、蓮の姿を見掛けた。
あれ？　この辺りの家なのかな？　とか　もうちょっと行った所に商店街があるから　そこに行ってるのかな？　って思ったんだけど……それよりも問題だったのは、蓮1人じゃなかったって事だよ。
「……あ、あれ？　誰だろう、となりの人」
凄く気になった。
だって、蓮の腕を取ってるんだもん。腕を組んでるんだもん。
後ろ姿だったんだけど、間違いなく蓮で、それにとなりの人は、女の子だった。帽子をかぶってて、髪は東城さんより少し長いくらい。黒い髪でとってもサラサラなのは遠目からでもよく判る。それに横顔も見えたけど……すっごく綺麗な人だった。
メガネもかけてて、帽子も。一瞬だけ変装？　って思ったりしたけど　そんな事する意味は解らないし、それよりも蓮の腕を組んでる所にだけ、あたしは釘づけになってたんだ。
「……だれ？　だれ、なの？　ねぇ　れん……」
自然とあたしはそう呟いてた。
蓮に直接聞きに行きそうだったんだけど、足　地面に縫い付けられたみたいに動けなかったよ。

その日の後、家に帰ってあたしは　何したか覚えてなかった。
ただ、蓮の隣の人、誰なの！　って言う事だけしか。

17話

「……」
「おーい、つかさー」
「……」
「つかさってばー！」
「……」
誰、なんだろ。
あたし、昨日から　ずっと、ずっと考えてる。
普通に、普通に考えたら判るよね。あんな風に並んで歩く関係って
普通……。だって　街中に行けば沢山見かけるもん。みんな、みんな　あんな感じで並んで歩いてるもん。
「つーかーーさっ！」
「わ、わぁっ!?　な、なになに??」
突然横から大声出されちゃって凄くびっくりしたよ。
犯人はユリだね間違いなく。だって席が隣同士だもん。
「も、もう。いきなりなにっ!?　ビックリするじゃん！」
「何回も呼んでるのに無視するつかさが悪いーっ！　もう　つかさの事、5回は呼んだんだよ？」
「……えっ？　5回？　なんで？　嘘！」
「嘘じゃないもん。ねー皆？」
ユリが回りの友達の方を向いて聞いてる。皆が頷いてた。
あ、あたし　考えすぎててユリのこと無視しちゃったの？
「つかさ何だかずっとおかしいよ？　何だかボーっとしてるし、さっきの授業中だって、当てられて、聴いてませんでしたーって、つかさが言うの初めて聞いたし」
「うぅ……」
恥ずかしい所思い出されちゃった……。
うん。さっきの授業中も全然集中できなくて　授業の内容だって

頭に入らなくて　先生にあてられた時本当に頭の中が真っ白になっちゃって……。
「まっ　つかさは日頃の行いが良いからか、お咎めなしだったのは良かったよね？」
「う、うん……」
「さぁ　はくじょーしちゃいなさいよ。つかさ！　最近　すっごくご機嫌だったのに、今日に限っては一気にテンションダウンしてるんだもん。気になるよ」
「えっ　わ、わたしそんなだった？」
「バレバレだって。あそこまであからさまだったらさ？」
　うぅ……　何だか恥ずかしいよぉ。ユリとは長い付き合いだからかな……？
「ああ、因みにね？　判ったの私だけじゃないよ？　みーんなにバレてるから」
「ええっっ！　って　もーー　心読まないでよー！」
「あはははは。最近つかさってば判りやすすぎだよー」
　やっぱり恥ずかしい……。今の私　絶対顔赤くなってるよぉ。
「それで、好きな人でも出来たの？　つかさ」
「ええっ!?　な、なんで??」
「いやいや、判るから。女の子だったらぜーーったいピンと来てるから。昨日までの笑顔もそうだし、ちょくちょく休み時間教室抜け出したりして、バレバレだから。それで、ひょっとしてだけど――」
　うっ……、ユリってば　鋭い所があるから……バレちゃってたのかなぁ？　や、やっぱりちょっと恥ずかしいかな。幾らガンガン行く性格っ！　って自分で判っててても、こうも指摘されちゃったらやっぱり。
「４組の……」
「っ……！」
　４組。……うん。ユリ間違ってないよ。……やっぱり凄く鋭い。
「大草くんの事、でしょ??　学校一のハンサムだし、サッカー部でエース。運動神経も抜群だし、美男美女。つかさとはお似合いだって思う

よ？　でも、大草くんってけっこー周りに女の子多いし……、何だか
そんな場面にでも遭遇しちゃったのかな？　本命がいるって噂は訊かないから　諦めるのは早いよっ　つかさ！」
……うん。早速だけど前言撤回だね。ユリ凄く間違ってる。でも間違ってくれてて嬉しかったかも。
改めて思うよ。持つべきものは友達だって思う。大草って人の事話しには聞いた事はあるけど、余り知らないんだよね。でも、嫉妬されるレベルの格好いい男子って言うのは判る。そんな子と噂とかになっちゃってたら　女子だったらきっと――って思うんだけど、ユリにはそんな気配はないし、あたしの事心配してくれてるし、励ましてくれてる。うれしいよ。
ぁ、でも、ユリのタイプは弟君だからかな？　興味とかあまりないのって。
「あはは……。全然違う違う。ユリ？　だって大草って人とあたし話した事も無いし」
「あれ？　そーなの??」
「うん。話しには聞いてるけど……知ってるでしょ？　そー言う噂とか、見かけとかだけで判断して、舞い上がって～なんてしないって事」
「そうだよねー。うんうん。そこなんだよねー。つかさってさぁ。と言う事は　何かあったんだよねー？　絶対にさ」
「え、えっと……ユリ？」
あれ？　何だか、ユリの言い方と言うか　雰囲気と言うか、ちょっと変わってない？
「うぅーん。結構最近なんだよねー。つかさが変わったかな？　って思ったのは。でも　クラスでは目立った事起きてないしー。こんなつかさ初めてだしー。大草くんじゃないって事は他の？　４組の子と言えば誰だっけ？」
「……」
判ってきたよ。ユリが何をしようとしてるのか。
「しれっと探りを入れないでくれるかなー！　誘導尋問とかしよーとしてるでしょ！」

「あははっ　バレたか」
　ユリってば！　そこまで行ったらあからさま過ぎるよっ！
「もうっ！」
「ふふ。でも笑顔には戻ってるね？　つかさ」
「え……？」
「さっきまでの顔よりは良いよ？　ほら、もう授業始まるからね♪」
「も、もうっ！」
　やっぱり……、持つべきものは大切な友達だよ。でも心配をかけちゃったのはほんと申し訳ないかな……。
「気が向いたらで良いから。相談ならいつだって乗るからね？　つかさ」
「ぁ……。うん、ありがとねユリ」
　これは簡単に解消できる悩みじゃないけど本当に嬉しいよ。ありがと――ユリ。

　本当にありがたかったんだ。とっても。
　でもやっぱり心のもやもやは取れたりはしないよ……。
「（だれなのかな……？　あの時間で、あの後直ぐに会えたって事はこの辺の人……だよね？　でも、学校では見た事無いし、会ってたりもしてないって思うし……。あまり話さないって言ってたんだけど、ウソだとはもう思えないし……）」
　どうしても考えちゃうんだ。
　蓮の隣で歩いていた女の人の事。腕を組んで歩いてた女のひとの事。
　その時、蓮ってどんな顔してたんだろう……？
　女の人の横顔は見えた。でも、蓮はずっと前を向いてたから見えなかった。とてもきれいな人で、あんな風に密着されたら、男の子だったら嬉しくない筈ないって思えちゃうし……。
「（うぅ……。色恋事に無頓着な朴念仁って訳じゃなさそうだよね……。だって、ほら　あ、あの時　あたしが。……蓮につい『惚れちゃった』って言った時、顔凄く赤くなってたし……）」

うぅ……ユリや皆にこれ以上心配かけたくないんだけど……やっぱり考えちゃうよ。蓮の事、だって　だって、あたし――本気だから。蓮のこと……。

「（……うん！　うじうじするのは駄目！　あたしらしくない！　また蓮に……蓮に会いに行く！　頑張るっ！）よしっ!!」

「お、気合入れたな西野。よし、その勢いでこの問題解いてみろ。三平方定理を使った証明問題だ」

「……っっ!?」

また、あたしベタな事しちゃったよ……。それも苦手な数学の時間に……。

あの後ユリにちょこちょこフォローして貰って、○はもらえなかったけど、部分点。△くらいは貰えた。

証明問題、特に苦手だから……重点的にしないと、だね？

蓮がどこの高校を狙ってるのか判らないんだけど、絶対同じトコ行きたいから。５教科の中でダントツで数学がダメだから。……蓮の事をしっかり解決した後にでも。

……うん、頑張らないと。

「なぁ　神谷ー。どうしたんだ？　今朝から生気が抜けた様な顔してんぞ？」

「はぁ……　大丈夫だって。ただ疲れただけだ……。昨日、いろいろあったから……」

「んだとぉぉ!!　神谷テメェ！　つかさちゃんと一緒に帰って疲れた事があったのか、コラァァ!!　いったいナニしたんだ!!」

「喧しいし、違うわ!!　デケェ声で変な風に言うな！」
確かに、真中が言う様に　オレは凄く疲れてる。
生気が抜けた顔って結構あってると思う。ほんとに色んな意味で昨日は疲れたから。
でも、誓って言うが小宮山の様な事じゃない。西野との下校は楽しかった。疲れる、何てことはない。……ちょっと気を使って、それで心労が　と言うのはあるかもしれないが、学校に影響がある様な事は今の所無い。
それに西野との下校の話をデカい声で言われるのは正直頂けないんだ。色々とひそひそ話されるかもしれないから。あんな行列を作ってる西野なんだ。他の男子が黙っちゃいないだろうし。
「お前らほんと目立ってるぞ……。特に小宮山だけど」
「遠目から眺めてるなよ……。止めてくれ」
「無理だって、小宮山は西野に振られてから　色んな意味で暴走してるから」
「だれが暴走してるだぁ!!」
「お前だ!!」
オレと大草のダブルなツッコミを喰らった小宮山は、またまた何処からか飛んできた金盥を喰らって仰け反ってた。
「あ、真中。東城との事はどうなんだ？　色々と確認する～って意気込んでたじゃん」
「う……」
大草が突然真中に話題を振ったら、明らかに挙動不審に陥ってた。
でも当然だって思う。
「まぁ……確かに幾ら仲良くなったからって、真中の動機をそのまま東城に伝えるのは……なぁ？　神谷」
「まぁ男子なら判らんでもない、って思うケド、言葉に出した時点で完全な変態だし」
「オレもそー思うぞ」
小宮山がここぞとばかりに乗っかってきたけど。

「小宮山だけには言われたくねぇよ!!　でも、オレゆっくりと行くつもりなんだ。東城とは、話しが合うし　話してるだけで楽しい！　だから今は……今は良いんだ。東城は　いちごパンツ以上のもんがあるんだよ！」
あぁ……、さっき言った事完全に理解してないみたいだったよ。
オレ、釘刺すつもりで言ったんだけどなぁ……、『言葉に出した時点で～』って言ったの、自覚を更にさせようとしたんだけど……。
「頼むからオレ達を巻き込まないで。教室でデカい声でんな単語はヤメテ」
「変態過ぎだぁぁ！　ヤッパお前が一番だ!!」
「っっ!?　ち、ちがっ!!　ってか、だから小宮山だけには言われたくねぇってなんど言わすんだぁぁぁぁ!!」
あ、真中がなかなか腰の入ったパンチを小宮山に当ててた。いつもなら、小宮山が暴走して　パンチ喰らわすシーンが多いんだけど、珍しいな。『真中ぱーんち！』だって……。

「ま、真中の方針は悪くないって思うよな？　神谷。東城を落とすなら時間をかけて、ゆっくりと外堀を埋めてかないとってオレは思う。ほら、あーゆータイプって男を信用してないってゆーか、恋愛に関してはかなり慎重っぽいよな？」
「……何でオレに訊く？　そう言うデータが多いんなら、自分の中で完結できるだろ……？」
「神谷の考えと一致すれば、更に効果が発揮するんだって」
「一体何の効果だよ……」

まぁ、色々疲れちゃったケド　昨日に比べたら大した事無いか。商店街で誰にも会わなかったのは　本当に幸運だったよ……、ほんと。

18話

うん。学校が終わってもやっぱり疲れはとれんな。
父さんが仕事終わりに毎日くたびれて帰ってくるんだけど、こんな感じなのかな？　まぁ　こんなのが毎日続くなんて考えたくないからそう思いたくないかな。
あぁ　父さんは仕事で疲れるってよく聞くけど、基本オレは家で疲れる事があったりするんだよなぁ。原因は判りきってるけど。
「なんて不景気な顔してるのよーっ　れーん！」
「……さて、何でだろうな？　多分　その理由はきっと近くにあると思うんだよ。考えてみて」
「んー……　はっ!!　ま、まさか　学校で何かあったっ!?　告白とかされて、『自分には姉ちゃんがいるのに！』ってなったとか??」
「かーさん。今日の晩飯なに？」
「ん？　カレーよ。ちょっと手伝ってくれたら嬉しいかな？」
「ＯＫ。今行くよ」
母さんもいつもいつも大変だって思う。育ててくれて感謝だってしてるさ。だから、自分で出来る事はしっかりとやろう！　って決めてんだよな。……ちょっと恥ずかしいから、口に出して感謝はまだまだ伝えられてないって思うんだけど、何れはまたちゃんとしないと、って思ってたりはしてるよ。
と言う訳で、1人おいて離れていく。
「もーーーっ！　蓮のいけずーーー！　あの時みたいにもっともっとカマってよー！」
「こらこらこら、愛ちゃん。家で暴れないの。と言うより、もうちょっとでお迎えくるんでしょ？　出発の準備出来てる??」
「わぁぁ！　蓮のことばっかりで忘れてたっっ」
「早くしなさいよ？　ご飯は食べてく時間ある？」
「もちろんだよっ！　お母さん！　蓮とディナーっ♪」
「う～～ん、お母さんやお父さんも入れてほしいけどねぇー」
「あははっ！　もっちろん。忘れたりしないよー。でも　私の中で

は蓮が一番なのっ」
「そんなのずっと前から判ってますから」
本当に疲れる原因(姉)だ。
自分自身も忙しい癖に、その合間縫って迫ってくるんだし。母さんは母さんで　マイルド過ぎるし。父さんは、……姉ＬＯＶＥだから、『別の男や芸能人関係の男にくっ付くくらいなら、行け！　蓮!!』って　めちゃくちゃな事言ってるし。
「はぁ……」
色々と疲れてしまうのは、我が家族のおかげ、って事だな。間違いなく。今日の心底疲れた理由は、姉が言っている《あの時》の事だ。色々と気を使ったり、変な意味で緊張したりと　心労が溜まったんだって判る。一発で。

あぁ、でも　ぜーーったいに本人の前でとかは口にしないけど、姉の事　心底嫌ってる、とか　見たくもない、とかそう言うのではないんだよな。

昨日、何だかんだで西野と下校になった時、携帯に入った連絡は《姉》からだった。

いつもの調子の文面だったんだけど、最後の方には真面目な内容だった。簡単に言えば『皆の為の買い出しを手伝ってほしい』だった。

皆、と言うのは家族の事ではなく　アイドルグループの皆さんやマネージャー、はたまた現場で働いてくれてる皆への買い出し。
一度や二度程度なら兎も角、結構な頻度で行っていて、普通はそこまでしないらしい。生憎芸能界の普通って言うのは判らないが、それでも同じアイドル仲間やマネージャーさんとかになら、判るけど、現場の全員に～と言うのは無いと思う。
サプライズのプレゼントとかも有ったりと、色々相談されたりもした。女の子へのプレゼントとか正直、オレに訊いても判らんと思うん

だけどな。

仕事に関して姉は非常に真面目で努力家。

そして勿論ながらファンの事も大事にする。どれだけ疲れててへトへト。家に帰ってきたら　リビングでバタンっと倒れる様に眠る程疲れてても、握手とかサインとか、本人は拒んだりせず決して顔に出さず笑顔。（でも、マネージャーが行き過ぎる時は止める）

幾らオレの前ではメチャクチャ迫ってくる面倒な姉とは言え　その姿勢に関しては本当に尊敬する所はあるから、真面目な話に関しては出来る限り手伝ったりはするんだ。

でも、あまり訊き過ぎると調子に乗って、すり寄って来り、……まぁ　メチャキスしてくる（勿論回避済み）。でも　それでもめげずにどんどんせがんだりとしてくるんだ。当たり前だけど色々とアウトな所はスルーする。

でもまぁ　手を繋ごうとしたり、腕を組もうとしたりしてきた時は、周囲の目があるし、無理に振り払ったり、メチャクチャ拒否したりすると　かえって色々と目立ったりするんだよ。（過去にもあったし）その上変な噂がたったりする可能性もあるし……。うん　後々が大変かもしれないから、行き過ぎない限りは黙してる。

何せ軽く変装してる姉と自分は姉弟には見えないから、傍から見れば恋人らしく、それに冷たく乱暴に扱ってるオレと言う構図が出来上がってしまうのだ。……姉に対しての周りの評価だったら別にそこまで思わないんだけど……『恋人(笑)に対しての対応が最悪な蓮くん』と言う噂だけは頂けない。

いや寧ろ事実無根な噂は全部拒否したい所だけど。

それは兎も角　昨日の商店街へ買い物に行った時の事だった。誰も見知った相手がいなくて本当に良かったって思ってるよ。

「蓮～ご飯よそってー」

「ん。ＯＫ」

「あっ　お父さん帰ってきたみたいだよー」
仲良き事は美しきかな。
家族が仲が良い事は歓迎すべき事だって事は判るよ。ニュースとかでは考えられない、信じられない事件とか起きてるし。
でもなぁ……。
「今日はねー。ジョニーズのグループとの共演で～～」
「むむ！　とーさんは　蓮以外はゆるさんぞ!!」
「もー、お父さんったら～！　わかってるよっ。だって　私は蓮一筋だもんっ」
「よし！　行け！　蓮っっ!!　愛を離すな!!」
「……」
「あらあら♪　まぁまぁ♪」

ちょっと変だよな……？　こんな家族も……。

『何でどうしてオレだけ　浮いてるんだろう……？』

って歌っちゃいそうになるよ。某アニメの番外編の歌。

19話

「はぁ……　ほんっとあたしって意気地なしになっちゃったんだなぁ……。こんなんじゃないって思ってたのにな」

あの日から今日で4日目だよ？　一週間、終わっちゃうよ？　時間は無限じゃないんだよ??

って自分でも思ってるのに、頑張ろうっ！　ってずっと思ってたのに。……なのに　あたしは　蓮と一言だって話せてない。それどころか　蓮に会えてない。蓮の歌……いや　声さえも訊けてない。

「……やっぱり寂しいよぉ。でも　まぁ　行けてないあたしのが悪いって言えば　自業自得なんだけど……。うぅ……　でも　蓮だって、蓮だってぇ……」

クラスは違うけど　会おうと思ったら会えない筈はないんだ。現にちょっと前にはあたしは蓮に会っていたんだから。

でも蓮とも仲良くなれたって（あたしは）想ってるし、ずっと会えてなかったら様子を見に来てくれたって良いのにっ！

そうだよ！　蓮が来てくれないのも悪いっ！　あたしだけのせーじゃないっ！　蓮が悪いんだゾ！　絶対にっ！　……。

「はぁ……」

「おーい　つーかーさっ！　猫背になってるぞー！　それに　ため息はすればする程　幸福が逃げてくんだぞーーっ！」

「きゃあっ！」

突然、背中を叩かれてビックリしたよ。

うん、誰にされたか判る。声で判ったし　それに何より　いきなりこーいう事するのは間違いなくユリだよ、絶対。

「も、もーっ！　やめてよーユリっ！　ビックリするじゃんっ」

「だって、もういい加減見てられないんだよっ。生返事だって多かったし、あの時は吹っ切れたー！　って笑顔になったと思ったらすぐに戻っちゃって！　それでも頑張るって言ってたから見てたけど……、全然変わってないんだから！　だからほら　つかさ！　いい加減に

話してよ！　元気ない　つかさ見てるの私も辛いのっ！　ほら、向こういこっ！」
「うぅ……」
今のユリ　全然フザけてる感じじゃなかったよ。強引なのは変わらないんだけど。
それに、こう言うのって『余計なお世話』とか『自分の問題なんだからほっといて！』とか言う人だっていると思う。
それでも、あたしは不快になんか思えなかった。前の時もそうだったけど、やっぱりあたしの事を本当に、本気で心配してくれてるって伝わったから。……それと同時に、やっぱり凄く心配かけてるんだって事も改めて思ったよ。また、同じ事言われちゃったから。
だから、もうちゃんと話したよ。相手の事も。……相手が蓮だって事も。
勿論、周りに誰もい無い事は確認したよ？　蓮って　騒がれるの嫌だって言ってたし。あたしも……、流石に恥ずかしいし　それにその……　望んでないのにいつも周りには誰かついてくるから。
蓮と一緒にいる時は2人が良いから。
うぅ……やっぱり恥ずかしいな。本人はいないとはいえ告白しちゃうのって。
真中君やあの怖い男子は堂々と廊下で言ってたけど……　今はある意味尊敬するかもだよ。
「ふむふむ……。成る程ねぇ。難攻不落なつかさを見事撃沈陥落、ハートを射止めたのは　あの神谷くんだったのかぁ……。うーん。でも　分かる気はするかな？　言ったら大草くんが表で、蓮くんがが裏って感じ？　隠れイケメンって呼ばれてるもんね。でも　他の子よりもずっと大人っぽいし、大草くんって結構女子に囲まれる事が多いし　楽しく遊んでるのも見た事あるけど、神谷くんは　そう言うのなくって　雰囲気も他の男子とは全然違うしねー」
ユリ　凄く良く知ってる様な気がする……ケド、これがほんとスタンダードなんだよね。蓮は頑なに認めなかったり、信じなかったけど結構人気だったんだよ？　聴こえてくるんだよ？　ほんとに。

「う、うん。あたしは　蓮とは付き合いはとても短いんだけど。そんな感じがするのは確かだよ」
　もう、誤魔化したり　はぐらかせたりせずに、蓮の事どう思ってるのか　認めたよ……。ユリにはもう嘘つきたくないからね。
「ほほぅ……付き合いねぇ……」
「あっ、ち、違う違う。知り合ったのは～だった！　付き合うって言ったら彼氏彼女って感じだし、そんなトコまで行けてないから！」
「どーどー、落ち着いて。うむ　よしよし。と言う訳で　つかさとの馴初め話なんかはどーなの？　その話　プリーズ」
「うぇっ!?　な、馴初め!?」
　馴初めって言われたら、何だか凄く恥ずかしいよ！　だ、だって確か恋人同士とか　付き合ってる男女とかが知り合ったきっかけとか、そんな意味だった筈だし。
「べ、別に話して面白いものじゃないよ??　そ、それに今は　違うじゃんっ！　今はかんけーないって！」
「あっ、そう言えばそーだったねー。つかさを元気付けて神谷くんのトコに送ろう！　って会だったね」
「うぅ……　ユリ、絶対楽しんでるだろ……」
「あはははは。ごめんごめん。そんな事無いって」
　笑いながら謝られたってなぁ……。
　でも、やっぱし軽くなれたって思うかも。……最初からユリには相談しとくべきだったかな？　面白おかしくされちゃうのは嫌だけど。
「でもさ、訊いてみたいって思うかもだね。だって　つかさ　ってばほんと色んな人に告白とかされちゃったりしてるけど、まーーったく靡かなかったじゃん？　大草くん～とまではいかないけど、秀才クン、イケメンクンとか沢山いたけど全部撃沈させたしー」
「う、うるさいなーー！　あたしだって　好きでされてるんじゃないよーっ！　そう言うの興味ないって言っただけだもんっ！　それにまだまだあたし達なんて子供っ！　中学生なんだから！」
「そうそう、判ってるってば。あたしが一番つかさの傍にいたんだし、判らない訳ないでしょ？　だからこそ思っちゃうんだよ。あの、つか

さがねーって」
「むー……。しょーがないじゃん。蓮と一緒にいるととても楽しいんだから。何気ない話だって楽しくて仕方ないんだから。あたしと一緒に笑ってくれると、なんだか幸せな気分になれるんだから。……でも」
あたしは　今までの事を思い出しながら、続けたよ。
屋上で出会った時の事。逃げられちゃった事。思わず告白みたいな事しちゃった事。……それで歌まで聴けた事。
蓮の歌ってた曲がコンビニとかで流れた時さ。何だか今まではあまり聴かなかった曲だったのに　すっごく聴く様になって、好きになって……。……なってたのに。
「……あれから好きになった曲だったのに、全然良い曲に聴こえなくなっちゃったし。もう4日目だって思ったんだけど……　本当はあたしは凄く長く感じてたんだ。ご飯だって何だか砂を食べてるみたいで美味しくなくて。……やっぱり　つまらないんだ。蓮が隣で笑ってくれないと。蓮と一緒にいないと……」
「……」
「あっ！　ご、ごめん！　違うよ！　ユリや皆といる時が楽しくない訳じゃないんだよ??」
「あっはは！　無理してそんなフォローしなくて良いってば。友達との付き合いとはまた別次元の話だって。そのくらい判るから。甘い物は別腹って感じでさ?」
ユリは腕組しながらうんうん頷いてた。
でもなんだか例え話が変だって思ったケド、今は良いや。
「あのね、つかさ」
「う、うん?」
「話聞くと、つかさは　れん……　神谷くんと喧嘩した訳でも　こっぴどくフラれた訳でもないんだよね?」
何だかすっごく不吉な事言ってくれてるよ……　ユリ。そんな訳ないじゃん！
だからあたしは、反射的に首が痛いって思うくらい頷いてた。

「神谷くんと一緒に誰かが帰ってて……、その後ろ姿が恋人っぽくみえて、って事なんだよね？　んで、そこからＳＴＯＰしてるって事？」
「う、うん……。そこから先に行けてない。……行けてないんだ」
うぅ　改めていわれたらすっごく落ち込んじゃうよ……。
情けないってあたし自身でも……。まだ　そうと決まった訳じゃないのに。……確かめるくらいなら　簡単だろっ！　って思うのに……。
「ふんふん……。ま　つかさが初めて好きになった人。つまり初恋の相手だから　ちょっと奥手になっちゃう理由も判らなくもないよ」
「う……。ど、どーも」
初恋って言うのは……うん。間違いない、かな。きっと……。こんな気持ちになったのって初めてなんだし。
「よしっ！　なら　まだまだ望みはあるってば。道は途切れてないよ！」
「うぇっ!?」
突然ユリが身を乗り出してきたからびっくりしちゃった。思わず仰け反ったった。
「『うぇっ!?』じゃないって。どんどんアタックしようっ！　ほら　私も一緒に行くからさ。１人じゃしんどくても、傍にいてあげる！」
「あ……」
それは……確かに勇気が出るかも。……ユリがいてくれたら、いつものあたしに戻れるかも。
「それに話を訊くと　神谷くんって　つかさに『家族以外の異性と話のはつかさが初めて』って言われたんだよね？」
「え、えっと……。うん　まあちょっと違うって言われたケド。普通に話しかけられたら話し返すって言ってたし、実際にそこは見たし」
「違う違う。話の肝はそこじゃないってば。……良い？　つかさ。私が思うにね……」

「――っ」
「（なんだか……遅いな。まだ始まって１０分かぁ）」

最近のオレ　結構な頻度で窓の外見てる気がする。
飛行機雲見つけたり、鳥が飛んでてその数数えたり、ただぼーっと眺めてたり。
つまり凄く時間がたつのが遅いんだ。

「――やっ！」
「（……今日の晩飯、なんなんだろ……。姉貴は帰ってこないって言ってたし、少しは落ち着いて食えるな……）」

何か考える事自体を考えてる。

集中してたら、時間って凄く早く感じるから、それを狙って考えてる。でも、一向に早くならないんだ。

「――みやっ!!!」

「(……はぁ、もう認めろよオレ。会えてないからだろ？　……アイツに会えてないから、なんだろ？　そうだろ。……認めなって。もう)」

無理矢理判らない風を装ってたんだけど、……判ってた。もう流石に認めるしかなかった。

ここ最近　アイツ……西野の声、訊けてない。顔だって見てない。

何でだろう？　今までは　西野の方から……だったのに。見ない日はないって思うくらい連続だったのに。逃げようとさえしてたのに。

「(……こんなに考えてんのに、自分で行動せずに西野の事待ってるって言う事　事態女々しいって事なのかな……？　オレから行かないとダメって事か？　でも……なんでだろ？　なんで来なくなった？　あぁ、勉強とかかな。東城と勉強するとか何とかって言ってた様な気がする……。それに、……他に、……その)」

それは　考えたくない事だったんだ。

西野くらい可愛かったら、正直引く手数多だ。西野がいる所には男が集まるのはこの目で見たし。知ってるし。

西野本人は　見た目だけでは嫌！　って言ったんだけど　好きな人が出来たって全然不思議じゃないだろ。……その、こ　このオレでも、今まで考えもしなかったオレでも、こんなんになっちゃったんだし。

「(……どうするのが正解、なのかな。この数学の問題なんか目じゃないくらい難しい……。ん？　東城??)」

ふと、東城と目があった。

西野が東城と勉強するって話を思い返した時、反射的に東城の方を見たんだ。それで目があって、何だか慌ててる。
「（ん？　どーしたんだ）「コラァ！　オレを無視するたぁー良い度胸だな！　神谷ぁ！」っっ!!!」
考え事、一気に全部ぶっ飛んだ。
耳元で怒鳴なれたら誰だってそうなるって思う。

その後の展開は、容易に想像つくと思うから……　うん。考えるまでもないだろうな。
と言うか、考えたくないってのが実情だ。

「どうしたんだよ神谷。お前にしちゃ珍しくないか？　あんなの」
「……オレも戸惑ってんよ。これでも内申点はすげー気にしてるんだし」
「ま、オレとしては神谷のおかげで嫌いな数学の授業が短く感じたから良いけどなー」
「小宮山に好きな授業ってあるのか？　そもそも」
「あるわ!!　た、体育とか？」
「オレに訊くな。……大体返答判ってたし」
数学の先生にこっぴどく怒られたんだな。当たり前かもだけど、名前呼ばれてた（らしい）のに、ずっと無視してて外見てたんだし。
一応、名指しされて解かされた問題は　答えたんだけど授業態度に問題があるってさ。……受験を控えてる身とすれば、内申点に　―
が着くのはほんと勘弁だ。
「ほほう。抱える悩みが何となく見える様な気がしたなぁ、神谷君？」
「芝居がかった動作と口調で何しに来たんだ？　大草君」
「お、軽口反撃が出来るトコ見ると　そこまで深刻じゃないって事か」
「怒られたオレを慰めにきたってか？　……そりゃどーも。一応貯金があるみたいだから大丈夫だって」

「いやいや、そこはオレも心配なんかしてないぜ。推薦じゃなくたって神谷なら　大体どこでも行けるだろ？　それとは別な事だ」
「？」
　真中と小宮山に続いて、大草もやってきたよ。
　まぁ、この４人でつるむ事が多いから　別にー　って感じだが言った通り口調や仕草に違和感バリバリだったから。数学の授業で怒られた事を慰めにでも来たのか？　程度しか思ってなかったんだけど……。
「最近来ないよなー、西野」
「……」
　侮り難しだ。やっぱり大草だけは。
　でも、そっち方面（恋愛事？）に関しちゃ偏差値がダントツ大草だから……仕様がないかも。
　でも――――　どーしよ……。何て返せば……？

２０話

「なぁなぁ神谷。西野はどうしたんだよ。最近オレらのクラスに来てないじゃん」
「それを何でオレに訊くんだよ。それに　そもそも　そんな頻繁には来たりしてないだろっ！」
　さっさと切り上げたい気持ちが凄い強いんだけど……上手くあしらう事が出来ないんだ。大草は　他の連中（真中や小宮山）と違って単純じゃないから。
　でも、大草はそんなオレの気持ちを見抜いていたみたいに笑ってたよ。
「……まっ　オレはしつこくは訊くつもりは無いよ。でも　あんま皆に心配かけるもんじゃないぜ？　他の皆はまだ気づいてないっぽいけど　このままじゃ時間の問題だって」
「っ……」
　どうやら、オレは　心配をかけてたらしい。
　そこまで気の抜けた顔をしていたんだろうか、と自己嫌悪になりそうだった。
「……なんか悪いな」
「いやいや。唯一の常識人である神谷が抜けるとなると、オレにとっても負担が凄い増えるんだ。頼むぜ？　相棒」
「そう言う扱いは　止めてくれって。めちゃ疲れるんだから」
　腕を回してきた大草。
　オレは苦笑いしつつ　ゆっくりと大草のその腕を払ったよ。……なんか周囲の女子の視線が少々気になったけど、やっぱり大草を見てるんだろう、と結論した。結構強引に。
　だって　オレが人気……　とか全然信じられないし。
「でもさ。オレなんかちょっとだけ安心って感じだ」
「は？　安心？」
「ほれ、神谷って中坊らしくないって先生にまで言われてただろ？

オレも妙に大人びてるよなー、ってずっと思ってたし。的確なツッコミ入れるし」
「あー、まぁ　そうだな。……てか　ツッコミ云々は　ボケ役が濃すぎるからだろうが」
「ははっ！　そりゃそうか」
　大草の言う通りだ。先生とかに何度かそう言われた。転校してきたばかりで　話す機会自体少なかったんだけど、それでも言われた。色んな荒波に子供ん時（今も子供だけど）からずっと揉まれてきたから仕方ないって、自分を客観的に見れるよ。
　ほんと……色々と大変だったからなぁ……。
「つまり、お前が人並に恋煩いをしたってのが卒業前に見れて良かったって思ってんだって」
「っっ！　こ、こいわっ!?　な、なんでそーなるんだよ!?」
「いやいや何でも何も、そもそもアレで誤魔化せてるって思ってんの？『なんか悪いな』って返事返した時点で認めてるだろ」
「う……」
　違いない。……全くその通りだ。いかん　最近のオレ隙だらけって感じだよ。
「っとと、しつこく聞くつもりないっつったしな。この辺にしとくけど　あんま無理はすんなよ？　……西野もお前が来るの、待っててくれてるかもだぜ」
「……」
「（うーむ、……オレも結構西野の事気になってたから、話してみようかな　と思ったけど……　神谷（コイツ）が先に手だしたんだったら　ま、手を引いた方が吉かな。神谷だし）」
　大草は　女子に関しては外れた事は言わない。相手が西野だったとしても……そこまで変わらない的中率だと思う。
　いや、オレがそう思いたいだけかもしれないな。
「ほれ、もう下校の時間だぜ。あの２人は補修受けてるみたいだし、今日は久しぶりにオレらだけで帰るか？」
「……そうだな」

大草と2人だけってのは　最近じゃ珍しい。いつも真中と小宮山の2人がいて、4人で帰る事が多かったから。ああ、大草が女子に呼ばれていないってパターンはあったか。

と言う訳で、真中と小宮山の2人は置いといて　帰る事にした。

『オレ達を見捨てるのかぁぁ！』

と、小宮山が騒いでたけど、『この時期に　んな点とるヤツが悪い』とドストレートに言ったら何にも返してこなくなった。いや、言葉が槍になって　小宮山を貫いちゃったからだと思う。言霊って具現化する事が出来るんだな……　とバカな事を考えつつ、オレと大草は教室を出たよ。真中は　まぁ　小宮山のお守兼勉強だろう。　僅差だけど　小宮山より真中の方が学力は上だから。……団栗の背比べだけど。

「そう言えば、真中は東城と勉強って言ってたと思うんだけど、まだやってないのかな？」

「あー、そう言う話　確かに真中もしてた様な気がするな……。東城日直の仕事がちょこちょこ入ってたし、今日はしなかっただけなんじゃないか？」

「あ、そう言えばそうだった。……皆の前で盛大にこけたの思い出したよ」

東城は、本当によく転ぶ。何にもない所でも　くきっ！　と足を踏み外したりして転んでしまうから、教室の様な机や椅子のジャングルだったら、高確率でこけても不思議じゃない。……でも　今までそんな気配は無かったんだけどな。そんな頻繁に転ぶ女子がいたら、目立つし　名前と容姿だって　幾ら真中でも覚えれると思う。……東城は　真中と知り合ってから　転ぶ事が多くなったとかか？

「おっ？」

「……いてっ！」

オレも人の事言えないかもしれない。前を見てなかったから、オレの前を行く大草にぶつかったから。

「っと、危ないな。何で急に立ち止まってんだよ」
「ふふ。良いタイミングかもしれないぜ？　神谷」
「は？」
「ほーれ！」
　大草は、オレの腕を掴んで強引に前に行かせた。……それで　目の前に見えてきたのは２人。　黒髪をポニテで纏めた　やや長身の女子。名前は　知らない。それと……　もう１人は明るい金髪のショートの。

「あ……」
「っ……」

　西野、だったんだ。
「（互いに目と目が合って３秒。……赤くなって目をそらせたら　惚れてる。これ間違いない診断だけど、２人はどうだ？）」

　西野の顔、久しぶりに見た気がした。たった４日間だったのに、１週間も経ってないのに。本当に久しぶりに感じる。それと同時に、何だか顔が赤くなってきて　西野の顔　中々見れない。反射的にオレはそらせてしまったよ。
「おおーっ　噂をすればなんとやら、だね？　つーかさっ！」
「ゆ、ゆりっ!!　（ま、まだまだ心の準備出来てなかったのにー！）」
「（だいじょーぶだいじょーぶ。５秒前の自分を思い出してって。すっごく気合入れてたじゃん？　後はあたしの勘を信じなさーいっ！）」

　なんか、向こうも賑やかになってたよ。……それに、こっち側で言う大草みたいに、西野の事を強引に前に出した。
「ん？（ほほぅ　向こう側も似た様な事考えてたって訳ね。んじゃ一口乗りますかなって）良かったなぁ、神谷。さっき考えてた事が、こ

んなに早く叶うなんてなぁー　って、いでぇっ!!」
「……アホ。んな事言ってねぇ。考えてたって、なんで判んだよ」
オレは　にこやかに晴れやかに笑う大草の足の爪先をストンプ。
慌ててたって事もあって結構強めに入っちゃったけど……良いだろ。

「……」
「……」

その後は自然と西野と対面したよ。させられた、って言うのが正しいかも。
でも　やっぱり、動悸が止まらない。頬も赤くなってるって思う。
だから夕方だって本当に良かったと思ってるよ。夕日が窓から差し込んでて、結構辺りを染めてるから。夕日の色に。
でも　ちょっとだけ会ってなかっただけなのに……　こう、なるんだな。

「おっす……、れ、れ……　神谷、くん」
「ああ。……」

物凄くぎこちない。うん。滅茶苦茶違和感ありまくりだ。平静を装うとしても　霧散してしまうよ。……どうすりゃいいんだろう。ほんと。
いつもどうしてたっけ……？

「さーてと！　おお、大草くんじゃん！　今日も相変わらず格好良いねー？」
「ん？　ああ、確かキミは椎名さん」
「へー、あたしの事知ってたんだ？」
「そりゃね。前に話した事　あるじゃん？」
「ありゃりゃ、そうだったっけ？」

横で2人が話してるんだけど……　ほんと頭に入ってこない。
西野に全神経が集中しちゃってるから。
「あー、つかさ？　こんなチャンスあんまりないから、ちょっとあたし大草くんと話してくるねー？」
「……ええっ!?」
「おー、神谷。オレもちょっと椎名さんとは話があるんだったんだよ。ほれ、確か椎名さんって生徒会の書記やっててさ。サッカー部の事もちょっと聞いとかないと～だったんだ」
「……はぁ!?」

驚いた。
ほんと、2人は示し合わせたかの様に、あらかじめ　打ち合わせでもしてたん？　って聞きたくなる程自然に、離れていっちゃったんだから。
『ちょっとまてー!』って言う暇もなくさ。西野も同じ気持ちだった様で、口をぱくぱくさせてた。

ほんと、あっという間の出来事。……ぽつんっ、と2人きりになっちゃった。放課後だし周りに生徒がいなかったのがせめてもの救い……かなぁ。
それで　その後少しだけ変な間があったんだけど、最初に話したのは西野からだったよ。
「……え、えと。ねぇ　蓮？」
「……おう」
「ちょっと、歩かない？」
「……ん、わかった」
西野に連れられて、一緒に歩いた。肩を並べて、ね。行き先は　大体だけど想像がついたよ。

階段を上がって、上がって……一番上まで。そこにある扉を開くと
夕日が身体を照らしてくれた。

ここが西野と初めて出会った場所だったから　感付けたかもしれない、かな。
「……西野、ちょっとだけ待ってて」
「え？　どしたの？」
オレは、ちょっとした階段の踊り場にある机やら椅子やらを屋上に引っ張り出した。
西野は、何してるのか判らないからか、頭に幾つもの《？》を浮かべてる感じだったけど、今は説明はせずに　ある程度引っ張り出した後は、屋上の扉の前に積み上げる。大分完了した所で、西野は声をかけてきたよ。
「なにしてんの？　蓮」
「……覗き見とかしてきそうな気配がするから。その予防策を、と」
「……ぁ、な、なるほど」
西野にも心当たりがあるのか、うんうん　と頷いてた。
でも……　冷静に　よくよく考えたら　２人きりの空間。その出口を塞いで……って　状況も不味いんじゃ……　って思ったケドその辺りは西野は気にした様子は　多分ない。きっと信頼してくれてるんだろうし、オレはそんな馬鹿な真似は絶対しないし。
兎も角ちょっと疲れたけど完了だ。これだけつんでれば、開けれない……事はないと思うけど、開けようとすれば音は出るし、ちょっとだけ開けて～　って事も出来ないと思うから。
「へへっ　てーーっきり　出口塞いで　あたしの事、襲っちゃおう！

とか考えてるのかと思っちゃったよ」
西野は、もうすっかり元の調子に戻る事が出来た様だったよ。うん、そりゃ良い事だ。何だか、様子がおかしかった気がするからさ。
「はぁ……　んな事するわけないだろうが。この大変な時期に」
「へー、大変な時期じゃなかったら、シちゃうんだ？」
「揚げ足取らないでくれって……。それに、ちょっぴり　はしたないって思うぞ？」
「うっ……、そ、そんなことないもーんっ！　蓮がそんな感じにするんが悪いんだから！」
「あー……　はいはい。そーだな」
「もうっ　はい　は1回、だゾ！」
「はーい」
「伸ばさないー！」
「ＯＫ」
「って、なんで今度は英語になるんだよっ！」
「「……あはははは！」」

面白いくらい会話が弾む弾む。
あ、ちょっと思い出したよ。『女の子が、そんな　はしたない事言うもんじゃありません』って、確かオレの母が最初の方には姉に言っていたんだった。それを思い出したら、何だか笑えてくる。西野と話してる楽しさに相余ってさ。あの時は全然通じなかったし、多分西野に言っても通じないだろう、って思うからなぁ。

「ふぅ……」
「ね、蓮。ここはまだゴールじゃないよ？　ほら、上！」
西野は　上をさした。そう、給水塔が立ってる本当に一番高い場所。……本当に初めて出会った場所だ。
「ここでも良くないか？」

「駄目。折角来たんだもん。……うえ、いこ？」
ここで上目遣いするの……か。
それを断れる……か？　男が。
と言う訳で、選択肢　ＹＥＳ／ＯＮの内の１つを一瞬で消し去って、颯爽と返事する事にしたよ。
「はいはい。西野サンのおおせのままにー」
「うむうむ。くるしゅうないゾ？」
にこっ　と笑ってオレから先に上がったよ。
だって西野から上がったら……　まぁほら　ちょっとしたトラブルが起きるから　それを見越しての行動だ。
西野もそれには気付いてる様で　ただただ笑っていた。

「ふー、やっぱここだねー」
「下も上もそんな変わらんだろうに……」
「いいの！　ここが一番いいの！」
「はい。了解であります」
西野はちょっと膨れながらそう言ってる。その顔も良いんだけど、やっぱりオレは笑ってる顔の方が良いからすぐに認めた。認めたら、西野は本当に直ぐ笑うから。……笑ってくれるから、さ。
「……ねぇ、蓮。ちょっと聞いても良い、かな？」
でも、西野の笑顔は直ぐになくなったよ。……何だか真剣な顔になってた。
「うん？　良いよ。答えれる範囲内でなら、だけど」
何を訊かれるのか……　この時は想像できなかったんだ。
でも、訊かれた内容。……それを訊いて　オレは正直震えてしまったよ。
ほら、西野に歌を聴かせて、って言われたあの時みたいに……。
「その……前に、蓮が　女の子と一緒に……歩いてたけど、だれ……

なのかな、って」

前とはいつの事？　学校での事？　歩いたのって西野の事じゃ？

色々と疑問を強引に生んだけど……、それらの疑問は一瞬で消えたよ。

だって、判ったから。西野が言ってる前っていつの事なのかと、それと　女の子って誰の事をさしてるのかも。

――見られてた……!?

でも　何だか　色々とバレるのって……西野から始まる事が多い気がするケド　気のせいじゃないよな？

21話

蓮と話すの凄く久しぶりだなーって　ほんとしみじみと感じちゃった。蓮も……同じなのかな。そうだったら嬉しいかもだね。いや　絶対嬉しいよ！

ほんとにほんと　凄く久しぶりだなって感じちゃったなぁあたし。話してる最初の方はほんとに緊張しちゃったみたいなんだ。

うーん……　これも全部全部ユリの計画通りなのかな？　って思ったりしたんだけど　流石に幾らなんでもそれは無くて、偶然　蓮や大草くんとばったり出会ったんだって思う。

でも　そこをすかさず色々と合わせたユリには　ほんっと脱帽だよ。

その後だけど　色々と皆の勢いに圧されちゃって、2人きりになったんだ。その時は心臓がどうにかなっちゃいそうだった。痛いくらい鳴っててさ……。生きてるって実感出来てる？　っていうのかな、こういうのってさ。

後、確かに色々と決心はしたんだよ？　でもさ　決心したと言っても、いきなり！　途端に!!　蓮とばったり会うなんて一体誰が想像できるって言うんだよー！　無茶じゃんっ！　ぜーーったい!!

あー　勿論　色々と愚痴っぽく言っちゃってるけどさ、とても感謝はしてるんだ。　すっごく感謝してる。ユリにはさ。後　乗ってくれた大草くんにも勿論ね。

最初こそは　凄く緊張したけど　やっぱり蓮と話すのはとても楽しいから。たった数日程度でぽっかりと空いちゃったあたしの胸の中。……あたしがすっごく満たされてるのが判るから。

だから　やっぱり　あたしは――蓮の事が好きなんだって思った。

だからこそ訊いておかなきゃいけないって思ったんだ。

初めて蓮と出会ったこの屋上で……あの時のことを。

蓮と一緒にいた人のこと。

「その……前に、蓮が　女の子と一緒に……歩いてたけど、だれ……

なのかな、って」
正直に言ったら本当は訊く事が怖かったんだ。
だって　あの後ろ姿をみたら、誰だって想像しちゃうもん。……連想しちゃうから。夕日の中を２人で、腕を組んで、……そんなの見たら誰だってさ。恋人同士なんじゃないのかな、って。好き嫌いに歳なんか関係ないもん。だって、あたしも好きになっちゃったんだからさ。
それで訊いてみたら、……蓮　何だか固まっちゃったよ。
でも　その蓮の気持ちは判るかも。だって　蓮は恥ずかしがり屋だって事知ってるし。知られたくないって思ってるんだって判るし。……でも、訊かずにはいられなかったんだ。蓮の口からはっきりと言ってほしい。……そうじゃないと　あたしは進めないから。
蓮が何かを言おうとするまでの間、凄く長く感じたよ。何度か口をパクパクさせててね。違う内容の話だったら　餌欲しがってる金魚みたいだよー。って笑ってたかもだね。今は全く笑えないけど。ほんの数秒の時間の筈なのに、信じられないくらい凄く長く感じるから……。
「え、えと……　東城の事……か？」
「え？」
蓮の口から出てきたのは、東城さんの名前だったよ。
これは今のあたしでも判る。……蓮、何か誤魔化そうとしてる？気付いてないふりもしてる？　東城さんの話題だったら、ノンストップで回答。１００点満点の回答をしてくる癖に！　しかもため息とかセットでさ！
「だから……東城の事、かなぁーって思って。……だ、だって　ほら！
西野、前にも東城と話してる所見てて色々あったじゃん？」
「……」
「だ、だから　今回もそれかなぁ……って。ほ、ほら　最近じゃ女子と話すのはマジで西野か東城だけだｓ「ちっがーうっ!!」っっ」
思わずあたしは　蓮の顔、両手で挟み込んじゃった。うん。凄く近い。蓮の顔が直ぐ前にある。それに顔が赤く、熱くなっていってるの

が自分でも判る。
「蓮……絶対判っていってるだろっ!?　判ってて恍けてるんだろー!?」
「……」
「それに　東城さんならあたしだって判るよ！　結構離れてたけど、それ位判るからっ！　……それに、学校じゃないっ！　あの日、あたしと一緒に帰ったあの日！　その……路上で……、蓮、うで、くんでた……もん」
「あ……う……」
ここまで言ったらほんと後退のネジなんてないもんね！
蓮は前に、顔が近いっ！　って慌ててた時があったけど　もうそんなの知らないもん！　全部、ぜーんぶはっきりするまで、走り切るから！
「おしえて」
蓮の口からはっきり聴きたかった。歌の時とはまた全然意味が違うのがちょっと嫌だケド。
「あー……うー……んんん……」
蓮、何度も何度も……うん。唸ってるってヤツだね。唸って唸って、今度は考え込んでた。
何だか、こういうのって『二股かけてたんだろっ！』って問い詰めて、問い詰められた蓮はあたしに『どー言えば良いかなぁ、どー言い繕えば良いかなぁー』って色々考えてるって思っちゃうよ。
べ、別に……付き合ってる訳じゃ、ないんだけど。あくまで　その……　そう見えるってだけだし！
「はぁぁぁぁぁぁ……」
蓮はあたしの気も知らないで、今度はすっごい長いため息吐いてた。ちょっとムカってきたケド、何とか黙っていられたよ。顔には出ちゃったと思うけど。
「あのな……西野。ちゃんと話すよ。だけどここだけの話にしてほし

いんだ。それが条件。……それで良いか？」
「……うん？」
「だから、そのー……」
あ、つまりは皆には内緒にしてって事かな。
蓮は恥ずかしがり屋だから。……でも、って事は　やっぱり付き合って、コイビトだったりするのかな……？
「うん判った。……誰にも言わない、から。教えて。……お願い」
今度、胸の中に湧き出てきたのは聴くのが怖いって想い。蓮に会いに行けてなかった頃の気持ちだった。
でも、それでも、あたしは押し殺す事ができたよ。今のままは、絶対嫌だから。

「……あのな。あの時のは……」

まさか　あの時　西野に見られたとは思ってなかった。
呼び出しくらって直ぐ傍だったからちょっとは周囲を気にかけてたのに。そもそも西野は反対方向に帰って行ってたし。……なんで見られたんだろうなぁ。
オレが悪いのか、アホ姉が悪いのか……　いやいや間違いなく、絶対ッ断然ッッ！　後者。
でも、油断してたオレも悪いことは悪い。姉は冗談抜きで超がつく程の有名人だ。……色々と気を付ける事。昔から判ってたんだけど
新しい街に来た事で、大分緩んだみたいだったよ。それに　今まで見られなかったのって結構奇跡的なのかもしれないしな。

それは兎も角　西野にちゃんと説明したよ。

あの時一緒に歩いてたのは　姉。色々と頼まれごとがあったから付き合ってたって。……それで、姉は異常に過干渉だと言うか、色んな意味でぶっ飛んでるって　それとなく伝えた。最初こそは西野、固まってたけど　だんだん驚いた表情になってた。

あ、そうだ。それ以上に気になる事が出来たんだった。

「ここ、どこだ？」
「え？　何言ってんの蓮。入り口にでっかく書いてたじゃん『カラオケｓｅａ』って！　カ・ラ・オ・ケだよ！」
「……」
なんか判らんが、今オレと西野はカラオケ店に来てるらしい。屋上での一件後に　そのまま直行したらしい。あまりの強引さと言うか急展開と言うか、今までの流れが完全に頭ん中から抜け落ちたよ。

「てか、一緒にいた友達は良いのかよ。ここまで来て今更だけど」
「ユリ？　うん。メールも送ったし、大丈夫だよ（……が、頑張れって言われたのがなんか恥ずかしかったけど……）」
オレ、もう一度ため息吐こうとしたら　西野に止められた。
「もーーっ　『今日は騒ぐぞーーー！　ストレス発散だーっ！』　ってあたしが言ってノってくれたのは蓮だろっ！　なのになんでため息ばっかりするんだよーっ!!」
「ふがっ、ふががっ!!　えふんっ!!　ふぁ、ふぁるふぁったって！」
結構西野の力強い……。それに苦しい。苦しそうなのを察してくれたからか、西野手を離してくれた。でも、確かにため息ばかりつくのは　西野に失礼だよな。……でも、冷静に考えてみてくれよ？　２人きりで……カラオケ、ナンダヨ？　個室で照明かなり薄暗くて、２人きり……ナンダヨ？
「今日は蓮と一緒に歌います！　歌えるように願います！　それが叶うまで帰しませんっ！」
「……いやいやいや、ここまで来といて逃げないって。店ん中入ってんだし」
「えー　わっかんないよー！　だって蓮逃げ足凄いし。屋上から飛び降りたと思ったらいつの間にか消えちゃってるしさ！」
「だから逃げませんって。西野サンのおおせのままにー、だって」
「うむうむ。余は　でゅえっとをご所望じゃぞ？　蓮くん」
「……はいはい」
オレはすっごくドキドキしててヤバイのに　西野はなんか凄いハイテンションになってるみたいで凄く楽しそうだ。……でもまぁ元気ないよりは断然いい。……西野は笑ってる方が良い。
「はい！　蓮。マイク持って」
「へーい　りょーかい」
「んーとね。ほら、この曲で行こうっ！」
西野が入れたのは……あの時の歌だった。あの日屋上で歌った曲だ。
「よーし！　蓮に負けないからっ！」

「ははは……　なんの勝負だよ」
カラオケには採点機能はあるけど、今は勝負する感じじゃないんだ。まぁ　その辺は勿論ツッコまなかったよ。
だって、この綺麗な笑顔をずっと見ていたかったから……。この際薄暗いこの個室だったから、ある意味良かったかもしれないな。まだ……見ていられるから。
勿論　絶対に口にはしないけど。

ガンガン歌ってすっきり笑顔なのは西野だ。

「ん～～～！　あー、気持ちよかった～！　やっぱり受験勉強で溜まったストレス発散は大声だよねー！　受かるかな、とか落ちるかもしれないな、とかぜーんぶ忘れて気持ちいいっ！」
「勉強の内容までは忘れない様にな？」
「もう蓮っ！　水差さないでよー！　折角気持ちよかったのにー！」
「ぐええっ！」
『つかさパーンチッ!!』と、何だか真中みたいな掛け声とともに、西野からパンチを頂きました。これって所謂リバーブローと言うのだろうか、肝臓辺りに　ぐぽっ！　って入って　それなりに……というか　メチャ痛いし苦しい。身長差もあるから丁度入りやすかったのかな？
「おーい、蓮！　そろそろあたし　門限もあるから帰ろうよー」
悶絶してるオレを差し置いて　笑顔で先に行く西野。
とりあえず　ＮＩＣＥ笑顔って言ってやりたいかも。からかいながら。
「……ふぅ」
……でも、今はちょっと待っててくれ。リカバリーまだだから。
さて、帰る前に喉乾いたかな。
「けふんっ……」

西野は　ちょっと歌い過ぎたのか、咳き込んでいたよ。
「西野」
「こほっ……、んー？　どうしたの」
「ほら、そこ。向こうにコンビニがあるだろ？　ちょっと寄ってきていいか？　……ジュース、奢ってやるよ。なんか知らんけど、オレが結構振り回した（らしい）し。詫びだ」
　カラオケで散々西野に説教のようなものをされたんだよな。　事ある毎に『蓮が悪いーーっ』って。結構というか普通に理不尽だったけど　まぁ　良いって訳だ。
「ほんとっ!?　わー　嬉しいな。ありがとー　蓮」
「ん。ひとっ走り行ってくる」
「え？　あたしも行くよ??」
「いや、もう時間も遅いし。門限あるんだろ？　ささっと行ってくるから待っててくれ」
　西野の言葉を待たずに、オレは走り出した。
『ありがとー　蓮！』
　それだけで充分。　こちらこそ　ありがとうだ。
　だって嬉しかったから。西野と一緒にいられた事もあるけど、何よりもカラオケ。……久しぶりだったから。本当に久しぶりで、心の底から楽しいって思えたから。
　これくらいで良いなら、幾らでもだ。
　まぁ……パシリになるのは嫌だけど

22話

走っていく蓮の後ろ姿を目に焼き付けてる。……うん。こう言う時って追っかけた方がやっぱり良いよね？　今逃げちゃう……何てことは流石に今更だし、絶対ないって思うけど、やっぱり……せっかく一緒にいられてる時間。あとちょっとだけしかないから　離れちゃうのは勿体ないもん。

それにしても、今日はほんと色々とあったなぁ。

あたしは　蓮の事ずっと気になってて、大変だった。

うん。勿論　蓮と一緒に腕を組んで歩いている女の人の事だよ。

あの日の夕方……。

夕日の中に2人の男女が入っていく光景。

今思い出しても　凄くロマンチックに見えるし、ユリが言ってた展開にも似通ってたって思うから（ま、流石にオーロラは無いけどね）。

それで色々あって　今日初めて蓮の口からきく事が出来たんだ。

最初は蓮、すっごく顔強張ってたり　固まってたり　慌ててたりと世話しなかったなぁ。でも　やっぱり誰かに知られるのが嫌だったんだとあたしは思ってた。蓮は騒がれたりしたりするのが苦手、つまり恥ずかしがり屋だからね。

それで蓮が言ってた真相……なんだけど。

『あ、あの……あのな？　西野。……あ、あれは……、……ね、なんだ』

口籠ってて、更に声がいつもの3倍。歌を歌ってる時の5倍は小さな声だったから、とーぜんあたしには聞きとれなかったよ。最初。

『え？　なに……？』

凄く聞きたいって気持ちもあった半面、怖い気持ちだってあったりしてたケド　あたしは、蓮にもう一歩近づいて聞こうとした。蓮は口をもごもごさせてて……、それで何度か呟いた後、はっきりと言った

んだ。
『だから　あの時のは、　あ、姉なんだよ!!　つまり、ねーちゃん！
姉貴!!　2個年上の姉!!!』
　周囲に滅茶苦茶響いてるんじゃ？　って思えるほどの大絶叫だったよ……。
　姉もねーちゃんも姉貴も同じ意味なんだけど……それは兎も角、今度はあたしが固まっちゃってた。
　数秒固まった後。
『……あ、あね？』
　一度聞き返しちゃった。
『う……むむむ、　そーだ！　そーだよ姉だ!!　ってか、ウソだったとしても、そんな嘘言いたくなんかねぇよーー!!』
　蓮の絶叫は止まんなかった。
　だから、あたしは思わず蓮の背中摩ってた。すっごく興奮してたから。
　それでね。ちょっとずつ落ち着けたみたいで、話してくれたよ。
『あの時……　その、メールがあって姉に買い物付き合ってって頼まれたんだ。買い物手伝ってって。……姉は色々と難がある性格というか、アブノーマルと言うか……　色々とあるんだけど、世話にはなってるし、借りを作ったままって言うのはオレも嫌だし。基本、頼まれた事は断らない様にしてるんだよ。……それ以上に貸してる気がすんだけど、まぁ……』
　蓮は思いっきり頭を掻き続けた。
　うん。……嘘言ってる様には見えないんだ。ぜんっぜん。
　それよりも、あたしは驚いてた……。
　え？　驚いたのは蓮の事じゃないヨ？
　その……ね。ズバリ、的中したんだ。
　あたしの友達のユリが言ってた事が……。もうっ、ユリは超能力者だよ！　ここまで来たらさ！

あの日、あたしがへこんでた時にユリ、言ってたんだ。

『良い？　つかさ。私が思うにね……。その一緒に歩いてたって人。神谷君のおねーちゃんじゃないのかな??』

なんか、ユリ思いっきりあたしの手を握って断言してたんだ。

とーぜん、あたしの顔は『はぁっ!?』なってたと思うよ。自分でも。だって　ほんと突拍子もない事だったし、説得力って言うものもないと思ったもん。

それがユリにも伝わったんだよ。きっと。

『つかさっ！　世の姉はね……　本心では弟の事が好きで好きでたまらないモノなのよーーっ！　みーーんな、理性とか世間体っつー偽善な壁を作っちゃってて、自分を誤魔化してるだけなのよーーっっ!!みんなみんな大好きなのっっ!!』

どんっ！　と胸を叩いてそう言われても……ね？　確かにユリは弟のサト君ＬＯＶＥなのはずーーっと知ってたけど、世間一般の皆さんも同じ～と言うのは聊か強引過ぎやしないかい??

そりゃ、弟の事、家族が大好きって言う人も当然沢山いるって思うけど……　ユリのって、親愛じゃなくって愛情、……ＬＯＶＥって事だもん。ＬＩＫＥじゃなくって……。

『だからきっと神谷くんのお姉ちゃんだったんだよ！　間違いないよ？　キタコレ！　だよ!!』

ほんとに……、ほんとに……。
『当たっちゃった……？』
『……うぅ。んん？　何が、だ……？』
『い、いやっ！　ナンデモナイヨ？　蓮っ！　うん。……そ、っか。……そっか!!』
あたしは、驚いていたんだけど、直ぐにそれを覆いつくす程、ぜーーんぶ消えてしまう程嬉しかった。とても、嬉しかったし、安心もした。
『蓮のお姉さんは、蓮の事が好きなんだねー？　蓮もそうなの??』
『誰があんなアホを……っ。……当然　家族としてはある。……家族としては、だ!!　あんなのと一緒にされたら困る!!』
『あはははっ！　仲が良い事は良い事だよっ！　うんうん。でもアホは酷いと思うよー？』
『西野は知らんだけだ！　姉貴は限度が超えてるんだよ!?　それにさっきも過剰すぎるっっったろっっ!!　無茶苦茶なんだっ!!　だから、あんまり答えたくなかった!!　……なのに。……うぅ、言いたく、無かった。血反吐……吐きそうだ……』
『あはははっ。って血反吐!?　そ、そこまでっ!?』
蹲りそうな蓮を思わず支えちゃったよ。
すっごいストレスだったって事……かな？　でも、コレ　ユリが聞いてたら……。　それどころかサト君本人から言われちゃったら……。
うん。怖いから考えるの止めよう。ってか、それよりも。
『はぁーーーー……』
凄く、凄く安心出来たせいか、気が抜けちゃったんだ。
それで　この後はカラオケに行ったんだ。
とても、とても楽しかったよ。

それで今。
蓮はコンビニに入っていった。本当は　あたしも一緒に行くつもりだったんだけど、先に行っちゃったんだ。　ただ、待ってるだけだったらアレだから、あたしも向かったよ。
「……はぁ、会えなかった時間って凄く苦痛に感じてたのに、今はへっちゃらだ。あはは。不思議……でもないかな。それに　あたしの為に……だもんね」
ちょっとはしゃぎ過ぎちゃったんだ。そのせいで　喉痛めちゃって、ちょっと咳き込んだ所を、蓮が見ていてくれた。
「(……嬉しかったなぁ。あはは。奢ってくれることじゃなくて、……あたしの事　ちゃんと見ててくれてるんだ、って思って)」
だからこそ、もっともっと蓮と一緒にいたいから、ちょっと歩くスピードアップ！
もうちょっとで、コンビニ。……うーん、出てきたところで思いっきり抱き着いてみようかな??
「ふふっ、流石にそれはちょっと早い……かな?」

「おっ、可愛い子ちゃんはっけーんっ！」
「え……?」
突然、だったよ。
突然……目の前に男の人が2人、ほんとに突然出てきたんだ……。

「２点で２２０円になりまーす。ポイントカードはお持ちですか？」
「いえ、ポイントカードはありません。あ、袋は大丈夫です」
「はい。ありがとうございました。またのご来店をお待ちしております」
ここのコンビニは初めて利用するんだけど……ここの女性店員は凄く丁寧な対応だった。
多分高校生のバイトかな？　って思う。
……なんでこんな事考えてんのか？　って疑問はきっと前に利用したトコの接客対応が結構雑だったからだと思うな。前のトコは『ませー』『ありっしたー』しか言ってなかったし。
「ま、別にオレはあれ位でも全然ＯＫだけど」
最低限の接客ってのはあると思うけど、オレは別に気になんないんだよな。もっと濃い人とあった事だってあるから。
それは兎も角……。
「うーん。買う前に西野に何が欲しいかくらいは訊いてた方が良かったかな？　コーラとオレンジジュースでも良いかな。……嫌いだったらもう一回買えば良いか」
西野がそう言う風に言うとは思わないけど……　リクエスト聞かずに飛び出したオレに非があるし、余ったら家に持って帰ったら良いだけだし。
「さてと。早く戻らないと……ん？」
ふと外を見た時だったよ。
西野がいた。それは不思議じゃない。それ以外に誰かがいたんだ。
「……」

それに雰囲気が明らかに悪かった。
だから、オレは足早にコンビニを出たよ。

「ちょっと何よ、あんた達……！」
「お、キミって噂の美少女、西野つかさちゃんだろ？　中坊とは思えねぇくらい可愛いねぇー♪　触っちゃったっ　手、やわらかーいっ！」
「おー！　いーなーいーなー！　オレもさわっとこっと♡」
「あの！　用が済んだなら、離してくれる!?」
「駄目だ―め！　離さないよ～～ん。こーーんな幸運逃したら、罪ってもんでしょ？」
「噂は訊いてたしね～。すっげー可愛い子がいるってさ？　それにもう中学生はお家に帰らなきゃな時間だろ～？　ちゃんと保護してあげないとなぁ～」
凄く、凄く不快だった。
こんなに触られるのって不快だったんだって　思った。
学校の男子たちなら、『離して』って言ったら　ちゃんと聞いてくれるのに、この人たちは全然聞いてくれない。
凄く……凄く、怖い。……怖い。
「（こわい、怖いよ……　助けて、……助けて……っ　れ、れん……）」

目の前が真っ暗になっていってる。
逃げなきゃ、いけないって判ってるのに……　掴んでる力が凄く強くて、振り払う事が出来ないよ……。
あ、あたし……　ど、どうなっちゃう……の？
「れ、れん……」
「んー？　なんだって？　これからデートしてくれるって？」
「おっ、マジで??　嬉しいな～！　この辺ってあんま詳しくないしー。案内してよー」
「れん……、れん……っ」
あたしは、ただただ　名前を呼ぶ以外できなかった。
助けて、って、ずっと思ってて。　その、時だったよ。
「れん？　何それ？」
「……オレの事だよ」
「あ？」
後ろに、いたんだ……。
蓮が、来てくれたんだ……。
「その子と付き合ってんの。オレなんだけど……。勝手に連れて言ったら困るな」
「はぁ？　誰お前」
「つーかダメだろ。つかさちゃんは　今はオレらと付き合ってんの～！　何？　彼氏？　なら　ちょっと彼女貸してよー。大事に扱うからよー」
「はぁ……　ってか、中学生狙って恥ずかしくないのか？　アンタら。……同学に相手にされないからって」
「あぁ!!」
だ、駄目だよ……。あ、相手は2人、いるんだよ？　あ、危ないよっ！
「何お前。舐めてんの？　クソガキ」
「つかさちゃんの前にお前と遊んでやろうか？」
「……はぁ　受験前に問題起こしたくないんだけど」
「なんだお前。ビビっちゃった？」

「はっははー！　今更詫び入れたって許さねぇぞ。オレらにケンカ売ってきてんだからよ！　彼女の前でぼっこぼこにしてやんよ！」
　や、やめて……！
「やめて……っ!!」
　なんとか、声に出せたのに。ようやく、出せたのに　もう遅かった。あの男達が　あたしの手を離して、行ってしまったから。心臓が締め付けられるような感じだった。とても苦しかった。
　でも、もっと　驚いたのは　その直ぐ後だったんだ。
「ぷわあっっ!!」
　男の顔に、何かが、水か何かが掛かって、仰け反ってたから。
「ったく……、折角買ったコーラだってのに」
「てめっっ！　何しやがる!!」
「ん」
　蓮の方に、もう1人の男が飛びかかった……のに、飛びかかった方の男がひっくり返っちゃった。
「ぐええっ！」
「ぎゃああ!!」
　丁度……顔に何かが、コーラ……かな。それが掛かった男を巻き込んで。
　それで直ぐに蓮があたしの方に駆けつけてくれた。
「ほら。今の内。走れるか？」
「え、あ、……あ、あたし……っ」
　頭ではわかっててても　行動する事が出来なかった。そんなあたしの事、判ってくれたのか。
「ちょっとゴメン」
「え……　きゃぁっ！」
　蓮があたしの事　抱えたんだ。
「ちょっと揺れるけど、我慢してくれ。ちょっといったら　この先に交番あるし。あ、店員さん。１１０番も宜しく。何かあったら　証言してくれると助かります」
「え、えと。は、はい！　判りました!!」

気付かなかったけど、コンビニの店員さんが　外に来てくれてた。遠巻き、だったけど。女の人だったから　それも仕様がない、よね。だって　あの男達があの女の人を狙う事だってあるかもしれないんだし。

でも、その心配はなかったよ。

「け、けいさつはまずい!!　いってぇ……っ　こ、こしうった……」

「に、逃げるぞ!!　うげっ、ま、前が見えねぇ……!」

さっきの男達、へっぴり腰でよたよたと逃げていったから……。

23話

人通りがそれなりに多い場所について、とりあえず一安心だろう。
さっきの連中も逃げていったみたいだし。
「大丈夫か？　西野。無事でよかった」
「……」
西野の事、何とか助ける事は出来たけど　あれから西野はずっと黙ってしまっている。
当然だと思う。……あんな目にあったんだから。
そんな西野を見てたらやっぱり罪悪感が凄く出てきた。だって切っ掛けが　オレがコンビニに寄ったからだから。
「その……　ごめんな。オレが寄り道しないで　真っ直ぐ帰っていれば……」
オレは西野に謝ったよ。ちゃんともう一度謝ろうと下ろそうとした時だったよ。
「れん……、れん……っ」
離したくないって言わんばかりに西野が、オレの首に手を回してぎゅっと引っ付いてきた。
……い、幾ら非常時だったとしても、罪悪感がメッチャあったとしても、これは……い、色んな意味でヤバかった。段々思い出した、と言うか実感してきた。
オレ　西野を……抱いてるんだって。へ、変な意味じゃないぞ??
でも、オレだってれっきとした男なんだから仕方ないって！
「あの、に、にしの？　そろそろ……降りない、か？」
「れん……れん……　こ、こわかった。こわかったよ……　あ、ありがと……ありがとう」
ずっとずっと抱き着いてきてる。

抱き抱えた時は　あまり意識しなかったんだけど、今　西野を全身で感じる……。西野の体温や耳元で囁くように言ってるから吐息もはっきりわかる。
つまりすげぇ恥ずかしい！　……それ以上どう表現していいか、わからなくて……　と、と言うか何か考え続けてないといけなかったんだ。
「（だ、だって　理性……跳ぶ、かも……だし。やっぱり凄く柔らかい……）」
やっぱり、と言うか、……まぁ　オレは姉に何度も抱き着かれたりしてるから、それなりに女の子の柔らかさと言うか、感触と言うかその辺の事は大体判ってたつもりだったんだ。
でも、西野は今までのとは違った。……やっぱり、初めて好きになった女の子だから、だと思う。
でも……。

ひそひそ……。

――やぁねぇ……、最近の子供は。
――節操ってものが最近のコってないのよねー。
――こんなとこでイチャイチャしなくても……。
――　見せつけやがって……！

だんだん周囲の目がきつくなってきたよ。痛いくらい視線が集まってくる。
何か　鋭い視線と言うか殺気と言うか、嫉妬染みたものも感じるけど、今はそれどころじゃない。早く逃げたいからここから。
「っ……　西野、走るからな！」
「れん……れん……っ」
オレは　正直少しばかり疲れていた。あの連中を上手く撃退でき

たのは良かったけど、やっぱり、身体は疲れてたみたいだし、西野を抱えてきたから、って言う理由もあるかな。
でも火事場のバカ力が出たみたいでしっかり走れた。
あ、一応言っておくけど　西野が重いから……とかそう言うのは無いから。と言うか、そんなの考えられないから。ただただ……柔らかかった、とだけしか……。
後　何処に行くかとかは考えてなかった。第一この場に居続けるのも無理だし、それに今の状態の西野を下ろすのも無理だ。走ってる間も西野はオレにずっと強くしがみついてたから。……その、恥ずかしいけど　西野は今オレを求めてくれてる。怖かったって事だって理解できる。……それなのに、それを無碍にするなんてできないから。

それで　何とか人が少ない場所、日も落ちかけてる黄昏時って言う時間帯の公園についた。近所の子供達が沢山遊びまわってる場所だけど、流石に今は誰もいなかったよ。
でも　もしもって事だってあるし、さっきみたいなになったら嫌だから、遊具のひとつのドームの中にとりあえず避難したよ。西野もさっきと比べたら大分落ち着いたみたいだし、一安心だ。
西野を抱き抱えるのは　今考えても凄く恥ずかしい。……でも、名残惜しかったりもする。下心はない、とは言わないが　それを掻き消すくらい西野の身体　とても柔らかくて、何だか心地よかったから。
「西野。大丈夫か？　落ち着いた？」
オレは　座って前をじっと見つめていた西野に話しかけた。
その言葉に反応したみたいで、西野はゆっくりとオレの方を見た。
「……蓮」
「ん？　どうした？」
「……さっき、『ごめんね』って言ったよね？」
「ん……あぁ。だって　あのコンビニ。オレが寄ろうって言ったから。それのせいだ。ああ言うのがいるなんて思わなかったけど、切っ

掛けは　オレ……だから」
　そう言ったオレが　今度は西野みたいに顔を俯かせたよ。言葉にすると　より実感してしまうんだ。
　もしも……　相手が大人で、車でも乗ってきていて　西野をそのまま連れ込んでしまったら？
　考えるだけで怖かったよ。……本当に。
　オレでさえ　それだけ怖かったのに　西野本人は比べ物にならないくらい怖かったと思う。
　そんな時だった。風が吹いて、外の冷気で少しばかり肌寒かったんだけど、頬が凄く暖かくなったのは。西野の手が、オレの両頬を挟み込んだんだ。
「……あたしはさ、『ありがとう』って言ったんだよ。蓮があたしを助けてくれたから、あたしは無事だった。悪いのはさっきの男達！……だから、蓮に謝ってほしくない。何度も言うけど　悪いのは、さっきの人達だから。蓮は、何一つ悪くないから。……だから　もう一度……だけ言うね」
　西野は目を瞑って　額をオレの額に、当てた。
「ありがとう。……蓮。助けてくれて、うれしかった……。ありがとう」
「……」
　言葉が出ないって言うのは　こう言う時の事を言うんだろうな。
　さっきまで罪悪感で押し潰されそうだったんだけど、何だかいつの間にか……消えてた。消えたのを実感したと同時に、また改めて西野が本当に無事でよかったって思えた。それと同時に安心感が凄く出てきたよ。
「よかった。……無事で、良かった」
　オレは　西野に身体を預ける様に、額を付けるとそっと目を閉じた。
「それでさー、蓮？　あたしと付き合ってるって本当なのかなー??」

「うん？　何の事？」
　すっかりと調子を戻した西野。
　本当に良かったとは思うけど、何言ってるのか判らなかった。別に恍けてるとかそんなのじゃなくて、本気で。
　それを多分西野も感じ取ったみたいだ。凄く頬を膨らませてるから。
「なんだよそれっっ!!　あの時、テキトーな事言ったって言うのっ!!」
「???」
「本気で判んないって感じ!?　無意識っ!?」
「ええっと……」
「う、うう……」
　西野は　怒って頬を膨らませていたけど、今度は少しずつ顔を俯かせてた。
「蓮、言ったもん。『その子と付き合ってんの。オレなんだけど、勝手に連れて言ったら困る』って、言ったもん」
「……!!」
「言ったもん!!」
　い、言ったような　言ってない様な……。言ったっけ???『言ったもんっっ!!』わ、判った判った!!
「あ、あぁ。言った、……かも」
「なんで、『かも』なんだよっ！　あーんな恰好付けて言ってた癖にっ！」
「いや……、ほら　あの時オレも結構テンパってたから……、正直細かいトコ、覚えてないんだよ……」
「え？　テンパ？　そうなの??　自信満々に堂々としてたって感じたけど。今思い返してみればさ」
　西野が言うのも仕方ないかも。だって表情豊かじゃないって言われた事は何度かあるんだよな、オレ。
　でも　思いっきり感情を表情に出すのは、……やっぱり　身近の連中だけだから。
「それに、蓮ってすっごく強いんだね？　相手高校生っぽかったじゃ

ん。ひょっとしたらもっと上だったかもしれないし」
　西野にそう言われて、オレは慌てて西野に言い返したよ。
「っ……　悪い西野。それ見たの、ここだけの話にしてくれ」
「え？　……って、蓮そんなのばっかだね。お姉さんの事もそーだったしさー」
　なんだかジト目で見てくる西野。
　それも仕方ないかもだけど、これも姉ん時同様、しょうがないんだ。これもバレたら結構大変だから。
「いや……、折檻されるかもしれないんだオレ。小さいころから　祖父の道場で合気習ってて……、それ　外で使ったって事がバレたら。（バレる訳ないとは思うけど……）」
「え……？　ええ!!　蓮って武闘家だったんだ!?」
「い、いやいやいや。そんな大それたもんじゃないって。オレ、職業中学生だって。これも昔ちょっとあって、オレの爺ちゃんのトコで色々と教わってたんだ。……でも、外では使うなって言われたから」
　勿論理由は判るよ。
　ほら、プロボクサーとかが一般人を殴っちゃいけない、のと同じ事だ。力に酔うような事にならない様に、って何度か爺ちゃんは言ってた。
「……蓮。後悔してる？」
「え？　後悔??」
「うん。……お爺さんから教わったもので、あの男達にひょっとしたら怪我させたかもしれない事」
「……ぜんっぜん！」
「ふふ。助けられたあたしが言うのも　変だけど。蓮がそう思ってるなら、大丈夫だと思うよ。蓮のお爺さんも絶対に怒らないって思う。だって　あたしを助けてくれたからさ！」
「あ、あぁ。確かにそうだ。ふふ。仮に折檻されたとしても、オレは堂々としてると思うよ。……西野の事、助けれたってな」
「っ……／／／／　う、うんっ！　そーだよっ!!　蓮はどうどうと胸張ってたら良いの！　そして、助けてくれて改めてありがとおーっ！

だよ！」
西野の良い感じの右ストレートが　オレの頬を叩いた。
はは、と笑みを受けつつ　オレはウインクを返したよ。
西野も、へへっ　と笑う様に　白い歯を見せたよ。
それで終わるかと思ったんだけど……。
「そーれでー！　蓮はあたしと付き合うの??　……付き合ってくれるの??」
なんか、話を戻された……。あの時の事　ほんと頭から抜け落ちちゃってるのに。
「え、えっとな……　西野。あの時は多分、あいつらから西野の事を突き放したくて言ったんだって……。それにさ、西野。そう言うのって好きなヤツに訊くべきじゃないか？　ほら　こんな状況で　気持ちが昂ったりして……　ほら、吊り橋効果とかなんとかってヤツ？　もうちょっと落ち着いて「もうっ　落ち着いてるよ！」っっ!?!?!?」
……な、なに？　い、いきができない？
なんで??　なんで？　いきができない??　なんで、にしののかおが
こんなにそばに??
なんで、くちにやわらかいかんしょくが??
「ん……、む……、んん……。ぷはぁっ！」
「……」
すこし、にしののかおが、はなれた。でも　まだにしのと……つながってる。
とうめいな　いとがおれと、……その、にしののくちびるに。
「あたしは、キミのことが……好き。蓮のことがずっとずっと好きっ！　あたしを　蓮の彼女にしてください！」
それで　にしのは　あたまをさげた。

それで、ようやく……何が起こったのか　オレは理解したよ。
……うん。西野に告白　された。いやそれどころじゃない。
『オレ、西野と……キス、したんだ』

それで　西野は頭を下げてる。オレの返事を待ってる。……凄く震えてるのは、多分怖いからだと思う。オレだって怖い。何倍も時間が長く感じると思う。その待ってる間は　ずっと辛いと思う。だから震えてるんだ。

だから、オレは震えを止めてあげたかった。

西野の肩を掴んだ。

「っ……」

西野は　少し体を揺らせた。

それで、西野はゆっくりと顔をあげたよ。それと同時に、オレは行動したよ。

うん。ちゃんと告白の返事を返した。男として当然だ。

「れ……。――――――んっ」

オレは、告白の返事を返したよ。ちゃんと……、その唇に　かえした。

２４話

あたしがいるのは　自分の家。
もっと言えば　自分の部屋のベッドの上で寝転がってる。
「……っ」
やっぱ、駄目だよ。
「～～～～っっっ!!!」
ちょっとは落ち着けっ！　って自分に言いたいんだけど、どうしても　身体が動いちゃうんだ！　足が勝手にバタバタ動いて、傍にあった枕をぎゅ～～っと抱きしめてる！　興奮を抑えきれない～って感じだよ。
「れんっ……　れんっっ……！」
今日、あたしは蓮と……キ、キスしちゃったんだから！
最初はあたしからで　ほんと勢いに任せて、だった。
蓮の事が好き。まだ会ったばかりだって言ってもおかしくないけど、時間じゃないもん。蓮は落ち着いて考えれば、って言ってたけど
あたしは蓮以外考えられなかったからさ。
それに、蓮も同じ気持ちだったのは　ほんと嬉しかった。勢いに任せた一度目は　はっきりと覚えてなかったんだけど、二度目……　蓮からしてくれた時は　なんていうのかな、凄く気持ちよかった。
あっっ、え　えっちな意味じゃないゾ??　何と言うか　多幸感って言うの??　なんて言えば良いわかんないケドっ　ただただ　良かったんだって。
……蓮、キスが上手い　とかだったりするのかな？
それは兎も角　勢いに任せたのは良かったケド……　やっぱり怖かったりもしたかな。
返事、訊くまで　本当に。フラれちゃったらとか　悪い風に考えて

しまっちゃって。もし、フラれちゃったら　前以上に蓮と会えなくなるって判ってるから。本当に楽しかったあの空間、あの時間が失ってしまうのが怖かった。一秒が何十分にも感じられちゃう。あんな感覚、初めてで　もう無いかもしれないかな。……心臓に悪いから　あんなの味わいたく無いケド。

「はぁー……。明日　どんな顔して会えば良いのかなぁ……。あたし、蓮の顔見たら絶対顔真っ赤になっちゃうよ～……　皆にもぜーーったいバレちゃいそうだし……。蓮、そう言うの嫌がるかなぁ　やっぱり」

目立つの嫌！　って身体で表してる感じだし。その辺りは　あたしも気を付けないと、だね。だって　蓮の……、か、彼氏の為……だもんっ！

きゃーきゃー！　か、かれしだって！　彼氏、だってっ！

「っっ～～！」

「ちょっとー　つかさちゃん？　早く寝ないと明日大変よ？」

「っっ!!　ご、ごめんなさい！　お母さんっ！」

お母さんが　部屋に入ってきた。すごい、びっくりした。

足、バタバタさせてたから……　伝わっちゃったのかな？　振動とか。

うぅ　き、気を付けないと。

「お、おやすみー」

「おやすみ」

お母さん　ちょっと神妙な顔してるね……。

仕方ないのかなぁ……。　漫画とか、映画とかじゃ　娘が彼氏連れて来たら、簡単に両親って許してくれないのが定番だもんね。　でも、そーいうのってお父さんじゃないのかな。一発殴らせろー！　ってヤツとかさ。

それに　蓮の事　更に好きになっちゃったんだ。あの時のお母さんと蓮の話、聞いててさ。

公園から帰る時だった。
凄く、遅くなっちゃったんだ。本当なら6時には帰れる筈だったんだけど　あの事件があって　時間は8時過ぎてた。携帯にも帰る時かかってきててね。
『お母さんからだ。うぅーん。ちょっと遅くなっちゃったし、絶対怒ってるかなぁ……』
あたしは、名残惜しかったけど　蓮とはここで別れようとしたよ。だって　お母さんは遅かったときとか、通りまで出て待ってくれてる事だってあったし。今日はお父さんは出張で帰ってこないから尚更心配してるだろうし。
何より、蓮と鉢合わせちゃうと……　さ？　その、まだ　心の準備が出来てないと思うし。
『送っていくよ。家まで』
『え……？』
そんなあたしの考えを全部判ってるよ、って言わんばかりに蓮はあたしが言う前に言ってたよ。
『理由はどうであれ、こんな遅くになってしまったのは事実だからな。ならオレにも責任はあるだろ』
『そ、そんな。蓮は全然悪くないじゃん！』
『西野がそう思ってくれてるだけでオレは十分だ。……でも、親はそうはいかないよ。　オレ、自分の両親を見てるから尚更判るんだ』
蓮のお姉さんの事、言ってるんだって思う。
心配なのは心配なんだけど　やっぱり　娘と息子じゃ　ちょっとだけ違うんだって。
『つかさっ!?　こんな遅くまで何処に……』

それで、お母さんと鉢合わせしちゃったんだ。家の外にいたからさ。

家の中だったら　大丈夫だから、って帰って貰おうと思ってたんだけど、目もあっちゃったし　どう説明しようかな、って悩ませてたら、蓮が前に出た。それで……深く頭を下げたんだ。

『本当に申し訳ありません。大切な娘さんを、こんな夜遅くまで……』

あたしは、突然蓮が謝りだして、びっくりした。お母さんもきっと同じだったんだと思う。　えっ？　って感じで　固まっちゃってたから。

でもね。あたしは……。今回のはあたしのせいだから。あたしのせいで蓮が怒られるのだけはどうしても嫌だった。　最初は上手くお母さんを説得と言うか、聞こえは悪いけど言い訳をしよう、って思ってたんだけど　頭を下げた蓮を見て　テンパっちゃって。

『れ、蓮は悪くないのっ！　お、お母さん。遅くなっちゃってごめんなさい！　で、でも聞いて、蓮は全然悪くなくって、あたしを助けてくれてっっ』

今思い出したら　もうちょっと良い言い訳の仕方はなかったのかなぁ、って思うよ。

友達と遊んで手て遅くなって、門限超えてー　って事はした事あって怒られちゃった事もあるんだけど、男のコと一緒に帰ってきたのは初めての事だったから、仕方ないって思うけどさ。

でも、どうしても言いたかった。『蓮は悪くない』ってお母さんに聞いて貰いたかった。

決してあたしを連れまわしたりして、遅くなったんじゃない、って。そんな簡単に信じられないって思うけど、何度も何度も『助けてくれた』って言ってた。

お母さんも呆気に取られてたみたいだけど、多分冷静になれたんだと思う。あたしが思いっきり混乱してるみたいだから、さ。

『……はぁ。お説教はまた今度にします。それで貴方は　つかさの友達かしら？』

お母さん。蓮の方をじっと見てたよ。

ここで、なんて返せば良いんだろう？　友達だよ　って言えば良いのかな？　で、でも……　あたしは今日蓮と結ばれたから　ちゃんと伝えたいって思ってたのもあった。

それでもこんな遅くまで　その……彼氏と一緒って言う事を言っちゃったら……、いかがわしいって思われちゃうかもしれない。健全に！　って言いたいケド、その……キス、しちゃったし。

そんなあたしの気持ちを、また判ってるって言ってるみたいに、そっと蓮はあたしの頭を撫でてくれた。

『私は神谷蓮と言います。つかささんとは　お付き合いをさせて貰ってます』

……は、はっきり言っちゃったんだ。あたし　凄く顔が赤くなってるって。一瞬でＭａｘまで行っちゃったって。蓮が初めてあたしの名前を呼んでくれたってのもきっとあったかもしれない、ね。

その後も続けて色々と蓮は言ってた。こんな形で本当に申し訳ない～とかさ。

って蓮さぁ……。キミは本当にちゅーがくせー（中学生）なのかっっ!?　留年してるんじゃないのっ!?　２～３コは年上なんじゃないのっ!?　って思いっきりツッコミたいな。今ならだけど。　あそこまで丁寧に謝罪の言葉を口にして、お母さんもビックリしてたし。って言うか思いっきり振り切ってたって感じだし！　その辺はあたしも一緒だったからよく判ったんだ。

それで、あたしと言えば　もう只管　『蓮は悪くない！』ばっかり言ってたよ。

うぅ……　もっとしっかりしないと、だよね……。

最終的に、お母さんも許してくれたよ。遅くなっちゃった事も一緒にさ。

それで　これからも健全な付き合いをー　とか、受験勉強の妨げにならない様にー　とか言って。
まだ、お父さんの事もあるから　クリア！　って訳じゃないと思うんだけど……。

「こ、これじゃまるで……りょ、両親に紹介して……　け、けっこ……〜〜〜っ／／」
やっぱりダメっ！　考えれば考えるだけ顔が赤くなっちゃう。
ちゅーがくせいっ！　ちゅーがくっ!!　ぜったい早過ぎだろっ!?
って自分で自分にツッコミ入れそうだけど……それ以上に嬉しいんだ。
だって……　もう、今は蓮以上の人なんて考えられないもん。　蓮以外となんて、考えられないから！

「うぅ……ダメだっ　今日、寝られそうにない……よ……」

気が付いたら家についてて、遅くなった事をちゃんと謝って、……それでベッドの上に横たわった。

オレは、色々と知ってるし、何度か見たんだ。

男女関係での失敗談……じゃないけど、姉の住む世界での例を何度か悪い例を、極端なものからちょっとしたものまで。

姉自身から聞かされた事だってある。『蓮はそんな風になっちゃだめだよ!!　私をそんな風にしないでよ！』とか何とか言われた事だってあった。……弟に何言ってんだって今でも思うケド。

だからこそ、嫌悪感だってあった。好きになって　結ばれて……なのに　なんでそんな事が出来るのか、ってさ。所謂浮気とか、そう言う感じの裏切りだ。男も女もどっちの例もあったよ。一般的じゃなくてちょっと特殊な世界だし　仕方ないのかな、とも思った事もあるけど、それでもそんなの嫌だった。反面教師の様に思ってた。　当分は無いって思ってたけど、もしも　オレに好きな人が出来たら　ちゃんとしようってずっと思ってた。祖母ちゃん　祖父ちゃんにも色々と鍛えられた？　し。

「……それでも、考えてたとしても　実際にするのとはやっぱ訳が違った、よな……」

まだ、脚が震えてる気がする。

帰る時、西野と別れる時までは何とか我慢できた……気がするケド、見えなくなった、見えない場所にまで行った瞬間、どっ！　と押し寄せてきたよ。そこから暫く動けなかったくらいだし。

「ちゃんと……言えた、よな。ちゃんと、できた……よな？」

誰に確認する訳でもなく自分に言い聞かせる。

本当にちゃんとできたのか、その答えはきっと……、その、本当の意味で西野と結ばれるその時にはっきりするだろうな。何年後になるか判らんけどさ……。

「……オレからは絶対にないかな。別れたいとか、嫌ったり、とかさ。きっとずっと西野だけだ。ずっと西野だけ……」

うん。そう思う。……西野も同じだったら凄く嬉しい。

「あ……　オレ西野の事　つかさって呼んだんだったなぁ。……明日からは、どうしようか」

そもそも、まともに西野と話出来るのかな、って心配にもなるな……。顔に出ないって言われるけど……　内心オレだって　心臓バクバクなんだ。

「……寝られない、かもな。今日は……」

２５話

ほんと、昨日はいろいろとあったんだけど……　これからの学校生活。もう短い学校生活でさ、もっともっといろいろ起こりそうな気がして気が重いよ。うん、マジで。

西野のお母さんに謝ってた時は　色々と緊張してて意識レベルまでシャットアウトしかねないレベルだったから　まぁ　大丈夫？だったんだけど、流石にこれはなぁ……。

『おい　知ってる？　西野つかさに男ができたってよ』

『マジ!?　ウソッ!?　誰だよ！　相手は!!』

『４組の神谷だって。……神谷ってそう言うのに全く興味示さねぇって思ってたのによぉ……』

『マジでっっ!?　大草とかならまだしも、あの神谷が西野をおとそうとしたっての？　てか、落した!?』

『何でも、襲われてた西野を助けたー、とか。西野の前で華麗に不良をＫＯしたー、とかいろいろと噂が上がっててさぁー』

もっとさぁ、色々な話題を話せよ。中学生諸君よ。

なんで、その話題一色なんだよ！　今は受験シーズンだぞ！　もっと勉強の事とか……　いや、勉強ばっかで詰まんないんだったら、ほれ、芸能人とか　話題の新曲とか新作のゲームとかいろいろと欠かせないのがあるだろっっ!?　クリスマスシーズンで出た新曲・新作だってまだまだ断然現役なんだからよ！

「はぁ……」

聴こえてくるから　ため息が出るよ。滅茶苦茶。もう　廊下に出たくないな。めんどくさい。

「ひえーっ　すげぇな……。もう皆して神谷とかの事話してるぜ。情報回るの早いなぁー。ってか、何処からどこまでが本当なんだ？」

「ううーん。正直眉唾な事が多いけどな。ＫＯした～　とか除けて。

そんな事しなくても　西野も神谷にはずっと気があったっぽいし、神谷の方もマンザラじゃなさそうだったし。……ってか、オレはどっちかって言うと、さっきからずっと勉強しまくりな真中の方も気になってるんだけど」
　好き勝手言ってくれてる小宮山と大草。真中がいないなーと思ったら、今熱心に勉強してるよ。スゲェ今更な気もするケド、しないよりは全然良い。英３を只管復唱してる。英語が壊滅的に苦手って言ってたから　まぁ　妥当かな。
「――――オレ、アイツの考えてること全然わかんねぇな」
「いやいや、結構単純じゃないか？　真中もそうだけど、東城も結構勉強してるんだぜ？　元々学力優秀なのに、更にさ。多分、一緒のトコに行きたいんだろうな。何か意気投合してるっぽかったし。付き合ってる感じじゃないけど」
「……ほんと、噂のいちごの美少女が東城だった、って事なんかー。それもわかんねぇなぁ。あ、ちょっと髪下ろして見てもらいたいな」
「……まー、真中がずっと言ってた、変態単語連発してた頃に比べたら断然マシだろ。こっちの方が健全、って思いたい。年頃だと言っても　大声出すのはダメだって」
　しれーっとオレは２人の会話に入ったよ。
　周囲の声を紛らわせようと思ったから。
「んで、神谷。噂の程は何処までが本当なんだ？」
「……いやいやいや、なんでその話にする??　真中たちの話だったんじゃねぇの??」
「気になるじゃねぇかぁぁぁぁぁ!!　オレたちのつかさちゃんを掻っ攫いやがったんだからよぉぉぉぉぉぉ!!!」
「いきなり大声になんなよ馬鹿!!　ってか、暑苦しい！　離れろ!!抱き着いてくんな！」
　さっきまで真中と東城の話にシフトチェンジしてたのに、オレが来た事で直ぐに代わった……。ちっとはオレの中の空気ってヤツをよんでもらいたいわ。

『うー……　西野さん相手じゃかなわないよねぇ……。だって、神谷くんでしょ？　大草くんとはちょっと違った魅力って言うか、落ち着いてて、大人って感じがしてて　ちょーっと注目してたんだけどなぁー』
『あ、そう言うコって結構多いよ？』

教室でも廊下でも……。
ってか、オレって西野が言ってた通り……　人気ってヤツがあったのか……？　気付かないオレが鈍い？　今までこんなの無かったんだけど……。
「大草。オレを隠す様にしてくれ。これからのボディガード宜しく頼むわ」
「なんでだよ！」
「木を隠すなら森だ。大草だったら樹海レベルだろ」
「……止めてクレ。神谷テンパり過ぎ。何かアホに見えるぞ。そんな事言ってたら」
……大草にそう言われたら　グサッ！　と見えない槍が突き刺さる感じがするよ。いや割とマジで。
しかし　アホ姉が『蓮は絶対モテそうだから、しっかりと私色に染めとかないと!!』って　結構言われまくってて、それで所謂洗脳されたのか、或いはアホ姉の言葉だから、って有り得ない有り得ないって考えてた結果なのかなぁ？　そんなわけねぇだろ。って。

「うぅぅぅぅ……　それに神谷ぁ……　朝だって西野と一緒に登校してたの……　みぃーたぁーぞぉー……」
「だから寄ってくんな！　化けモンがっ!!」
オレは　何かいつもの数倍くらいの大きさの顔面にして襲い掛かってくる小宮山を押し返した。
「それよか、神谷はどの高校目指してんの？　西野と一緒のトコに行くんだろ？」
「あぁー……。まぁ、オレは一応ずっと泉坂に照準合わせてたからな。

この辺ではあそこが一番だし。難易度的に桜海だけど、あそこは女子高だし。親は　基本的に放任主義なトコだから　何処言っても良いって言ってるけど……　近場だって事もあってやっぱ泉坂かなぁ。西野は　『あたしもそこにする！』って言ってたから……」
「おーおー、お熱い事だねぇー。良いねぇー両想いってさぁー」
「うぉぉぉんっっ!!　つーかーさーちゃーーんっっ!!」
「……」
　しまった……、普通に話してしまった……。今朝の事も知られてて色々と西野と話したりしてた事まで……。だって、大草自然に聞いてくるし。こっちも自然に返してしまったよ。
　周囲の目も、何だか痛く感じてきた……。
「はぁ……　オレ、図書室行ってくるわ。ここじゃ身が持たん。勉強してた方が　全然有意義」
　と言う訳で、ちゃっちゃと用意して向かう事にしたよ。廊下じゃ嫌でも周囲の視線が感じるケド、図書室なら大丈夫だ。騒ごうものなら図書委員と顧問の先生から大目玉くらうし。……そもそも　んな話するくらいなら　図書室くんな、って話だし。

「真中に習って　オレも英語の復習でもするかな……」
　図書室で教本とノートを広げて準備完了。
「関係代名詞1、2は問題なし。現在完了の継続と経験、完了方面も大体大丈夫だけど、とりあえずえそっちに力いれるか……」
　とりあえず開始だ。
　今更だけど　西野の事は大切。ちゃんと返事もしたし……　もう、流石に考えたくらいじゃ赤くなったりはしないけど、ファーストキスまでした。それもお互いが初めてだった。西野の事を中心に考える事はやぶさかではない、と言うより　実は周囲にナニ言われたって全然問題ない。
　でも――、そればかり疎かにしてて、受験に身が入らなくなるのはダメだし、西野のお母さんにもしっかりと言われたんだ。学生らしくつつましくってさ。だから　本分の勉強にもしっかり力いれないと、

だな。
――でも　登下校くらいは　西野がしたい事を優先させるよ。
《勉強４　西野５　今後の周囲の対応１》　程度の割合で頭の中で考えてた時だ。
『彼女が夏休みにハワイで買った高級バッグは偽物だった』を英訳しなさい……??　んー、主語はバッグだよな……？　バッグ??」
　聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「……あれ？　真中？」
「うー……英語難し過ぎ……って、神谷じゃん。なんでここにいんの？」
「いや、オレの方が早かったろ。来た時、そこ誰も座ってなかったし」
「あ、ああ。そりゃそっか。集中してたから判らんかったよ」
「ほっほー、真中でも集中できるんだな？　映画関係以外で。なかなか見直した」
「うるせっ！　オレは東城と約束したんだよ！　ぜってー同じ高校に入って映画作る！　って」
「おう。目標がある事は良い事だ。……だから頑張れ。あと、そこは使う文法があるだろ？　その辺も意識して覚えないとミスるぞ」
「へ？　そうだっけ？」
　英語苦手な真中に判りやすく教えるのは難しい。でも、判らない相手に教える事が出来たら、その時１００％自分も理解できている証明にもなるって、受験講師が言ってた様な気がするな。
「そうだよ。そーいう場合は関係代名詞を使うんでしょ？」
　真中と話をしてたら、もう1人入ってきた。
　東城だったよ。
「こんにちは。２人とも勉強頑張ってるのね」
「ああ。東城も、だろ？　うーん。東城が来たなら　オレ場所変えるかな」

「えっ??　なんで??」
「いや……　その辺は空気読めるから」
　今の東城と真中の関係が判らんほどオレは鈍感でもない。……西野曰くオレは結構鈍感な面があるらしいけど、これくらいは判る。
「い、いやいやいや。今は勉強だろ??　泉坂入れなきゃ意味ないんだし！　1人より2人、2人より3人だ！　誰しも苦手があるだろ？」
「そ、そうよ。無理して出ていくなんて……。わ、わたしが後から来たのに……」
「わ、悪かった。真中は兎も角、東城が悪い気がするなら、ここで勉強するって」
　顔を赤くさせてる2人を見るのは　良いんだけど、なんか東城は段々罪悪感が沸いてる様な表情になっていってるから　直ぐに改めたよ。
　ま、ここは図書室。勉強する場所だし。
「映画を作る為にも、オレの目標は泉坂高校合格！　あそこじゃねーと映像部ないんだし、勉強をするしかない！　あ、そうだ。東城。さっきの話だけど、神谷も誘うか？」
「ん？　さっきの話??」
「あ、うん。朝少し早めに学校にきて、朝の勉強会をしようって話！今西野さんも勉強頑張ってるって聞いたから、皆でしない？　捗ると思うんだ！」
　東城が身を乗り出しそうな勢いで薦めてくる。色々と嬉しい部分が当然あるんだけど、東城がそんな動きしたら……。
「きゃっ！」
　ほら、なんで？　って思うタイミングで椅子から転び落ちたよ。それも顔面着地しけてる。
「と、東城!?」
「うわわっ！　大丈夫か、東城!??」
　すてーんっ！　と転んだから……、うん。……仕方ないよな？　これは……。女子生徒はみんなスカートだし……　捲れちゃって、それを見てしまっても、オレらには罪はない。と言うより無罪だよな？

……ってか、最近こんなのが多い気がする。
うん……。今　東城のスカートが良い角度で捲れてて、中身がはっきりと見えてしまったんだ……。
それは、真中がずーーっと騒いでた柄のモノ。出会いって熱くなった？　のを象徴する……　いちご模様の下着。

「だ、大丈夫。あたし、ドジだから……」
「……」
「……」

フリーズしかけたって悪くないと思う。
でも、ずっとこけたままなのはアレだから……。
「ほら。大丈夫か？」
反射的に手を差し出したよ。この辺は真中の役割だと思ったんだけど、オレの方が近かったし。
「あ、ありがとー。……うん、メガネ、割れてないよね？　ほっ……良かった」
メガネわれそうな勢いで倒れてたけど、問題ない様子だ。目が悪い人がこの時期に割ってしまうのは、正直最悪だった、って思うからその辺は良かったってオレも思ったよ。
それに、メガネだって馬鹿にならない金額するし。

「勉強中に倒れる～なんて事滅多にないと思うけど……　ま、気を付けろよ……って、いてぇっっ!?」

東城を引っ張り起こした後、なんか背中に激痛が走った。
ほんと、いきなり。

「……こんなトコで、とーじょーさんとナニしてるのかなぁー……蓮は」

振り返ってみると、笑ってるのか怒ってるのか判らない表情をした西野がいたよ。
忍者だ。全く気配を感じなかったし……。
メチャ痛い。　でも、西野のその顔。笑ってるのか、怒ってるのかやっぱ判らないけど……。

うん。やっぱどんな顔しても可愛いってコトは判る。
……口に出して言わないけどな。

26話

背中……じゃなく、脇腹かな。思いっきり抓られた。非常に痛い。
抓りって　誰が誰にしたとしても痛い事には変わらないってどっかで聞いた事あるけど、マジで痛い……。西野は笑ってるのか怒ってるのか判らない顔してたけど、今は怒った顔になった。
「……って　早速浮気かっ!?　蓮っ！　こんなトコで東城さんと2人っきりで!!　ヒドイじゃんっ！」
「い、いやいや。なんで2人きり??　真中いるだろ？」
「むーーーっっ！　……ん？　あれ？」
西野から死角になってたのか、或いは最初っから真中の事が眼中になかったのか、うん。今回のは前者だと思う。　オレが言ったら西野　はっ！　としてたから。
「あ、ほんとだ……。やっ　真中くん。こんにちは。あれから　えっちな事、考えたりしてないだろーな？」
「ど、どーも。って、図書室で勉強してたんだから！　そんな事してないって！」
「そっ、なら良し！」
多分真中がパンツパンツ連呼してた時の事西野は言ってるんだろうな。
それにしても、真中の事に気付かなかったのは何でだろ？
今の西野が視野が狭くなってるからか。
そう言えば今思い出したけど、西野って今朝から結構な猪突猛進モードになってるからかな。
「――蓮？　今変な事考えてない？」
「滅相もありません。……後、離してくれると嬉しんだけど……。メチャ痛い」
「あ、ごっめんっ！」
西野は　ぱっ　と両手上げて放してくれたよ。無罪放免って事だろうな。……無罪は当たり前だ！
「西野さん　こんにちは！」

「東城さん！　こんにちはー！　……ん？　あれ？」
図書室ではもうちょっと静かにしようね？　とやんわり注意しようとしたら、西野なんだか東城をまじまじと見てる？
「え？　どうしたの？　あたしの顔に、何か？」
「やっ　そうじゃなくて!!　ほら、皆！」
西野が東城の肩をぐいっ　と掴んで　こちら側に向けたよ。
「ほら、やっぱり　東城さん、前髪下ろしたら凄くかわいくなったよ！　ほら、絶対可愛いよね？　真中くんも蓮も！」
西野が　笑顔でそう言ってた。
見てみると、倒れた時　メガネは割れたりしなかったけど　髪留めが外れたみたいで東城の前髪がおりてたよ。
西野に言われるまで気づかなかったなーと言うより、倒れた東城をそんなマジマジと見れなかったから仕方ないか。それに　直ぐに西野に抓られたし。
真中もオレ同様今気づいたみたいで顔を仄かに赤くさせて頷いた。
「……うん。オレも絶対そっちの方が良いと思う」
「ねー？　あたしが言った通りでしょ？　ほーら！　どんなもんだい？　蓮くん??」
「なんで西野がドヤ顔するのか、いまいちわからんケド。……んん」
「ん？　なんだよ蓮。不服でもあるの？」
「えふんっ……。いや　そんなん無いって。オレもそっちの方が似合うって思うよ」
確かに東城はそっちの方（前髪を下ろした方が）良いって思ったけど、それ以上にドヤ顔西野も十分すぎる程可愛いよ、って思ったからちょっとタイムラグ起こしたよ。口に出して言わなくて良かった。
言うのはやぶさかでもないんだけど、流石に皆の前で言える程　出来上がってないし。
咳で誤魔化せたと思う。西野は怪しむ様子ない。良かった……。
「え、えと……　そ、そんな……っ」

東城は　何か恥ずかしそうに顔を赤くさせてた。
「あ、そーだっ！　その、西野さんも一緒に勉強するのどう??　ほ、ほら　朝図書室で皆勉強しよーって話、してたんだけど」
「え？」
「3人より4人！　みんなで勉強した方が楽しいって思うから！」
あ、東城　今強引に話題を逸らそうとしてるのがよく判る。
でも　そうツッコンで　意地悪をするのもちょっとかわいそうかな？
「確か西野は数学苦手って言ってたよな？　皆で復習すれば効率も増すと思うぞ。オレは賛成だ」
「んー……　そうだね！　あたしも混ぜて貰っちゃおうかな？」
「よっしゃー！　これで数学も英語も怖くないぜー！　（ってか、美少女2人と勉強って、なんかメチャクチャ充実感もあるんだけど……。中3にして初めてだなー……）」
「ん？」
真中が何かすげぇ感動してるみたいだ。何か涙まで流してるけど、そこまで好きになったのか？　勉強。
「な訳ないか」
「ん？　どうしたの蓮」
「いや、なんでもない。ほら、そろそろ休み時間終わるぞ。……この面子でまた遅れたら、次はもっと長くなりそうだ」
あまり思い出したくないけど、前の昼休み。盛大に授業遅刻して大変だった。勿論説教がな。
「あー、そう言えばそうだったねー」
西野は同調してるけど、オレは覚えてるゾ。忘れてないし。
「お咎めなしだったよなー、1人だけ！」
「えへへ……」
ぽこっ！　と西野の頭を一発ツッコミ入れたよ。
原因の1人って自覚があるのか、舌をぺろっと出して笑ってた。
くそう……　やっぱ可愛いな。なんか簡単に色々と許しそうで悔しい。

「ふふ……あははは」
東城も笑ってるし。
「ってか　いつの間にそこまで仲良くなったんだ？　神谷と西野」
「ええ!?　ま、真中くん。２人の事　噂になってるんだよ？　知らない？」
「へ？　噂??」
……アレだけ騒がれてたら当の本人でさえ耳に入るのに。真中は知らないみたい。それだけ勉強に力を入れてたのか。うん。素直にスゲェって思うよ。今だけは良い意味で。
「２人はお付き合い……してるんだよね？」
東城は　凄く恥ずかしそうにそう聞いてた。なんかこっちまで恥ずかしくなるくらいだ。
「あ、あはは～……。う、うん。そーだよ？」
西野も顔赤くさせつつ、腕を取ったよ。オレの。
……ここが図書室で良かった。それに今オレ達以外誰も利用してなくてほんと良かった。

「だ、だから　東城さん！　蓮　取っちゃダメだからね！　私、結構一途で、更に欲張りなんだからね!?」
「そんな事しないよー。ふふふ。おめでとう西野さん。ほんと、良かったね」
「っ……／／／　う、うんっ」

うんうん。仲良さそうで良いな。
更に言えば　話題がオレ達の事じゃなかったら良かったんだけどなぁ。今、オレ非常に恥ずかしい。西野、ほんとあれから一直線だから。ストレートに言ってくれるから。嬉しい事は凄く嬉しいんだけど　やっぱり恥ずかし過ぎて顔が熱い。
オレも　はっきりと西野のお母さんに色々言っちゃったから、『そんなのお互い様だもん！』って言われたけど……。うぅ　これ以上やったら顔から火が出そう……。

「うーむ。成る程。だからあの時、告白するの止めたのか？　神谷。良かった。オレフラれると同時に赤っ恥かくとこだった」
「……」

後から聞いたら　真中にその後色々訊かれたりしたらしいけど、オレ全然覚えてなかった。

「へ、へへへ……　朝、勉強会……。　聞いたぞ、聞いたぞぉぉぉ……」
「面白そうな事になってるケド、女の子2に男4ってなぁー。オレ達余りもんだし。惨めになるだけだと思うよ？　小宮山」
「聞いいいたぁぁぁぁぞぉぉぉぉぉぉーーー!!!」
「ダメだこりゃ」

27話

今は夕方。
学校も終わって帰宅中だ。
あー、後明日の朝は早めに家を出ないといけないな。東城や真中たちと約束してるし、すっぽかすのは頂けないし。
それにしても朝の勉強会か。なんだか凄く新鮮な気がするよ。普段が普段な連中だから、勉強なんて全然考えてないし、話の話題にもなってなかったから仕方ないかもしれないだろうな。
それに『一緒に勉強しよう！』なんて　この学校に来て初めての事だし。

「……ねー　蓮？」
「ん？　どうした？」
後　勿論、オレの隣には西野がいるよ。
『登下校は一緒だからね！　1人で行っちゃダメだよ』
と言う事で一緒にいる。
勿論　一緒にいたいって思ってるのは西野だけじゃない。オレ自身も同じ気持ちだ。だから喜んで応じた。西野も笑ってくれてほんとに良かった。
そんな西野なんだけど、なんか難しい顔してた。明日の勉強会の事や受験の事でも考えてるのか？　と思って、もうちょっと続く様なら聞こうと思った。
「あたしさー、とてもとても大変な事思い出したんです」
「……？　大変な事？　それになぜ敬語？」
「そっ。大変な事！　ねー　あたし達付き合ってるんだよね？」
「あ、ああ　そうだ。（敬語に関してはスルーね。……ん、でも　改めて聞かれると　やっぱ恥ずかしいかも）」
でもそれは西野も同じだろ？　と思って顔見たんだけど、まだ何か考えてる仕草だ。
それで　次にぱっ！　と擬音を付けたくなる勢いで顔を上げると、

指された。
「あたし！　蓮のケータイの番号知らないんだよ!!」
「……はい？」
「はい？　じゃないよ！　どーして　彼氏彼女なのに、お互いの番号知らないのさ!?　おかしくないっ??」
　西野　さっきから　何か難しい事でも考えてるなー、と思ったらそんな事か……。
「もう　蓮！　何だそんな事かー！　って顔してる!?　絶対大事な事じゃん！　……それとも蓮は　知らなくても良いの？　あたしの……」
「……」
　思考を呼んでくれるのは　やっぱエスパーだって思うな。
　でも最後に　そんな顔されたら『別に知らなくて良いよ？』なんて絶対言えないし。てか言うつもりなんて元々ない。
　だからさ　オレは　言葉で言うよりも先に鞄から出した。もう速攻で携帯取り出したよ。
　それにちょっと予想外だったのか、西野は　眼を丸くさせてたよ。ちょっとしてやったりな気分だ。
「あれれ？　何だか反応早いね？」
「ちょっとでも遅れたら『蓮なら　別に良いよ？　って言いそうじゃん！』ってさらに追い打ち喰らいそうだからな。自己防衛ってヤツだ」
「おおー、よーく判ったね？」
　あはは、と笑う西野。どうやら読み通り　今までの表情からちょっと大袈裟な言い方も狙ってたみたいだ。怖い怖いってか？
「これが　オレのメアドと……番号」
「んっ　ありがとーっ！　はい、これがあたしのだよ」
　西野は　笑顔いっぱい。これくらいの事でここまで笑顔になってくれるなら　お安い御用ってヤツだ。と言うよりさっさと交換しておけば良かった。うん。家とかで寝る前に電話して……とかさ。彼氏彼女だったら普通だよな？　うんうん西野が言う通りだ。

なんでしなかったんだ？
……愚かなり神谷蓮。

「あ、蓮。この番号あたしの家族と蓮しか知らないんだからね？　他の人に教えないでよ？」
でもそれも今日までって事だ。
初めて好きなコが出来て、好きなコと一緒になれた。
また　オレの中で新しい扉が開いた気がするよ。
「おう。それオレからも言っとく。家族以外知らないから、オレもそれで頼む」
「あはははっ！　蓮の番号だったら欲しがりそうな人多いもんね？」
「……その言葉もそっくりそのまま返すぞ。と言う訳で互いに色々と一致してるって訳だから、この約束は鉄壁だ。やぶれないし、やぶらない」
「はーい！　あたしも右に同じー！　……これからもずっとって訳にはいかないと思うけど　今は蓮だけが良いから」
手をひょい、と上げた後、西野は小指をオレに向けた。
「ほら、指切り。約束だからね」
「――了解。約束だ」
がっちりと約束を交わしたよ。
その後は西野は携帯を鞄にしまって……オレの腕を取ったよ。逃がさないーって言わんばかりに強く。　……逃げないって。
「んーっ　すっきりした所で　いこっ！」
「ははは。はいはい」
何だか凄く暖かかった。
寒空に丁度良い。心地良くて暖かい。心から笑顔になれる。

「あ、そうだ！　先週の笑点みた??　桂　歌丸最高だったよねー？
円楽さんとの掛け合いなんかほんっと絶妙で！」
「あー、そう言えば西野が好きな芸能人って桂　歌丸だったって言っ

てたな。……アレはあの2人ならではのやり取りだろうな。座布団1枚じゃ足りないって思った」
「でしょでしょ??う～～ん　蓮なら判ってくれると思ったよ！」
楽しそうに話すのは笑点の話。
勿論色々と業界の事知ってる。（流石に　まだ話したりはしないけど）
それとなく会った事のある人だって多いんだけど……　流石にそっちには姉は呼ばれてないし、付き合いもそこまである訳じゃないから　笑点のメンバーの人とは会った事は無い。　会った事は無いけど　西野と同じく母さんが昔から好きで　家では大体ＴＶ番組かかってるから、それなりには判るつもりだ。
でも、初めて西野に聞いた時は　『渋いな』、って思ったのはこっちの話。

笑点の話で良い感じで盛り上がってた時だ。

「あたしのお母さんもねー笑点が……って、あっ！　そうだ。お母さん、蓮にまた会いたいって言ってたよ？」
「んん??　何でまた。　オレ……何かミスったのかな……？　確かにやっぱり緊張してたし……」
「へへー（あれで緊張してたんだね……。絶対ポーカーフェイス過ぎだって）そんなんじゃないよ。ちょっと落ち着いてねー？　蓮って元々有名人だったけどさ！　更に有名になっちゃったみたいなんだ」
「……はい？」

何言ってんの？　って素で思った。西野に対しては沢山そう思ってきたケド　過去最大級かも。その後に教えてもらった内容が過去最大級……。

あれはね、蓮の彼女になれた次の日だったよ。
やっぱしちょっと　ぎこちなかった気がするケド、何だか見える景色がすっごくキラキラと輝いてる気がした。恋すると、大好きな人と通じ合えると、ほんとに変わるんだね……。って言うのがあたしの感想だったよ。　とてもくすぐったくて、それでいて心地いいんだ。
『つかさ。神谷君の話だけど』
そんな浮かれてるあたしの事　しっかりと見抜いてますよ？　って言わんばかりにお母さんが蓮の話を始めたんだ。
『え？　……蓮の事？　どうしたの』

あたしはちょっとドキドキしてた。
あの時　お母さんは許してくれたのは間違いないんだけど、やっぱり反対だ！　って言いだすのかな、って。中学生が早過ぎだ、って。お父さんも許してくれなかったりしたら、更に大変だし。
でも、何言われてもあたしは蓮の事諦めるつもりないから。
そう身構えてたら、お母さん笑ってた。
『今度ゆっくり話したいわ。……ちゃんとお礼を言わないといけないコなんだから』
『……へ？　お礼??』
予想外だったよ。お礼を言うって。
だって　お母さんには　ずっとずっと謝ってばかりだったからさ。あたしも……それに蓮も。
『ふふ。色々と訊いたのよ♪　なんだか羨ましいわーつかさの事。今時、そんな風に助けてくれるなんて中々あるもんじゃないわよ？』
『……えっ？』
『蓮はあたしを助けてくれたの』ってほんとそのままの意味だったのね。ふふ。私も神谷くんみたいに助けてくれるかしらね？　お父さんは。……それは兎も角』
お母さん　あたしの目を真っ直ぐ見たよ。
『つかさはしっかり者だって事は判ってる。でも、つかさが襲われそうになったって話を聞いてさ。……本当に心配したよ。それにそれ以上に神谷君には感謝しかないのよ。大切なつかさを守ってくれてありがとうって。だから……』
お母さんはニコっと笑った。
『また、連れてきてね？　未来の私の息子をさ』
『っっ／／／』
でも　流石に、最後の辺りは　ちゃんと聞けなかったよ……。

西野から色々と話は聞いた。
「と、言う事があったんだー。どうもね？　コンビニのあのお姉さんって　近所に住んでる沖田さんだったんだねー。蓮の事すっごく印象に残ったって言うか、その……　か、格好良かったとか何とかって。沖田さんだけじゃなくて、店長も直ぐ傍に住んでる人で……　それであっという間に広まったんだって」
「……」
うん。西野のお母さんにそう言ってもらえるのはとても嬉しい。感謝してくれてるって言われて、嬉しいけど　やっぱり　なんて言われても西野が襲われそうになった原因の1つは自分にあるから　素直に受け入れるのは難しいかもしれない、かな。

でも、それ以上に……。
「……広まった？」
「あー……うん。で、でも　大丈夫だと思うよ??　蓮の名前は言ってなかったから！」
「……」
「うー……　そ、そうだよね？　……ゴメン。蓮はそう言うの嫌いだったんだよね……」
確かに、西野の言う通りだ。
姉の影響からだって自覚してて、色々と騒がれるのは苦手だ。
でも、苦手であって嫌いだって訳じゃない。
それを言えばもっと嫌な事だってある。
「大丈夫だ」

「え？」
西野が悲しそうな顔してるのを見るのが嫌だ。　それが自分の事であるのなら尚更。
自分の中での色んな順位なんて、あの告白した日から総入れ替えだ。
「何でもない事だって。西野を助ける事で出来て、一緒になれて。その代償？　ってのがそれなんだったら　軽過ぎ」
「そ、そっか！」
よし、笑顔に戻ったな。
色んな顔、西野はどんな顔してても可愛いってずっと思ってるけど、やっぱり笑ってる顔が一番だ。
「それにしてもなぁー　平凡は、いちごと共に、消え去るよ。ってか？」
平凡を目指して頑張った？　けど。あの屋上での出会いから全部ひっくり返ったって事かな。元々　オレの事噂されてたみたいだけど、それもあの出会いがきっかけだって思ったりしてるよ。
「ふふっ　何詠んでるの？　……んん？　ちょっとまって。いちごってどー言う意味??」
「あー　いや。何でもないさ。西野との出会いは衝撃だったなーってだけ」
「もーーっ！　え、えっちなのはダメだぞ！　ま、まだ早いってば!!」
過去よりも今を大切にする。
それが今後の抱負ってヤツかな。

２８話

と言う訳で　今は翌日の早朝６時。
オレは　ここまで早く起きる事はあまり無いし、部活とかも今まで入ってなかったから朝練って言う習慣もない。
だから、結構家族にぎょっとされた。そんな遅起きじゃない筈なんだけど。
「もー、言っておいてくれたら　蓮の分もちゃんと用意するのに」
「あ、母さんゴメン。大丈夫だって。何か買ってくから」
「育ち盛りなんだから　コンビニとかで済ましちゃダメでしょ？　ほら　まだ時間ある？」
「えっと……うん。まだ少しなら」
「はいはい。ちゃんと朝ご飯作ってあげるから。しっかり食べて行きなさい。何があるのかは聞かないけどね？」
色々と察したのだろうか……？　母さんはキッチンの方へと行ってくれた。いや、本当に反省だ。昨日言っておいたら良かったのに、完璧に忘れてたから。
うん……。反省するケド……　何か感じる。さっきから何か感じる。
肌寒い朝なんだけど、太陽はちゃんと出てるから、仄かに暖かさだって感じる良い朝だって思うのに、何処となく異常な冷気。……いや、妖気？　みたいなのが。

『……蓮、最近おかしくない？』

原因は絶対アレ。
全国ツアーとやらの真っ最中の癖に　事ある毎に舞い戻ってきては　また戻ってく。
メチャ凄まじいバイタリティの持ち主。そこらへんの芸人さんの体当たり企画とかより数倍は疲れそうな事してんのに、全くおくびに出さず、おまけにこのオーラ？　を出すと言う特技まで発動させて

る。おまけにエスパー。

「……なんか、あったでしょ？　……フラグ的なのが」
「かーさん。そろそろ行きたいんだけど、まだ？」
「何言ってんのよ。まだ1分も経ってないじゃない。しっかり食べないと大きくなれないゾ？」
「いやだって、家の中が異常に寒くて……。まだ外の方が良いかな？　って。早く出たいってすげー思って」
「あらあら」
　ここで漸く母さんも気付いたみたいだ。姉の妖気（オーラ）に。いや、妖気にと言うか　視覚的に姉を見つけたらしい。
「愛ちゃんももうご飯食べるでしょ？　今日はまた飛行機で戻るって言ってたけど」
「……」
「おーい、愛ちゃん。お母さんの事無視するの、なんか寂しいし辛いナァー」
「……あ、ごめんごめん。ちょっと考え事してて」
　何か姉の様子が変わりだした切っ掛けってどう考えても、オレが……　その、西野と一緒になれたからだって自覚がある。そう言うの読んでくるのがマジでヤバイんだ。
　でも流石にオレの事　尾行とかまではしてない。そんな事したら、オレが本気で怒るって判ってるから　したくても出来ないって言うのが正しいかもだけど。
　でも、なんか今日は更にハイテンションな様子だ。
「今日は蓮と一緒にいるっ!!　がっこーについてく！」
　怒るの判ってる癖に、何かまた無茶な事言い出したから。
「何馬鹿な事言ってるの愛ちゃん。もう中学は4年前には卒業したでしょ？」
「そう言う問題じゃないって、母さん……」
「行くのっっ!!」
「ダメだろ！　つか、時間的に無理だろって！　飛行機！　搭乗時間

!!　流石のオレもこれ以上困るマネージャーさん見てられんわ！」
　ひぃひぃとさせてる　悲壮な感じなマネージャーさんを度々見る事はある。
　因みにマネージャーさんは女性であり、オレにとっても姉にとってもお姉さんの様な存在。
　優しいし綺麗な人で　ほんと弟のオレから見てもスゲェ手のかかる姉を妹の様に面倒を見てくれていて、更には多少な我儘は大目に見てくれる。……というより必死にフォローしてくれてるの方が正しい。
　でも流石に今回レベルのはダメだ。
　姉もやってるけどそれ以上にオレがＴＶに映らない様に、というかメディアに露出しないように色々とお力添えをしてくれてるのもマネージャーさんだし。オレも出来る限りはフォローしたいって思ってる。
　姉が暴走する原因の大体がオレ関連だから。
「……だって、蓮怪し過ぎるもん」
「なんでオレが怪しいんだよ！」
「それに構ってくれないし……」
「アホな事以外は普通にしてるだろ？」
「抱きしめてくれないもん……」
「それは常にせんわ！　アホ！」
　朝から頭が痛くなるような会話をしている内に……気付けば６：２５
「ッ!?　やばっ」
　一応約束では『６時半くらい』にだ。
　正確に６時３０分って言ってないから、言い訳の余地はあると思うけど……そう言うのはしたくない。
「母さん！　パンだけで良いから!!　ゴメン」
「もー　しかたないわね……。はい。あまりがっついてのどに詰まらせない様にね？」
「ああっ！　蓮っ!?」

「はいはい。愛ちゃんも時間圧してるでしょ？　早くご飯食べちゃって」
「ぶー……」

朝からほんと疲れる。
こんなのが毎朝あるのは正直辛いかもだ。色々考えとかないと、だな。西野のこととかも勿論……。ちゃんと早めに話した方が良いのかな。
今時の中坊がわざわざ付き合ってる事を親姉弟にカミングアウトとかするか？　って思うケド　姉の暴走は正直頂けんし。でも今は早く向かった方が良いって事でオレは更に急いで家を出た。

それで　何とかダッシュして待ち合わせの場所に到着。

待ち合わせ場所、あまり遠くなくて良かった。
「ふぁぁ……って　わっ！　びっくりした!!」
「ふぁっっ!?」
一息つこうと思ってたら、曲がり角から丁度西野がやってきたんだ。
何と言うベストタイミング！　と言わんばかりに。おかげで変な声出たし……。
「おっはよ～～……　うーん、あたしとしては蓮の事待つつもりだったんだけどなぁー……ん？」
「……はぁ、はぁ、って　いやいや　時間指定してるのに　相手待たすのは不味くないか？　それ普通に遅刻って事じゃん」
「ふふ。でも　待ってる時間も楽しいかもだよ？　あーでも、頑張って走ってきてくれたみたいだから、それ以上に嬉しいかなっ？」
上がってる息や汗を見て、西野はオレが走ってきた事が判ったみたい。
……ここまではぁはぁ言ってたら判るか。ほんと到着したと同時だったし、息なんか整えられないし。

「ふぅ……。そりゃ　男の方が遅刻するなんて　アレだろ？　幾らあいまいな時間指定だったとはいえさ」
「へぇー。蓮も恋愛系のドラマとか漫画とか見るのかな？　かな??
ほーら、可愛い彼女が『ごめん、待った？』ってきたら『いや、オレも今来たばかりだから』って返すシーンを思い描いてたでしょ??」
西野は、オレの胸の部分に　人指し指を当てて笑ってた。
確かに　王道ではあるがそう言う類のドラマや漫画は見た事がある。というより、姉が出てるドラマとかは基本家でかかってるし。
そう言うドラマとか漫画の中じゃ純愛でエンディングを迎えるのが多いけど現実じゃえげつなかったり、ドロドロしてたり、って言うのもよーーーく知ってるから、あまり変な想像とか、理想をもったりはしてない。
だから、これはあくまでオレの意思だ。あまり西野を待たせたくないって言う、な。
オレは　違う方向で西野にカウンターを入れる事にしたよ。
「……ははは。でも西野。自分で自分の事を可愛いって言うか？
まぁ、オレは全く否定はしないけどな」
そう。その辺だ。可愛い彼女が～ってシーンを当てはめてるし
遠回しに言ってるって事だと思うのは当たり前だし。
んで、勿論可愛いって部分は否定しない。それを真顔で言えたよ。
なかなかナイスな感じで平常心を保ちつつ返せたから　西野は顔を結構赤くさせてた。
「っ／／／／　も、もうっ！　言葉の綾だよっ！　ほら、いこっ！　皆待ってるかもだし！」
「っとと、ＯＫＯＫ」
照れ隠しだろうな。オレの腕を取ってさっさと前を向いて歩きだした西野。……それにしてもやっぱり結構力強いな。いつまでも引き摺って連れて行って貰うのもなんだから　さっさと西野に合わせたよ。隣り合った。
……今日もまた、始まるんだろうな。新しい日がって思う。
口にはぜーーったい出さないけど、そんな感じで割りと思ってるか

ら　オレもたまに自分の事変になっちゃったか、と思ったりしてるよ。恋して変になった。って所か。
　うん。似たような漢字だし。
「……面白くないか」
「うん？　何か言った？」
「いーや。何でも。……ほら、マフラーズレてるぞ？　首元寒いだろ？」
「わっ！　……へへっ　ありがと」
　マフラーをかけ直してあげて、西野は笑ってて……。うん。メチャクチャバカップルだ。オレ達。
「……」
「い、今更顔赤くしないでよ」
「あ、いや、……うん　すまん。がっこーでは自重するから。それでも良いよな？」
「うーん……　ま、しょーがないかな？」
　許してくれてよかった。
　こんなの、学校でもやってたら　それこそ大変だ。小宮山みたいなのが　増えてきそうな気がするし。

　それで学校には無事に到着。
　朝早いからか誰にも会う事なかった。校門をくぐって学校の玄関、下駄箱の前で2人に会った。
「2人ともおっはよー。みんな早いねぇ。あたし達が1番だと思ったんだけどなぁ」
「おはよう。西野さん。神谷くんも」
「はよー」
　東城と真中の2人。東城は兎も角、真中がここまで早いとは予想してなかったな。
「あっ！　わぁー　東城さん！　今日は前髪おろしてるんだねーっ？」
　西野は　東城の髪型を見てにこっと笑って頭撫でてた。　オレも

結構西野の事撫でたりしてるけど、あれってやる方もなんか気持ちよかったりするんだよな……。女の子の髪ってすごくサラサラで気持ちいいし。……絶対口にださないよ？　この辺も。そんなフェチない。
「あ、あはは……　恥ずかしいわ。なんかその気になっちゃったみたいで」
「ううん。ぜーーったいこっちのが可愛い可愛い！　自信もって！」
「ありがとー　西野さん」
「……なんか絵になるよなぁ。学園1の秀才と美少女が並んでると……」
「変にトリップするなよ、真中。今からべんきょーするんだからな」
「わ、わーってるって！」
　ぽーっと2人を見てる真中をとりあえずオレは起こした。気持ちはわからなくもないけど　折角の早朝勉強会だ。色々と有意義に過ごしたい。ああ、でも真中には確認をしておこうか。
「もう間違いないって判ってきたんじゃないか？　真中」
「ん？　何の事だ？」
「東城の事だ。……屋上で出会ったのが東城だって事」
「っ……　あ、ああ。東城って　本当はメチャクチャかわいい……よな？」
「本当は、って　結構失礼な気がするケド……。まぁ　今の方が似合ってるってオレも思うよ。あ、あと　オレ東城に確認してるから100％間違いないぞ。『あの時落ちたけど脚大丈夫だったかー？』って」
「っっ！　そ、そーなのか!?　なんで早く教えてくれないだよ!!」
「お前なぁ……　変態ワード連呼してて　あんま近付きたくなかったからだろうが。オレの気持ちも判れ」
「う……」
　真中は自覚あったみたいで、押し黙ったよ。
「でねでねー？　東城さんってすっごく成績良いじゃん？　だからあたしも気合いれよーと思って予習してきたんだよ？　勉強見ても

らえるのが凄く嬉しくってさ！」
「や、やだ。そんなこと……。西野さんは　苦手って意識しちゃってるだけだって思うから　直ぐに判ると思うわ」
「えへへ。何だか自信がつきそうだなー。東城さんにそう言われたら」
「さて、オレ達も2人を見習って勉強だ。英文でも読んで問題出してやろうか？」
「ええ！　ちょ、ちょっと待て！　心の準備がまだだって！」
「……いやいや、別にいらんだろ。そんなの」
　女子同士、男子同士で勉強会が始まる前のちょっとしたやり取りをしつつ、目的地である図書室についたんで、扉をがらっと開いてみると……あらビックリ。
「やあやあ!!　キミたちも今から勉強かな？　いやぁ　実に奇遇だねぇ。偶然だねぇ」
　……何か先客がいた。すげぇ見覚えのある2人がいた。
　その内の1人は何か拝んでたよ。口には出してないけど　多分『わりぃ……』って言ってる様に見える。感じる。
　朝から学校でもなんかメンドクサイ事になりそうな気がするんだけど……気のせいじゃないよな、これって。

２９話

いや、確かに面倒くさいって気持ちが全面に出たのは否定しないよ？

小宮山が以前よりも倍増しで絡んでくる所とか　もう考えただけでウザいし面倒。

『神谷ぁぁ、神谷ぁぁぁぁ……！』

『って、勉強はどーしたんだよ!!　妖怪！』

こんな感じで早々に絡んできたんだ。

絡んできたり、顔七変化させるそのエネルギー、ちょっとは　べんきょーに向けろや！　って、出会い頭に言ったよ。

ま、まぁ……　小宮山が殺気を飛ばしてくるのには理由があるんだ。

『ねぇ、かーみやくんっ♪　ほら、ここ！　ここ教えてくれないかなぁ？』

そう……　西野のおかげって訳。おかげ、とは言いたくないか。

オレと真中、西野と東城に分かれて其々の苦手科目と言うか、目的課目を勉強しよう！　って自然となっていたから　そのままで行こうとしてた筈なんだけど……、何か　西野が数学を東城に聞きつつもオレの方にも色々聞いていたよ。東城って言うメチャ優秀な先生（横で聞いてるだけでも十分判りやすい）がいるのに、ちょくちょくオレの方に聞いてくる。

勿論、オレだって応える。

西野はそのまま　どんどん顔を近づけてきて、それとなくボディタッチもある。

そりゃ、小宮山がイラつくのだって判らなくもないさ。西野の事……だったし？

それで、真中は真中で

『なんでお前らがこんな朝早くにここにいるんだよぉぉぉーーー!!』

と大草に食って掛かってたよ。そりゃ右に同じな意見だけど　大

体判るつもりだ。小宮山が原因なんだ、って事。大草がその後思った通りの答えを返してた。
何か、小宮山は
『西野を振り向かせる最後のチャンス！』
って息巻いてるみたいだけど……。
『勉・強！』
オレの肘打ちで、その意気込みを早々に沈めた。
西野が……　その、西野から　オレに告白してくれたんだし　他にこんな舌の根も乾かない内に、別の男の方に行くー　なんて思って無いんだけど……　それでも不快だったんだ。
『へへへ～♪』
『ふふふ……っ』
そんなオレを見たからなのかな。西野、東城と一緒に笑ってた。
うん。朝から良い笑顔だ。
と言う訳で　勉強会の続行だ、って所で　大草が手を上げた。
「ああ、西野？　もうオレらは神谷と西野の関係判ってるし、別にいつもの様に呼んだって良いって思うぜ？」
「へ？　いつもって？」
「はぁー　バレてないって思ってた？　西野って、神谷の事　名前で呼んでたじゃん『蓮～』って」
「……」
挙手して言うような事？　って疑問に思ったのは置いとくよ……。
だって　大草の指摘は実に的確だから。
気を付けるよ～　と何度か西野は言ってたのは事実なんだけど……　時折素の自分がでて？　か判んないけど　ちょくちょく名で呼ぶ事があったりする。それって、西野と付き合う前の話だし、オレも結構気になってたんだけど……。
「そ、それもそーかなぁー。あっはは……、ごめーんっ　蓮！」
両手を合わせて合掌！　させる西野。
まぁ　今は別にもう良いんだけど。ここの面子なら　多分大丈夫だ。小宮山は兎も角。

「ははっはは。ま、神谷なら嫌がるだろうなぁー。よーくわかる」
「うっさいな」
「睨むな睨むな。と言う訳で　オレの意見は終わり！　さー　勉強しようぜ。オレ　推薦で泉坂受かってるから勉強する必要ないし。判らんトコとかあったら遠慮なく聞いてくれ」
　そう。大草ってサッカー上手いから、スポーツ推薦でさっさと合格したんだ。
　勿論、スポーツだけって訳じゃない。クラスでは成績は上位をキープしているし、実力で泉坂高校に受かるくらい訳ないってオレは思ってる。
「え！　推薦で泉坂決まってんの??　すっごいじゃん！　あたしもそこなんだー！」
「いやいや。まぁ　大したこと、あるけどね？」
「えー、じゃあ　少しだけ教えてもらおっかなぁー　キミにも！」
　思った以上に西野が喰いついてくから、正直なんか複雑だった。
　なんか……　改めて　大草を見てみると……、得体のしれない不安と言うか、圧力というか　色んな感情が渦巻いてきたよ。校内一のイケメンと名高い男だし。（オレの事は知らん）西野と並んでも……全然おかしくない。自然だ。
「おー、それによく見てみると　大草くんが使ってる文房具、あたしが持ってる文房具とほとんど一緒じゃん！」
「お？　そうなんだ……って、マジだな。オレこのシリーズ好きなんだよね。ちょっとサイケなカンジがよくない？」
「そうそう！　あたしもそーゆーところが好きで買っちゃうんだ～～～」
　なんか西野と大草の２人、自然と話が盛り上がっていったよ。
　うん。……見てると、ナンカヤダ。
　ガキか!!　って思われるかもしれないが、……イヤダ。
「男子でこの文房具使ってる人、初めてみたなぁ～～……って、蓮？　どーしたの??」
「……いや、別に何でもないゾ」

いつの間にか、オレって西野の方をガン見してたらしい。
それに西野が気付いたらしく、首を傾げてた。
「(……って、神谷　ヤキモチか？　おおー　珍しい絵が見れて面白いかも!?)」
なんか、大草の顔が嫌な顔に一瞬見えた気がしたよ。
「なぁー　西野ってすっげーモてるじゃん？　やっぱさぁ、告られるのとか待ってんの？」
「何それ、何言ってんの？」
「ほらほら、例えばさ。今までの関係とか　ぜーんぶ一度リセットして考えてみてみ？　その前提で　西野に好きな男子が出来て、そいつが告白してくるまでずっと待つタイプだろ？　当たり??」
さっきから、大草何言ってんだ？　小宮山を止める為！　とか言ってた癖に　……実は西野の事狙ってるのか？
確かに……　告白はオレからじゃなかったよ。西野からだった。
だからかな。大草が言ったのを聞いて　西野は本当は相手から……オレから告白をしてほしかったのかな。　順番なんてもう、取り返しが効かない事だけど……。何だか西野に申し訳ない、って気持ちが出てきた時だったよ。
「だから、何言ってんのって。あたし、好きな人には　自分からガンガンだよ？　攻めて攻めて！　攻めあるのみ！　攻撃あるのみ！」
きっぱり　否定してそう言ってたんだ。
何だか頭の中に靄が出てたんだけど……晴れた気分だった。
「……」
「って言うかさぁー。蓮が否定してよねーそこはっ！　蓮は気付いてないの？　あたし、結構蓮に会いに行ってたんだよ？　あたしからさ！」
「ま、まぁ　知ってたと言えば知ってたヨ？」
「ならなーんで否定しないのさっ!?　あー後大草くん？　リセット～なんてもー無理だからね？　設定でもムリっ！」
「……っはは。だろうな」
大草、なんか両手上げてたよ軽く。降参って感じか？

「いや、西野が来たら　一番印象にあるのは　《参勤交代現象》だから。そっちに行っちゃうよ。意識」
「も、も～～!!　あ、あれは勝手についてくるんだよ！　何度も言ってるだろっ!?」
　西野、腕回してオレの首へッドロックしてきた。
　なーんか柔らかい感触が頬にあるんだけど……。
「ろ、ロープロープ!!　く、首締まってる……っ」
　こんな皆の目の前でこのままずっといるなんて無理だから　そうそうにタップしたよ。また　小宮山辺りが暴走しそうだ……し？
「あはははは！　小宮山くんっておもしろーーい！」
「ホント？　ホント??　似てる？　これタコの真似。あとゴリラの真似も得意だし――――っ！」
　いつの間にか　西野の方より東城の方に行ってたよ。自分の持ちネタを披露して笑いを誘ってたみたい。メチャ東城受けてる。
　それで、真中は何かぼーっとしてる。落ち込んでるみたい？
　皆の視線をあまり感じないのは好都合だけど、このまま遊んでたら勉強会の意味無いし。
「に、にしのっ　ギブギブっ！」
「むー！　反省したか??」
「したした！」
「よし、なら許すっ！」
　漸く解放されたよ。
「ふぅ……きつかった（色んな意味で……／／）　で、真中は何黄昏てんの？」
「……」
「もしもし？」
「おっ!?　わ、わりぃわりぃ……。別に何でもないって」
「何でもないって顔じゃ無いケド……　まぁ良いか。それに　小宮山。遊んでないで　勉強しろっての。何処狙ってるのか知らんけど　合格圏内入れてるのか？」
　ウホウホ言って煩い小宮山。正直今の今までオレや西野も十分う

るさかったと思うケド……　まぁそれはそれ、これはこれだ。

「う、うっせーーっ！　オレはヤル時はヤル男だ！　勉強くらいお茶の子さいさいだ！」

「問①　次の連立方程式を求めよ。ｘ＋ｙ　＝　３　…①　２ｘ＋５ｙ　＝　９　…②」

「……」

ダメだこりゃ。

３０話

「蓮って結構スパルタなんだねー？　ちょっとイメージが変わっちゃったかもだよ？」
「ん？　そうか？」
　朝の勉強会が終わった。
　当然だけど次は学校が始まる。

　それで今は保健室からの帰り道で　西野と軽く話してたんだ。
……なんで　保健室？　って思うかもしれんが、まぁ　色々あったんだよ。主に小宮山が原因だけど。
「えー、だってほら。小宮山君に教える時凄かったじゃん。『そんなんじゃ　どこにも行けねーぞー！』とか『お前、一体この中学３年間なにやってたんだー！』とか。それでねー、あたし、竹刀みえたよ？　蓮が持ってる様に見えた！」
「あー……　ま、まぁ　だって　あの後も小宮山脱線しそうだったし？　あいつら　奇遇とか言って、勉強やりに来てたはずなのに、身が入ってない感じで……。……それに、西野だって思わなかったか？　ぶっちゃけ。　あの連立方程式の問題とか、基礎中の基礎だろ？　アレわかんないで泉坂狙ってる～とか……」
「あ、あー　それは数学嫌いな流石のあたしでも　ちょっとヤバイって思っちゃったかなぁ……」
　西野も引き攣った笑みを浮かべだしたよ。
　だって、ショウガナイって言えないし。小宮山は元々得意な教科も無いっぽいし。多少は荒っぽくやらないと　スイッチ入らないだろーなー、って思ったからだし。
「ほらな。オレ甘やかすのはあまり好きじゃないから」
「ふーん。……蓮って　甘やかすの嫌いっていうケド、やっぱ優しいよね」
「ん??　優しい？」

「だってさ。例え仲の良い友達だったとしても、あそこまで真剣になって教えるのってなかなかできないって思うんだー。ちょっとスパルタ気味だったけど小宮山君、ちゃんと聞いてたじゃん？　それも蓮のこと信頼してるからだと思うよ。なーんにも思わない人からだったら、訊かないって。寧ろキツくされたら逃げるよ」
あはは、と笑いながら　オレの事を褒めてくれる西野。
……それにやっぱ顔近いって。褒められた事も合わせて高威力だから　顔が赤くなりそうだよ。
「ま、まぁ……　ここに転校してきて　最初はやっぱ結構壁作ってるって　自分でも意識してたんだ……、そんな中であいつらぐらいだったから、かな。結構グイグイ来てた……、その、来てくれてた？　のは。おかげで結構クラスに打ち解けるの早くなったって思ってるし。……ぁ～～」
オレ、何か恥ずかしい事言ったよ。ゼッタイ。
「西野……『来てくれた』ってトコ、忘れてくれ。……あいつらに言わないでくれ」
「へへ～　やーっぱ蓮は恥ずかしがり屋さんだね～。皆の事好きなんだー　って言っちゃえば　この際スッキリするかもよ？」
「ゼッタイヤダ。……それにだ」
オレは、周囲をちょっと確認したよ。廊下には　殆ど誰もいなかった。それをちゃんと確認したところで、ちょっと西野に踏み込んだ。
「その単語。……使う相手は　今の所オレの横にいる人にしか使いたくないから」
「へ……？　……ぁっ／／／」
西野、最初は判んないって感じだったけど　ちゃんとわかってくれたみたいだ。
「え、えへへ……／／／　あたしも……だよ？　大好きだからねー」
そっと西野はオレの腕を取って、肩に頭を乗せた。
仄かに感じる甘い香り。西野の香り。……うん。健全な中学生にはやっぱり刺激は強いよ。暴走しちゃう！　とまでは言わないけど……。

だってほら、ここは学校だ。そんな事した日には一体どーなってしまうのか、って思うし。
「んっ　よーし！　蓮分をしっかり堪能したし！　あたし、こっちだから行くねー」
「なんだよ、オレ分って……。　おう。またな」
西野は2組。オレは4組。
今更だけど、同じクラスだったら良かったってやっぱり思うよな。
「……高校では同じクラスになりたいね」
「！　……はは。だな」
どうやら西野も同じだったみたいだ。恥ずかしく言えば通じ合ってるみたいで　ちょっとくすぐったい。　さっきの腕組、肩乗せでもそうだけど、オレも結構西野分を貰えた。
西野が2組の方へと向かったのを見送った後。
「さてと。今日も1日頑張りますか」
気合を入れて教室に向かった。

と言う訳で、教室の中。
真中と大草は先についてたみたいだ。
「悪いな2人とも。なんか面倒押し付けたみたいで。……アイツ、大丈夫だったか？」
「いやいや。オレちょっと神谷で遊んじゃったし、良いってそれ位。小宮山だけど、興奮しっぱなしで、全然鼻血止まってなかったよ」
「オレで遊ぶってなんだそれ？　……ま、それは置いといて、小宮山には刺激が強過ぎだんだろうよ。（多分、小宮山に限ってじゃないと思うけど……　あそこまではいかないかな）」
「朝っぱらから奇怪だよなぁ、アイツは……」
ちょこっと話すと　小宮山の勉強を東城も見てくれてたんだ。

それで　勉強中にちょっと手が消しゴムに当たって小宮山の方に転がって　それを取ろうと近づいた東城と小宮山が当たった。
……うん。口に出しては言わないが、東城って、その……かなり大きい。アレだけ近付いたら、やっぱ　むにゅっ　と当たったみたいなんだ小宮山に。
その瞬間、まるでクジラの潮吹きみたいで鼻血だしてぶっ倒れた。

保健室までは一緒だったけど、先に女子の2人を上がらせて、それで　大草が気を利かせたみたいで、オレも一緒に西野と帰らせた。それがお礼の部分だ。
あ、その話とは別にちょっと気になるトコが出来た。
「ん？　真中どうした？　さっきからなんかぼーっとしてないか？」
「……んあ？　なんだ？」
「いや、オレが聞いたんだけど……。まぁ　別に良いけど」

ここでちゃんと注意してたら良かったかも、って少しばかり後悔したよ。

この後の移動教室とかで、真中　ふらふらしてたみたいでさ。色んなトコにぶつかりそうになってんだ。それで　とうとうぶつかって倒れたから。

「東城ってオレのこと好きかな――――って！」
「どわぁっ!!」

ぶつかった相手は復活した小宮山だ。あー　でも小宮山雑誌見ながら歩いてたから、どっちが悪いか、って言えば小宮山の方かも。
「なんだよ　ボーっとして人の前歩いてんじゃねーよ！」
「てめーだって本読みながら歩いといて何言ってんだ！」
「真中の言い分に賛成、って言いたいケド、なんか変だぞ真中。ぼーっとしてるのって　朝からずっとじゃないか？」
「やーいやーい！　つまり真中が悪い～～」
「んで、小宮山は調子に乗んな。そんな雑誌見てそっちの勉強する暇あったら、数学の教本みて　勉強しろ。一番数学が悲惨だろ？」
「うるっせー！　つかさちゃんがいる神谷にはわかんねぇんだよ！　オレの気持ちが！　オレは今分析中なんだよ！　東城がオレのこと、本当は好きなんじゃねぇかってことをよぉ！」
何か突拍子もないこと言い出した。
これって多分朝の勉強会での出来事のことを言ってるんだと思うけど……　んな訳無いだろ。東城はきっと真中に惹かれてるって思うし。
「はぁ？　ってか　んだそれ！『女のコにモテる５０のコツ』!?　なんか恥ずかしいぞ　お前！」
「邪魔くせぇな！　なんなら見せてやっから落ち着けよ！　あ、神谷はダメだからな!!　モテ男は禁止だ！　き・ん・し!!」
「あー別に良いよ。寧ろそっちの方がありがたい。今お前らに混ざりたくない……ってのが本音だからなぁ。色んな意味で目立ちすぎだろ」
真中が大声で雑誌の中身を暴露しなけりゃ　まだ良かったのに。
「だぁぁぁぁ!!　てめぇは良いよなぁぁぁぁ!!!　なーーーんせ、あのつかｓ「デカい顔と声で何度も言うな！」ぶげっ!!」
また、顔でかく変化させて（妖怪化？）迫ってくる小宮山にカウンターで肘打ちを見舞った。もう周囲にはバレてるの判ってるけど、それでも口に出して言われるのは……、それも大声で言われるのは嫌だ。
「ふんっだ！　もー良ーよ！　ほら　行こうぜー！　なー真中っ!!」

「そのセリフ……　お前が言うと　正直メチャ気持ち悪いぞ」
「うっせー！」
　と言う訳で、２人は仲良く？　一緒に席に戻ってったよ。
　オレは禁止令出されたから、自分の席に戻ったけど。
「どうしたんだ？　あれ」
「ん？　ああ、大草。なんでも小宮山が分析したいんだと。その本だって」
「分析？　……って、ぜーったい女子関係だろ？」
「言うまでもないだろ。んなもん。この大事な時期だってのに余裕があって、ほんと凄いよある意味」
　はぁぁ、と深いため息が出た。西野はオレの事優しいって言ってくれてたけど……、やっぱあんま小宮山には優しくしたくないって思う今日この頃だ。つけあがるし。
　真剣になれるのが凄い……か。まぁ　腐れ縁だからって事で納得しとこうか。
「んじゃ、行ってみようぜ？　神谷」
「……は？」
「ほれ、あいつらんトコだよ。そっちのアドバイス、出来るだろ？　神谷なら」
「いやいや、出来ないって。んなもん知ってるだろ？　……あぁ、大草関係での断り方なら教えれると思うケド」
「確かにそれは得意そうだよなー」
「別に得意になりたかった訳じゃないけどな！」
　大草は人間磁石（女性限定）だからな。
「んじゃ、行ってみようぜ？　神谷」
「……まーったく同じセリフ繰り返し言うなよ。オレ行かねぇって」
「面白そーじゃん！　それにあの手の本にはさ。付き合いだしたころの心得とか載ってると思うぜ？　チラ見しといて損はないと思うけどなぁ」
「……」
　付き合いだして、か……。正直　オレは得意じゃないから。範疇外

の事だったから……、自信無いのは事実だし……。でも　ここで乗ったら大草にまた色々弄られそうだし……、どうするのが　一番だ？
「つー訳で　行ってみよう！」
「……はぁ」
　言われるがまま　一緒に行ったよ。多分、いや　間違いなく小宮山にはいろいろ言われそうだけど、まぁ　別に良いか。大草に無理矢理って言えば。……揺らいだのは事実だケド。

　それでちょこっと近付いただけで直ぐに何話してるのか判った。だって2人とも声メチャデカいから。特に小宮山がだけど　真中も何気に負けてない。
　なんでも『今朝東城が勉強に誘ってくれた』から始まり『わざと消しゴムを落として、わざとオレに胸をすりよせてきた』とか何とか。
　前半部分は　まぁ、判るけど　後半部分は何言ってんの？　って感じだ。東城はその辺はちょっと疎いっぽいし、うっかり者、ドジっ子な所もあるから　アレは天然だと思うってのがオレの意見だな。
「いやいや、別にそれ　わざとじゃないんじゃ……」
「わざとなの!!　だからこの本でいくと東城はオレに気がある!!　ってワケよ！」
「ええっと、なになに　『髪の毛をいじると欲求不満』？　うさんくさ～～～っ　そんな本、頼りにすんなよなぁ。なぁ？　神谷」
「オレに振るな。人それぞれだから　本が売られてんだろ」
　しれっと後ろから声をかける大草。それとオレ……は声かけてないけど一緒に来たから一緒かも。
「コラァァぁ!!　神谷禁止！　って言っただろーが！　金払え!!」
「何で金なんだよ。大草に連れられて、だ。それ以外に理由は無い」
　……ちょっと興味が出たって言うのは　やっぱり秘密だ。あんまり言いたくないし。
「良いじゃん。神谷の意見だって重要で貴重だって思うぜ？　何せ学園のアイドルをオとした男だからな。大いに利用しちゃえって小宮山」

「うぐぐぐ……。うぐぅうう……」
「へ、へんな風に言うな大草！　それに、呻くな！」
「つー訳でだ。おまえらが誰の事調べてるか、知らねーけど、自分のこと好きかどうかなんてすぐにわかるじゃん」
「ええ!?　それ、一体どーやって!?」
「……直ぐ復活したな」
　大草の話だから、大分説得力があるらしいよ。呻いてた小宮山は、一瞬の内に起き上がったし。　んで、何か知らんケド　大草はオレの肩に腕回してきた。
「な？　神谷！」
「だから同調させようとするなっての！　オレ達思考回路一緒～　ってワケじゃないんだぞ！」
「良いから教えろよー！　大草！」
「そーだそーだ!!」
　お預け喰らった腹空かせた犬みたいになってるよ2人とも。
「……大草。さっさと餌ヤレ」
「へーへー。簡単な事だろ？　相手の目を見て3秒見つめて、赤くなって目を逸らせたらホレてる」
「そ、そんなのどんな女子だってそうなるだろ!?」
「まあ　確かにオレが見つめたら大抵の女子は赤くなるけどね？」
「あのなぁ!!　嫌味か！」
　そりゃ　間違いないな。大草の言う通り。今ちらっと後ろの方とか見たけど、遠巻きに大草の事見てるコ多いし。でも、ちょっとそこには異議ありだ。
「ん……　でもさ、西野は違うぞ大草」
「ん？　そうなのか？」
「ああ。西野の場合　目見たら見つめ返してきたし」
　以前もそんな事あったから。『なになに～？』って興味津々にさ。
「……」
「あーー、悪かった悪かった。だから無言の殺気止めろ」
　小宮山は恨めしそうに見てきたから、これ以上言わない事にする

よ。
「ま、西野は他の女子とはちょ～～っと違うトコがあるっておもうし、参考にするのにはなぁ……？　でも一度は試す価値はあるって思うぜ？　ほれ、神谷の場合でも見つめ合う事が出来てるんだしさ。それで　真中は　東城の気持ちを知りたいんだろ？　善は急げだ」
「っ……」
「なにぃっ!?」
　真中と東城だったらもう確認するまでもない、ってオレは勝手に思ってるんだけどな。
　なんか、小宮山がうるさくなったけど。
「んじゃ、頑張れよー。オレは席に戻るからな」
「そろそろ時間か。オレも戻るわ」
「こ、こらぁ！　お前らー！　小宮山止めてくれよ！」
「何で真中なんだよぉぉぉぉぉ!!!!　つ、つかさちゃんに続いて東城までぇぇぇぇ!!」
　こんな感じだから。全部真中に任せてオレは振り返らずに戻った。

　と、言う訳でもうあっという間に下校時刻。
　西野と一緒に帰るトコ。
「あはははは～！　それでなんか騒がしかったんだねー、４組の方」
「まぁな。ほんっと騒がしいなんてもんじゃないな。同じ組にいたらさ」
「楽しそうじゃん？　それで　東城さんと真中くんはどうだったの？」
「ああ。つまり……。お互い顔逸らせた」
「あはははは っ！　初心ってヤツだね～～？」
　西野はほんと面白そうに笑ってるよ。オレらも偉そうに言える程実績と言うか時間を掛けた訳じゃないんだけどな……。
「ほら西野。電柱に当たるって」
「あはははは　おーっとっとー。ありがと。蓮っ　あ、そうだ！　ねぇ　これからヒマかな？」

「ん？　ヒマー　かな。帰ったら受験勉強するくらいか。……あぁ後は姉の世話？　いや　今日はいないから大丈夫か」
「おおっ　丁度良かった！　受験勉強だよ。よかったら今日あたしん家で一緒にやろうよ。ねっ　ねっ!?」
「……え？」
「明日学校休みでしょ？　ひとりで勉強してもすぐにサボっちゃうんだよね、あたし。……それにさ。蓮をちゃんと家に招待したかったんだ。前回はその……　アレだったし。ダメ、かな？」
　両手をもじもじさせながら言ってる。それも上目遣い。
「ははは……。断らないって。大丈夫だ」
「えへへへ～。そうと決まったらさ！　家に電話して！　夕飯も用意するから食べてってねー」
　前回は確かに西野の言う通り……　あまり良い訪問だった、とは言えないって思う。
　それに、西野のお母さんもまた　オレと話をしたい、って言ってくれてるらしいし……。ちょっと緊張するケド、アレだけはっきり『お付き合いさせてもらってます』って言ったんだし。
　それ位しっかり覚悟決めとかないとだな。

　ああ――――　この時は思ってもいなかったんだよ。

　色んな意味で大変な事になる何てことは……。

31話

「……初めてじゃないけど　やっぱ緊張するな」
「へ？　今　蓮　緊張してたの？　というかそんなのするの？　だって前とか、テンパっちゃってるのあたしだけだったじゃん」
「いやいやいや、オレだって緊張くらいするわ。女の子の家に1人だけで来るのって考えてみれば西野が初めてだし。……ん　前の時、上手くオレ謝罪とかできてたのかなぁ……？」
「あははっ！　そーんなに気を張り詰める必要なんかないよっ！　だって、蓮とあたしの仲じゃん？　あたしの……彼氏、でしょ？　だから　軽くいこうっ！　寛いでいってよー（と言うより　上手く出来過ぎて……じゃなく完璧過ぎて逆にお母さんちょっと引いてたよーな気がするけどな……）」

という訳で今西野の家の前に丁度ついた所だ。
以前は　帰るのが遅くなってしまった事や西野自身が危ない目に遭っていた事とかが重なって、本当に申し訳ない気持ちになって、西野のお母さんに謝った。あの場は許してくれた……と思うんだけど、オレとしては　やっぱり不安は残る。
でも、話を聞けば　オレが西野の事を助ける場面を見ていた人（コンビニの店員さん）から話が伝わったらしく……　好印象抜群！　と西野がドヤ顔で笑っていたから　少しだけ安堵出来たんだけど、やっぱり難しいかな？　平常心。
「（でも、どきどきしてくれるのは　嬉しいかも？　蓮ってとってもクールだし）　はい、どーぞ！」
「ん……。お邪魔します」
がらっと扉を開けて入った先には誰もいなかった。別に出迎えてくれる～　とかは考えてないけど、ちょっと出鼻くじかれた気分だ。
「ほら、いいからいいから。止まらないであがって！　あ、スリッパ適当に使って良いからさ！　あたしの部屋いこっ！」

「……にしのの部屋？」
「そっ」
　そりゃ　西野の家に来たんだから　お呼ばれしたんだから　全然可能性無いってわけじゃないけど、やっぱりドキドキするな。
「あ、なーに蓮？　あたしの部屋が汚さそうだー！　とか想像してる??」
「……いや、なんでそうなる？」
「だーって蓮、難しそうな顔してるんだもん！　考え込む時そーいう顔してるし！　誤解しないでよね！　あたし　部屋いつもきれいに片付けてるもんっ！」
「……大丈夫大丈夫。西野の事ならしっかり見てるし、部屋汚いとかギャップあり過ぎ。そんな事考えてないって。……まぁ　世の中にはそう言う外見と真逆な感じな人は多数いるけど」
　誰とは言わない。　……そうだ。誰とはぜーーったい言わない。外面パーフェクト。１００点中１２０点だって上げれそうな感じなのに　家に帰ったら　まぁ　大変。な人物の事なんて。
「へへっ　ならよーし！　じゃ、いこっ　こっちこっち」
「ん。お邪魔させてもらうよ」
　階段を上がって部屋を何部屋か横切って到着したのが西野の部屋。
　女の子の部屋ってこういう感じなのかな？　って年頃の男子中学生ならだれでも想像するって思うケド、その印象にピタリだったよ。可愛らしい装飾。それに人形やちょっとした置物だって可愛らしさ抜群だ。
　とある人物に連れられて（勿論、用事があっただけ）入った部屋もこういう感じだったし。
「じゃ、とりあえずベッドに座っててて。あたし準備するからさ！」
「（ベッドに座ってて～　と準備するから～　ってなんかそれこそ誤解を生みそうな発言だと思うんだけど）……ん。ああ、机出すの手伝うよ？」
「いーからいーから。蓮はあたしの家庭教師（かてーきょーし）さんだしねー！　寛いでてよ」

「うん？　オレが家庭教師？」
「あっはは！　良いじゃん。蓮の方が成績良いんだし、教えるのだって上手じゃん」
　小宮山を教える時は　スパルタだ～　と言われてるし、オレが教えるの上手い、って思った事は無いんだけど……　西野の言う事信じてみようか。
「よし。ならビシビシ行くか。……手加減はしないぞ？」
「えへへ。望む所！　頑張るね！」
　にっ　とお互いにウインクした。それはそれでなんか恥ずかしかったからちょっと顔が赤くなったと思うけど、直ぐに西野が取り掛かったから　見られずに済んで良かったよ。
　その後　西野は部屋の隅に立てかけて仕舞われてたお洒落な丸机を引っ張りだした。そんな西野の後ろ姿を見ながらオレは訊いたよ。
「そう言えば　凄く家が静かだったけど、西野のお母さん、家の人はいないのか――？」
　また　話をしてみたい　と言ってくれてたみたいだからさ。オレもちゃんと挨拶したいって思ってる。あの時は　冗談抜きで本当にテンパってたから……あまり覚えてないトコとかあるんだ。
　それで西野の返答待ってて　帰ってきた答えがちょっと予想外だったんだ。
「ん？　明日まであたし以外誰もいないんだー。お母さんは話したい～って言ってたケド　次回に持ち越しだねー」
　西野と西野の家で２人きり。今晩は（宿泊するつもりは無いけど）。
　やっぱりドキッとしてしまったけど　西野と２人きり、と言う場面は多いから大丈夫だったよ。
「仕事か？」
「うん。お母さんもお父さんも出張だってさ。残念だよねー？」
「オレは色んな意味で複雑かもな」
「ん??　あ、蓮もまたお母さんと話してみたかった？」
「あー　それもあるけど……、ほら　緊張してたんだけど　気が抜けたって事もあるし。でも西野とその……家で２人きり、って言うのも

あるから　やっぱり色々思うトコある～って言うかやっぱ緊張はするし。つまり同時に色々あって。気は抜けたケド　やっぱり　なかなかなぁー」
　嘘偽りない心情ってヤツだよ。彼氏彼女の間柄になっても　やっぱり2人きりだったらドキドキするし。西野はやっぱ可愛いからさ……　想像以上の高威力なんだ。色んな仕草が。
「……蓮って、ほんっとポーカーフェイスだね」
　西野は少し黙ってたかと思えば、用意できた後オレの方に来て　そのやわらかな両手でオレの頬を　むにゅっって挟み込んだよ。
「あたしさ、すっごくドキドキしてるんだよー？　蓮をちゃんと家に招待できて、その……あたしの部屋に連れてきて、ふたりっきりでー……って、蓮が言うように色々同時にあってさ！　……ほんとに蓮もドキドキしてくれてるの？」
「……」
　口でそう言っても信じられないよー！　って言われてる気がしたよ。だからさ……、ちょっと強引かもだけど、オレは西野の手をもって　オレの胸辺りに当てた。
「あっ……」
「……わかってくれたか？」
　心臓の鼓動を伝えた。
　今まで　ずっと凄い勢いで鳴ってたから　服の上でも簡単に伝える事は出来るし。西野がオレに触れてくれた瞬間から更に際立ったからさ。
「……えへへ。すっごくドキドキしてくれてるね？」
「そーいうこと。……これ以上ないだろ？」
　ふいっ　と顔を逸らせたよ。やっぱ　照れるし。
　顔逸らせたのがちょっと間違いだったかも。
「れーんっ！」
「おわっっ!!」

西野が背中に抱き着いた……と言うより飛びついてきたから。
「あたしの事も感じてくれる？　……すっごくドキドキしてるのがさ！」
そう聞かれるけど、正直自分自身のと西野のがごっちゃ混ぜになってて判らん。って言うのが正直な感想。
「こらー！　な、なんかいってよー！　あ、あたしだって恥ずかしいんだからね！」
「あーあー！　すげー感じる！　メチャメチャ感じる!!　西野もドキドキしてくれてるってさ!!」
「ほんと？」
「ほんとほんと!!　だ、だから　ちょっとタイムだ！」
理性がヤバイから！　西野は凄く柔らかくて、心地いいケド、何度でも言うオレだって男だ。健全な男!!
でも……　やっぱり　約束だってしてるから。――――健全なお付き合いを、って。
でもさ。健全な男な部分は　なかなか西野は離れてくれないから、約束の『や』の字がうす～～く消していく様な気がした時だったよ。
ピーンポーンッ！　って聞こえたのは。
「……むー。誰か来たみたい？」
西野の身体がオレの背から離れた。ほっとしたのと、名残惜しいのと、……また色々ごっちゃになりそうだな。
「こんな時間なのに、誰だよー」
「……それは確認しないとわからんのじゃないか？　居留守するのは、アレだろ？」
「判ってるよー。（うー……邪魔された気分だよ）しょーがないからちょっと行ってくるね」
「おう」

速足で西野は部屋を出ていった。
これで良かった――と思ったケド　帰ってきた時がまたどうなるのかが判らない。
「大丈夫……かな。たまたま来訪者が来たから　中断しただけだし。まだ……長いんだし。不思議だ。楽しい事、西野と一緒にいる時間はいつも凄く早いのに。何か今の　永久くらいに感じられた気もする……」
オレは暫く悶々としてたけど、気を紛らわせる為に持ってきた教科書、数学の教科書を広げて準備した。

あたしは、ずっとドキドキしてる。
蓮と会う時、蓮と話す時。蓮の事なら何でも。
家に連れてきた時なんかほんっと最高潮だったんだ。　お母さんやお父さんがいない時って　ちょっぴり狙っちゃった。２人にはちょっと悪いって思ってるけどね。
忘れられない思い出を、沢山作りたかったんだ。
――初めての夜、蓮と一緒に。って。
い、イヤラシイ事考えてなんか……って言えば嘘になるかも……。

だって　蓮に触れるのも、触れられるのも本当に心地良いんだから。考えるだけで凄くドキドキなんだから。
ちょっと　死んじゃうんじゃないっ？　って思っちゃうくらい心臓が暴れてたんだ。
なのに――蓮はいつも通りな表情だった。
口では『緊張』って言葉使ってたけど……　なーんか信じにくいんだよねぇ。
あの男たちをやっつけてくれた時とか、お母さんと会った時とか。ぜーんぶそつなく熟しちゃってるもん。あたしはこんなになのに！
だからちょっとムキになって　蓮の頬をむぎゅっ　って挟んだ。でまかせじゃないのかーほんとなのかー！　って。
それで蓮は論より証拠～って言わんばかりにさ。あたしの手をとって自分の胸に押し当てたんだ。……それでさ凄っごく早かった。蓮の気持ちが伝わってきた。
あたしで蓮がドキドキしてくれてるのがとても嬉しくて、プイっと顔を背ける蓮が可愛くも見えて……　あたしは思わず抱き着いちゃったんだ。
そのまま勉強の事忘れて　この温もりをー……　って思ってたらまさかのタイミングでチャイムが鳴った。ちょっと　怒っても良いって思うんだー。　まぁ　勿論　そんな事しないけどね。
「こぉんばんはぁ～　隣の篠原ですぅ～」
出てみたらお隣のオバサンだったし。
「聞いたわよぉ。つかさちゃん　今晩ひとりでお留守番なんですってね？　お母さまから様子見てやってって頼まれたものだから。……どーお？　何か困ったことなぁい？」
「いえ……　ひ、ひとりでも　やれてますから」
流石に、蓮と一緒～って言うのは　口に出せなかった。はしたない～って思われるかもだし。そんなの嫌だし。
「そーお？　そうよねぇ。もう中学3年生ですもんねぇー。うっふっふ～」

何だか、オバサンの笑みが変わった気がした。
「つかさちゃんには　王子様がいるんでしょ～？　あ～　危なくなったら　私より　王子様を呼ぶかしらぁ？」
「……ほぇ？」
あまりに突然の事だったから、あたし　自分でも変な声が出たって自覚出来たよ……。
「うふふ。私も聞いてるのよぉ。つかさちゃんに見合う殿方だーって。暴漢から身を挺して守ってくれる殿方なんて、今時いないわよぉ？　今度、私にも紹介してもらいたいわ～」
「あ、あー　いやー　はい」
……生返事しちゃった。
蓮のこと……　近所に伝わってる～って話はお母さんから聞いたけど。実際に聞いたらほんと実感するよ。

その後は暫く　蓮の話とか　最近この辺りには下着ドロボーが出る～とか聞かされた。話が長く感じたのは言うまでもないよね……。心配してくれてるみたいだし、注意するように言ってくれてるから邪見には出来ないケドさ。

「う～……　やっぱなんか疲れんのよねぇ、あのオバサンって……」
喋り方とか何処のマダム？　って感じだしさ。蓮の事色々と言われても恥ずかしくなったり、照れたりしなかったのは　それ以上に話すのが疲れるから、だよね？　うん。間違いなく。
なーんだか　色々と挫かれちゃった上に戻ってみたら蓮は勉強の準備進めてくれてて……。
仕方ない……よね。でも……。

「（まっ……。夜はまだまだ長いもんね♪）」
「ん？　何かわからないトコでもあったか？」

「やっ。まだ大丈夫だよ。ここ終わったらご飯にするから！　ラストスパート、頑張るねー」

32話

「さっ　蓮は座っててー。勉強みてくれたお礼にって事で　ごはん作ってあげるからさっ」
「ん。ありがとな、西野」
「お礼はあたしの方だよー。だってすっごい充実した勉強時間だったよ？　あたし1人じゃこんなに集中できないって判りきってるしさ」

とりあえず、2人の勉強会は終わった。
その後は、それなりに時間も遅かったから　最初の約束通り西野が夕食を振る舞ってくれるとの事だ。後ろから見てても凄く良く似合う西野のエプロン姿。それだけで何だかお腹いっぱい！　って感じるのは、きっと今が凄く幸せだからだって思う。
好きになった人が振る舞ってくれる手料理。その気持ちだけでも嬉しいし、何より凄く美味しいって思うから。

――って、オレは思ってたんだ。本当の本当に。西野の料理の内容を訊くまでは……な。

「ところで何を作ってくれる？　出来た時のお楽しみ……てヤツかな？」
「ん？　あー　それも良いかもだけど、それは次回、そうしてみようかな？　今作ってるのは　イタリアントマトとチキンの地中海風リゾット仕立てのオムレットデミグラソースがけってとこかな？」
「……うん？」
料理に関して。他人と比べたりするのは正直嫌いだけど　食べてきた種類に関しては他の家の人より断然上だと思う。姉貴が何処ぞの国の料理～　とか振る舞ってくれたりしたし、母さんも珍しくて高級な素材を頂いて～　って事で腕を振るって色んな料理を作ってくれたから。舌が肥えてる、グルメだ。……とまではいかないけど、そ

れなりには判るつもりだった。
でも、西野のメニューを訊いて、何度も頭の中でリピートして……
浮かび上がったのは『結局何？』って事だったよ。
直接訊こう、と思ったんだけど　西野は下拵えに入ったみたいだから止めた。包丁つかってるし　止めるのも危ない気がするから。
「えーと、玉ねぎはみじん切りで……だね」
まだまだぎこちなさがよく判るリズムの刻み方だったケド、一生懸命してる　って言うのは凄く伝わった。
うん。凄く伝わったんだけど……　次の言葉は訊きたくなかったかな。
「で、スープの隠し味に――――チョコレートとマヨネーズとお酢を少々」
一体何を作ろうとしているのだろうか。
お菓子作り？　いやいや　マヨネーズと酢の組み合わせが来てるし、それに夕食作りって言ってたんだし……。
「ん～　もっともっとパンチが欲しいから、味醂とお酒、あっ　あとはバニラかな？　甘酸っぱさが仄かに残って味が素敵になりそう！　後はワサビもイケるかな？」
……うん。続けざまに連続攻撃が頭の中に叩きこまれた。
そのおかげで想像の範疇を超えちゃったよ。
その味を想像出来た西野はきっと一周まわって　ある意味　有能なんだって　なんでか思った。
何でオレ、止めなかったんだろうね……。多分　途中から考えに考えすぎてたんだろうなぁ。
「えへへ。下拵え完成っと。どうかな？　味見してみる??」

おたまを持って　にこっ　と笑って『先に飲んでみて♪』　凄く笑顔が眩しいって思ったよ。
純粋にオレに御馳走してあげたいって気持ちは痛いくらい伝わってくるよ。うんその綺麗な笑顔見てたらさ。
でもな。確かに未知数な味。未確認生物……じゃなく、未確認料理なんだよ。

いや待てよ……？　ここは冒険してみるのも面白いかもなぁ……って、な訳あるか！

「あ、あー　西野？　一緒に味見してみない？　ほ、ほら　オレもスプーン借りて……　あーんっ」
「ふぇっ!?」

なんか西野は自分に来るとは思ってなかったみたいで、ちょっと驚いていたみたいだけど……　でも　最後は　いつもの笑顔が待ってた。

「わ、それも良いかもねー！　じゃ、一緒にやろっ！　あーん……」
「あ、あーーん……」
「あむっ!!　……」

『ザ・ワー○ド！　時よ　○まれぇぇぇぃ！』

と、頭の中で声がした気がする。

「んっ、んっっ!!　んーーーーーーっっっっっ!!!」

最初に動く事が出来たのは西野の方だったよ。

スプーンじゃなく、おたまを放り投げる勢いで離して　両手をバタバタさせてた。

「み、みずっっ！　みずぅぅぅぅ!!!」

「……」

オレは無言で西野にコップ一杯の水を渡した。

思い切りそれをぐいっ！　と飲み干した西野は、……うん。一杯の水じゃ足りないみたいだ。水いっぱい！　欲しい、と言う感じ？　蛇口を思いっきり捻って　ダイレクトで口の中に入れてた。いやぁ豪快な飲みっぷりですなぁ、はい。

「け、けほっ　けほっ……。な、なんで!?　そ、そーぞーしてたのと全然ちがうっ！　パンチが効く所じゃないっ　も、悶絶だよぉ……れ、れん～～　……って　あ、ご、ごめんっ！　ま、まさかこんな味になるなんて……　って、蓮っ!?」

「ん……？　どーした……？」

「そ、それはあたしのセリフっ！　あたしの方が沢山入れてたし、まさかアレ、全部飲んだのっ!?　だ、大丈夫？　顔が　なんか真っ青と言うか、真っ白？　と言うか　凄い事になってるよぉぉ!!!」

「そーか……？　オレはべつに……、なぁ……？」

「別に、じゃないよー!!　ほ、ほら！　お水飲んでっ!!」

頭の中では　冷静に西野の様子が見れてたオレだけど……　身体は悲鳴を上げてたみたいだね？

今更ながら気付けたオレは　とりあえず西野からお水を御馳走になった。いやぁ　五臓六腑に染みわたる見事なお水だったよ。……ただの水道水とは到底思えないね。今日は。

「れ、蓮……　大丈夫……？」
「あ、あー　大丈夫だ。ほらほら！　ゲンキゲンキ！　ばっちりぐーだ」
「……なんだかいつものテンションじゃない気がするケド……　ごめんね？　あんなの飲ませるなんて……」

西野、メチャクチャ沈んだ。
調味料とか選んでる時　無自覚だったみたいだ。今更ながらよく判ったよ。で、ここで言うべき言葉はオレの中では決まってた。……あ、後テンションがおかしいのも認める。ちょっと舌とか、胃袋とかが　色々とハイになっちゃってるから　それを誤魔化そうとしてるよ、今のオレ。
そんな強烈で忘れられそうにない料理だった。……いうべき事は最初から決まってる。
「いやだってなぁ。西野が初めて振る舞ってくれたスープ、料理だし。そんな謝らなくて良いよ。色々とありがとう。オレの方が沢山貰ってるよ」
「れ、れん～……」
スリスリ～　と頭をオレの胸元に押し付けすり寄ってくる西野は何だか小動物みたいでほんと愛らしいって思うよ。幸せってきっと今を言うんだろうなぁ～　とか恥ずかしい事考えちゃってた時だったな。あの料理の攻撃力を思い出してしまったのはさ。
「……あぁ、でも　これは初回限定生産にして欲しい……かな？」
「も、勿論だよっ!!　ってか　あんなの沢山生産してたらお母さんにも怒られるって！（……料理はちょっと自信があったんだけど、やっぱり1人でするのは初めてだったから、かなぁ……）」
うん。自分の……彼女が頑張って作ってくれたんだ。ま、まぁ　得手不得手ってものだってあるし、西野は頑張り屋だから　きっと進化するさ！　……でも、あの味はマジで初回のみにしてほしいって切に思っちゃったのも事実だったよ。

「あ、後……　今は互いの心配をした方が良いかも……」
「うー……。え？」
　オレも今更なんだって思うんだけど、まぁ　言わないとだ。
　西野もオレも思いっきり濡れてるんだよね。水を飲む時にさ。西野のくれた水があまりにもおいしかったのか、オレも西野に倣って直飲みしたんだよ。水量もそれなりに有ったっぽくて、結構周りに飛び散ったみたいだ。よく見てみると床とかも結構濡れてるし。
「あ……あはははは。いい歳して水遊びした後みたいな恰好……だね？」
「判る気はするが、でも　時期が時期だからな……。風邪でも引いたら大変……っと、そうだ。体操服があったんだった」
　オレは鞄から体操服。つまりジャージの上下を引っ張り出した。
　体育があったんだけど、先生が今日休みだったから自習になったんだ。運が良いのか悪いのか判らんけど、とりあえず着替えはあって良かった。
「西野。トイレ借りて良いか？　ちょっと着替えてくるよ。その間に西野も着替えた方が良い。風邪引いたらシャレにならないだろ？　最近のって結構長引くらしいし」
「うん。あっ、これだけ濡れてたら脱いで洗濯しちゃった方が早いからさ、後で蓮の服貸してね？　一緒に洗っちゃうから。そしたら明日のお昼には乾くと思うし、ちゃんと着て帰れるよね？」
「ああ、それくらい時間があったら余裕で……ん？」
　普通に会話してたんだけど……、なんだろ。なーんか大変な事を訊いた気がするんだが。
「どーしたの？　蓮」
「い、いや……　『アシタのヒルにカワク』ってどういう意味かなぁ、って」
「はい？　そのまんまの意味じゃん。今夜中に乾く訳ないでしょ？　流石に。家に乾燥機なんて無いし」
「……」

気のせい……じゃなかった。
いつの間にか一泊する話になってたんだ。
「え、えっと……？　つまりその……西野の家に泊まる、って事？」
幾らオレでも流石に早速彼女のお家にお泊り～　なんて考えても無かったから、平常心でいられるはずも無かった。今　ゼッタイ顔に出てるって思う。
等の西野はと言うと、手に持ったタオルで顔とか髪とか拭いてこっち見てなかったから判らないかもだけど。
「……うん。そーだね。今日は　徹夜で蓮と……べんきょー会！　しよっかなぁ　ってさ!!」
……うん。声裏返ってる。西野もきっと同じ様な気持ちなんだな、って思った。いや　西野は勇気を出して誘ってくれてるんだって事も、よく判った。
据え膳食わぬは男の恥！
と言えるかもしれないけど、オレ達中学3年生だからな……？
「……じゃ、ビシバシ行こうかな？　その、……夜の部もさ」
「お、おうっ！　望むところだーっ！」
西野はくるっ　と振る返って握り拳を作ってた。顔がやっぱり赤い。……うん。オレと一緒だ。
「と、その前にだ。着替えてくる。西野も着替えた方が良い。風邪引くと大変だ」
「そうだね。うん。このままお風呂に入っちゃうよ。……え、えーと　蓮、れん、れん……も……えっと、いっしょn「ちょっとストップ」むぎゅっ」
さ、流石にやりすぎだ。
「……西野。オレはさ　何処にも行かないから。そーんな急ぎ足にならんでもさ」
「う、うぅん……　あ、あたしとしては頑張ってるんだ。だって、蓮ともっともっと仲良く……。うー　蓮はなんでそんなんだー！　もーっと若者らしくエネルギッシュになれないのかー！」
「ぶっ！」

どんっ！　と両手で顔面に突っ張りされた。西野ってほんと突っ走るよ。一直線に。
「うー……　あたしは、とっても欲張りなんだ。蓮の事、もっともっと……その……」
もじもじしてる　西野を見て　オレが取った行動は1つだ。
自分の方に抱き寄せたよ。自分の胸に抱き寄せた。
「……判る、だろ？　オレだっていっぱいいっぱいだ。でも、西野のお母さんと約束もした。西野の事が大切だから……さ？」
結構強く抱き寄せた。苦しくないかな？　とか思う間もなかったよ。
でも、その甲斐もあって多分さっきよりもずっと伝わったんだって思った。
「ほんと？　ほんとにあたしだけでいてくれる……？　蓮、すっごくモテるから　あたしはずっと心配なんだよ」
「……だから　それを言っちゃあ西野だって同じだって。あのモテ方は異常だし……。大草でもあそこまではならんし。オレの方が心配だ」
「こ、答えになってな――――い！　いよし！　なら　あたしは　ず～～っと蓮だけ！　ここに宣誓するもん！」
抱いた腕の力を弱めると、ビシッ！　と西野は手を上げたよ。眼もぎゅっ　と瞑ってる。
だからさ、オレはもう一度更に踏み込んだ。きっと不意打ち……になるかもだな。
「んっ」
「！」
そっと、西野の唇に……不意打ち。
軽めのヤツを。
「――――誓います……ってな？」

「……っっ／／／　ずるいゾ！　不意打ちなんてっ!!　んっっ!!」

オレは　軽いヤツで済ませたんだけど……　西野はそーはいかなかったみたいだ。

だって　勢いが強過ぎてさ。　お互いの歯がぶつかって結構痛かったから……。

33話

「ふぁぁ……。んん。やっぱ　朝は眠い……」
休みも終わって今日から月曜日、つまり一週間の始まりだ。
日曜日のサザ○さんを見出した辺りから、段々億劫になったりするのが今までだったんだが……　やっぱ今は違うかな。今、学校は楽しい。面倒って思う事はあったりするが、それ以上に気の合ってる奴らもいるし、何よりやっぱり西野かな。
「……（日曜、結構長く感じたな）」
土曜がやっぱりアッと言うまだったからそう思ってしまうんだろうな。
そう、土曜日の夜だった。
最初は冗談の類だって思ってたんだけど……本当に西野の家に泊まった。
流石に同じ部屋って言うのは　やっぱまだ早いって思ってさ、リビングのソファーでも借りて寝ようとしたんだけど、結構強引に西野の部屋に連れてかれたよ。オレって考えが古いのか？　って思い始めた矢先に西野から。
『一緒に寝よーよっ！』
との一言だ。凄く誤解を招きそうな一言を頂いた。
うん。何度だっていってやる。もーいい加減飽きたわ！って言われたってそれでもだ。オレだって男だって事。健全な男子中学生だって事。だからさ、ほんとマジで刺激が強い。冗談だったとしても西野に言われたら強力な会心の一撃だ。
それと西野ほど可愛かったら、やっぱ理性との戦いがメチャクチャ大変だ。最初は　西野に健全な～　とか、親に悪い～　とか言って、まだガキの癖に　精一杯大人ぶって、格好つけか！　って　自分で自分をツッコミそうになったし。いい加減ヘタレってガチで思ったし。この辺もアホな姉を見てきたからなのかなぁ、と何処かで姉のせいにしたりもしてたよ。

そんなオレを見て、笑ってた西野は今度はまじめな顔してた。
『……大丈夫だよ。やっぱりさ私だって、同じ部屋だけじゃなくって、同じベッドでさ、蓮にずーっと引っ付いて寝たいんだケド……。うん、蓮が言う通りまだ中学生だもんね。……まだ、子供だもんね。ん??　子供同士だったら別に問題なかったりする??』
『異性の身体。特別授業とか保健体育の授業受けてる時点でマズイと思いますが』
『もっ、もー！　変に真面目に返さないでよっ！』
なんか男として情けないと言うか、ヘタレと言うか、色々と誰かに言われそうな状況だと思ったよ。
西野はベッドに腰掛けて、オレに言ったんだ。
『で、でもさっ！　約束しよっ？　頑張って頑張って、あたしにはまだまだ難しいかもだけど泉坂高校に受かったら……、そ、その……。ま、まだ蓮は早いって言うかもだけど、私は　確かなモノが欲しいんだ。蓮と結ばれたって言う確かな……も、ものが……。蓮からのご褒美で……』
西野は凄く顔が赤い。やばいくらいに。
でも当然だって思うさ。そもそも女の子の方から言わせちゃうってのもどうかと思う。オレだって西野の事は好きだ。抱きしめて、その先……　初めては西野が良いって思ってるから。
オレはもう一度西野を抱きしめたよ。多分、結構強めに抱きしめた。西野の身体は暖かくて、柔らかくて、それでとても細い。折れてしまいそうだって心配になる程に。でも、オレはぎゅっと抱きしめた。
西野も抱きしめ返してくれて……　それで、その　やっぱ西野が相手だからさ、コレは仕様がないって思うんだ。
『あっ……　ぅ……／／／／　れ、れん……　そ、その当たって……』
『あ、ぅ……オレだって男だから、その、勘弁してくれッ。今日は……準備だってしてないから……ッ』
『ッ……!?』
『西野が頑張って高校に受かったら、って話しただろ。……約束する

から。オレだって、今かなりやばい。ほんと理性が飛びそうになる。西野の事……　襲ってしまいそうになる。でも、それ以上に西野の事が大切だから。だから今日はここまでで……』

『うん……』

その後は、西野は布団を敷いてくれた。

何故だか、ベッドがあるのに西野は2人分の布団を敷いてくれて、隣り合わせ。

横になって向かい合って　最後は手を繋ぎ合った。『眠るまで離さないでね？』と言って西野は笑ってたよ。きっと、オレは今日の日の事一生忘れない。

『『おやすみ』』

眠りに落ちる直前に交わした何気ない挨拶も、西野と沢山触れ合った事も。　約束をした事も。それに勿論、強烈なモノを御馳走してくれた事も。

ありふれたモノなのかもしれないけど、ひとつひとつが色んな意味で大変だった。そんな一日だったから。

んでも、実の所帰ってからがもっと大変だったりする……。

朝帰りしたオレに質問攻め、と言うより尋問をしてくるアホ姉の相手をするのが何よりも。ちゃんと友達の所で勉強会するって親には言ってるから『ナニしにいったのっ！』って大声で訊かんでも判る筈だろうに。『べんきょー』って答えたけど、結構しつこかったよ。

……まぁ　うん。嘘は言ってないし。

はぁ……　やっぱあたし1人じゃ身の入った勉強できないみたいなんだよね。我ながら情けないケド。

朝早く蓮が帰った日曜日。

あの後なーんにも出来なかったもん。ちょっと抜け殻になっちゃったって言うのが正しいかも。勉強しようとはしてたんだけど……気付いたらやっぱり蓮の事考えててさ。入れても入れても頭から抜けちゃってるよ、絶対。

「ふぁぁ……。蓮分が切れちゃったからかなぁ……。日曜日ちっとも勉強捗らなかったし。んんー」

とりあえず、欠伸をひとつ。

うん、今日もすっごく冷える朝だ。いつもなら　寒いのってすごく憂鬱になるんだけど……　あの日の温もりがまだまだ残ってるみたいなんだ。だって、すっごく温かかったから。

「蓮にばったり会ったりしないかなぁ……。なーんてねっ。そんな上手く行く訳ないかな「ふぁぁぁ」って、……へ？　あっ！」

一瞬誰だか判んなかったよ。でも、直ぐに判った。だって見間違える筈ないもん。大好きな彼氏だもん。

「おっはよーっ！　れーんっ！」

「どわぁっ!!」

思いっきり抱きついたよ！　でも、蓮……どわっ！　って何だかなぁー。

「もー、彼女に対する朝のご挨拶が『どわっ！』って　どーかと思うよ！」

「無茶言うなって……。オレ今目つむってたんだぞ？　眠たくて……」

「それでも、なの！　でも、目を瞑っても、眠たくてもちゃーんとあたしの事受け止めてくれたのはＧＯＯＤだよ！　倒れちゃっても良いって思ったのにさ！」
「流石に加減してくれって……。ま、それは兎も角」
　蓮は軽く目を拭った後、あたしの頭に手を置いた。ぽんっ　と一叩きして……ってまた??
「おはよ」
「えへへ……うんっ　おはよっ」
　子供扱い～！　って一瞬だけ思ったけど、何だか気持ちいいんだ。蓮に撫でてもらうのさ。それに今回は不意打ちアタックをしたし、文句言うの無しにしてあげたよ。
「さっ、早く行こっ！　皆待ってるかもだし！」
「だな。真中は兎も角、東城は真面目だし。ん？　そう言えば宿題はやったか？」
「え？　宿題？　４組のと同じのってあったっけ？」
「違う違う。ほら　一昨日出したろ？　教えてもらった成果だすから～って　気合入れてたと思うが」
「……あ」
　かんっぜんに忘れてた……。そう言えばそうだったよ。勉強ばっかりじゃなんだからって、ある程度までいったら宿題って事にして蓮と沢山話したり、失敗したけど料理とか時間に当てはめたかったから……。そ、それに　日曜日はほんっと抜け殻みたいだったし。
「こーら」
「あぅっ」
「今日はその辺も力入れるからな？　証明問題は　配点的にはそこまで無いが、西野の実力だったら覚えておいて損はないって思うし」
「うー、ゴメンね？　蓮せんせー。今日は頑張るから！」
「ん。……まぁ　オレも昨日は　なんか一日ぼーっとしてた気もするし。気持ちは判るよ」
　蓮、そっぽ向いちゃったよ。
　きっとあたしと同じなんだ……って思ったら何だか嬉しくってさ。

そっと後ろから腕を取って組んだよ。
「えへへ。温かい？　良いでしょ？　今の時間帯なら、他の生徒殆どいないからさ……」
「ははは……。オレは湯たんぽ扱いか？」
「そっ！　あたし専用ですっ！　貸出レンタル不可！」

ほんっとに楽しい。朝早くて眠たい筈なのに、一気に飛んじゃった。
あっと言う間に学校。図書室についたよ。あたし達が一番乗りで次に大草君が来た。小宮山君はいなかったよ。初日は一緒に着たし大草君と一緒に～って思ってたんだけど、今日は別々なのかな？
って思ってたら、蓮がため息吐いてた。
「これで来なかったら　三日坊主……　と言うか一日しか続いてないし。どうせ寝坊だろ？」
「アッタリ。流石だなー神谷。オレが迎えに行った時、小宮山まだ寝てたよ」
「はぁぁ～　これで泉坂狙うってんだから、ほんっと良い度胸と言うか図太いと言うか……。っと、後は真中か。アイツもちゃんと来るのか？」
「真中は大丈夫だろ。……何せ、東城がいるんだし」
「それもそっか」
男同士の会話ってヤツだ。通じ合ってるんだねー。うん。これが女の子との会話だったら肘打ちのひとつでもしてやろーって思うケド、大丈夫だったよ。
「それにさー。聞いてくれよ。この土日で泉坂のサッカー部の顧問と話をしたんだけど、いきなり新人メニュー無しのハードトレやれってさぁ」
「そんだけ期待されてるんだろ？　そこは喜ぶトコじゃないのか」
「いやいやいや、オレまだ中坊だぞ？　そこそこ練習はしてるとは言ってもいきなり高校生たちのあの地獄のメニューやらされるって結構ヤバめなんだが!?」

「おお、つまりは2～3年の刺激にもなって一石二鳥だ。ま、頑張れ」
「当て馬かよ!?」
うぅーん……。確かにさー。まだ東城さんも真中くんも来てないとはいえー。まだ始まってないとはいえさー。
「蓮っ！　べんきょーするんだろっ！　重点的にするんだろ？　それに大草くんも！」
「うおっ　っと――ビックリした」
「ははは……（西野の方も独占欲が強いみたいだな。……ちょっと悔しいけど、ほんとお似合いカップルだ）」
目の前に教科書出して、視界遮っちゃったよ。つい……。なーんか、大草君には意味深に笑われちゃうし。あそこまであからさま過ぎちゃったらさ。うぅ　なんか恥ずかしいなぁ。
「判ってる判ってる。もうそろそろ後の2人も来ると思うし……っと、噂をすれば何とやらだ」
がらっ、と扉が開く音がしたと思ったら、真中くんと東城さんが来たみたいだった。うん。これで揃ったね。話題逸らしじゃ無いケド、2人に意識を向けよう！
「おっそーいよ！　先に勉強始めるトコだよー」
「おはよ。一緒に登校とは、羨ましい関係になったもんだなー」
「大草がそれ言うと、上から目線と言うか、嫌味と言うか……」
「ははは。純粋に真中の事おーえんしてるだけだって。小宮山には悪いけど」
「いや、3人が早過ぎなだけな気が……。」
「皆おはよう」
「東条さーん！　いきなりで悪いケドさ！　この証明問題なんだけど、あたしの解き方、合ってるかな？」
「（んん??　なんだ。もう解いてたのか……）んじゃ、最初は西野は東城に教わるか。……ってな訳で、オレと大草で」
話題逸らしは完璧ＯＫ！　あ、蓮が何か悪い事考えてる顔になった。
「真中を集中的に、だな」

「スパルタは勘弁してくれーー！　あんなのは、小宮山だけで良いだろー！　オレメンタル弱いんだから！」
「ビシバシ行こうぜ、神谷！　小宮山もそうだが、真中も泉坂レベルには程遠いし」
「大草うっせーー！」
楽しい楽しい勉強会がスタートしたんだ。
真中君は変な汗凄く出てたけど、あたしから見て上達していってるのがよく判る！　うーん、えらそーには言えないけどさ。やっぱ蓮って教えるのが上手だからって思っちゃった。東城さんも凄く上手だって思うけど、蓮も……ね？
それで、もう学校の時間が始まるからお開きになって、あたしは1つに決意を蓮に伝える事にしたよ。ちょっと……あたしにとっては悔しかった事の1つだしさ。
「ね、蓮。またあたしん家に遊びに来てね？　そしたらさ、次は蓮が唸る料理、作って見せるからさ！」
「……うん。十分唸ったと思うんだが。あれって、初回限定じゃ……？」
「コラっ!!　初回限定版のじゃないよ！　次のは蓮の胃袋がっちりつかんで満足させるって事だよっ！」
「成る程。胃袋を……。んー、でもある意味、掴まれた……　鷲掴みにされた気分だったんだが……」
「こらぁぁっ！　蓮っ！　今ぜーーったい楽しんでるだろー！」
「あー、今のはオレの目から見ても西野と同じ意見だ」
「アレは判る種類のだよな。今の神谷の表情って……」
「あ、あはははは……（羨ましいくらい……楽しそうだよね。私も……真中くんともっと……）」
何だかもっと悔しい気持ちになった！　ぜーったいグゥの音も出ない唸る料理作ってみせる！　って改めて思ったよ。
打倒！　蓮の胃袋っ　だよ!!

「(打倒??) 何か物騒な感じがしたんだけど……。気のせーだよな?」
「ふふんっ! 今に見てろよ、って事! 蓮の表情変えてやるんだから」
「ははは……」

３４話

とりあえず、勉強会も佳境を迎えてる。
もうあまり時間無いし、それも当然なんだと思うさ。世の受験生であれば誰もが通る道だ！　最後まで頑張って頑張り抜いた者がきっと最後に笑える、と臭いセリフを考えてみてた。勿論口には出さないけど。
兎も角、まだ頑張らないといけないのは紛れもなく事実だ。
事実……、なんだけどなぁ……。

「いや、ほんと。やる気あるのか？　小宮山。珍しく朝来てると思ったら……」

大丈夫かコイツ、って思ってしまっても良いと思う。
一応、先生ポジションで大草と一緒に真中や小宮山に教えたりしてる。教えるのって、自分が理解してないと出来ないから、これ結構自分の為になったりもするんだよ。……まぁ、基礎中の基礎部分は流石にアレだけど。
それは兎も角、今日の朝の勉強会。小宮山も来たと思ったら、早速東城にロックオンしたよ。真中と東城が、って話をしてからのアプローチが凄い。その勢いで勉強すりゃいいのに、って思うくらいだ。
「ほらほら、これがゴリラの真似～～っ」
「あ、あはははっ」
それでいて、東城もそれなりに受けてて笑ってるし。東城は全く問題ないんだけど、小宮山は大丈夫なのかなぁ……？
「あはははは……」
「ま、小宮山だしな。でも報われない恋ってのも悲しくなるもんだ……うんうん」
西野も苦笑いしてて、大草は何だか可哀想な人を見る様な目で……
いや違う。楽しそうな感じだ、アレ。

「あー、でも　小宮山が落ちた所で、別にオレには関係ないか。ムキになっても仕様がないし」
　やーめた！　って感じで　オレは小宮山から目を離したら、流石に訊いてたのか、ゴリラ顔のままで更に顔面を大きくさせて迫ってきたよ。
「そりゃ流石に薄情すぎだろーーー!!　オレたち、トモダチじゃんかぁぁ！　一緒に泉坂行こうぜぇぇぇ！」
「顔近いわ！　それに、行きたいならそれに見合った努力しろっての！　それに、そんなに芸磨きたいんなら、佶元養成所でも目指せ！」
　なんだかんだで最終的には、オレが説教するハメになるんだよなぁ。何故か。
「あはははは。やっぱ蓮って面倒見良いよねー。将来は先生、ってのも良いかも？」
「あ、それオレも思った。アイツ教えるの上手いし」
「オレもオレも。くぅ〜　漸く数学が得意になってきた所だ！」
　何か好き勝手言ってくれてる3人。
「勘弁してくれ……。身が持たん。それに　少々聞き捨てならんかな？　真中数学得意になったって？　んじゃ、コレ」
「……うげっ。か、確率の問題はトクイじゃないんだよなぁ……」
「あほ。確率も数学じゃ。ここも重要だっての」
　そんな感じで朝の勉強会は終了した。
　有意義だったかどうかは各々方に任せるよ。

　その日も学校が始まり、一日はあっという間に終わる。
　西野との関係も――うん。良好のままだ。ちょっとスキンシップの勢いが強く感じるけど、あの料理の威力に比べたら断然小さいもんだから大丈夫、って考えてたら、なんか心読まれたのか、ボディに良い感じでパンチ貰ったよ。

そんな感じの毎日だ。基本的に受験勉強優先で合間を西野に当てて。西野も高校に入れたら……って　オレが横にいるのに　あの日の事言ってくれるもんだから、寒い筈なのに、色々と熱かったよ。

そんなこんなで、もう私立高校の入試日前日になったよ。高校は集英高校だ。すべり止めの高校だが、油断せずに万全をきそう、と西野としっかり約束した。

あ、後　もう1つ　厄介な問題を抱えてしまったりもしてるんだ。

それは真中と東城の件。勿論　真中から。

相談があるから～って言われて訊いてみたら、それだった。入試日前日だって言うのに。

「うー、どーやって気持ち、伝えたもんか……。なぁ、どう思う？」

「なぜオレに訊く？　それに勉強の話かと思ってみれば、そっちかよ……。随分と余裕があるな。明日だぞ？」

「うっ……　かー！　良いじゃん良いじゃん！　神谷はどっちも余裕だから判んないんだよー、オレの気持ちっ!!　それに集英なんてよゆーだ!!　ぜってーー受かってやる!!」

「わーったわーーった。声のボリューム落とせって。……まぁ、集英高校に関してはオレも同意見だけど」

何か真中にオレの今までの苦労を一言二言で済まされたのが少々納得いかないが……。うん。勉強の部分は真面目にしてただけだから　何とも思わない。西野の方は、西野と付き合える様になったのは……、正直運が良かった、って解釈してるんだよ。オレ。西野にはオレがモテるって言われてたし、なんか変な声も聴いた気がするけど……　やっぱ自分の事を客観的に見れないんだよなぁ。あんま認めたくないとも言うかも。

って言うか、『オレ、モテるんです』って自覚するのもどうかと思うし。

そー言うので、調子に乗って破滅と言うか、悲惨な事になったイケメン君ってヤツ、姉経由だが結構知ってるし。あまり自覚しない方が

良いって無意識で思ってるのかもしれないかな。
　兎も角、今は真中だ。
「ほれ、小説の話とかで盛り上がってるんだろ？　楽しそうじゃん」
「あ、ああ。それはそうなんだけど……、やっぱ西野と神谷の姿見てると……そのー……」
「（……あ、東城もこんな感じでオレの事見てた気がする）はぁ、似た者同士と言うか何と言うか……。まぁ　兎も角だ。東城が好意的なのって、オレから見てもそう思うし、大草だって言ってただろ？　その辺は自信もって良いんじゃないか？　あんまし無責任な事は言えないけど」
「そっか、そっかな……？　自分から告ったりしないのってプライドが高いから、とかあるのかなぁ――」
「は？　何？　真中ってプライド高いのか？　それで？」
　何か変な事言い出した。プライド高い感じは全くしないし。そっち方面のプライドが高かったら、喜々とあの恋愛参考書みたいなの、小宮山と読んだりしないだろうに。
「ち、違う違う!!　もし、東城がそうオレに対して思っちゃったら　どうしようかなぁーって」
「……だから、東城の方が告りに来てくれって、思ってるのか？　うーん……（あ、いや、俺の時は西野からだったし……）」
「いやいや、やっぱり、ここは男らしく、告白は男からだろ!?　映画とかでもそう言う場面多かったし！」
「……うぐッ」
「ん？　どうした？」
「や、なんでもない」
　あまり男らしくないかもしれない。何せ、最初　自分で　西野に絡んでたあの連中を前にして、西野と付き合ってるって言っておいて、覚えてないし。その上『落ち着いて考えて直してみろ』的な事言ったし……。西野が勇気ふり絞ってくれたのに。
　その後……　そ、そのキス……して返事した気になったんだけど……。やっぱちゃんと言わなきゃダメかな。

それで　真中とのやり取りは終わって気付いたら放課後。
西野と一緒に下校だ。いつも通り。その間もなんかやっぱり考え込んでたよ。
「やー、とうとう明日だね。蓮、大丈夫？　油断してない？」
「……」
「ん？　おーい、れん？」
「……」
しっかりと、返事はしたつもりだ。成り行きかもしれないが、西野のお母さんにも伝えれたし、西野も喜んでくれたし……。でも、はっきりと西野本人に言えたわけじゃないからなぁ。
ってずっと考えてたら、両頬を西野に捕まれた。これは　メチャびっくりするよ、マジで。
「こらーーー」
「うわっっ!?」
「うわっ、じゃないよ！　もう、なにボーっとしてんの？　いっくら蓮が優秀だったとしても、変な凡ミスしてたり、繰り返したりしてたら、判んないんだからね!?　もっとしっかりしてよー。蓮！」
「あ、ああ。悪い……。ちょっと別の事を考えてて……」
「そんなの後後っ！　今は受験に集中、入試に集中！　ほーら、口を大きく開けてーーー、『頑張るぞ!!』って言って、ほらっ！」
ぐに、ぐにっ、とオレの頬を引っ張る様にして開ける西野。
うん……。確かに圧倒的に西野が正しいよ。真中にああ言っといて、オレがこんなんじゃ世話ない。
でも、何を思ったのか――口に出てしまったんだ。
「――先に言わせてごめん。……オレ神谷　蓮は、西野の事が好きです。……大好きです。オレと付き合ってください」
「……へ？」

なんでだろ。今言うタイミングだった？　って自分で思う。でも……言っちゃったものは仕方ないから、西野の返事、待ったよ。
「な、ななな、へ??　入試の話なのに、何言ってるの!?　とゆーより、わ、わたしたち　付き合ってるよね？　つき、あってなかったの??　え……えええ!?」
思った以上に西野混乱してた。
まぁ、間違いなくオレのせいだから、西野の手にそっと自分の手を当てて言ったよ。
「ははは……。いきなりでゴメンな。その、ちょっとこういう系のを相談されてさ、……告白は男からって話も聞いて……。オレ、ちゃんと言えてなかった気がして……」
「……え、えっと」
混乱はなかなか治らない様子だ。入試日前日の会話じゃないし、仕方ない。オレが悪い。って思ってたら、西野の顔が赤くなってるのに気づいたよ。それで笑顔になって言ってくれた。
「ふ、ふふ。ふふふ。うん。こちらこそ喜んで！　私も蓮の事が大好きです」
「っ……。あ、ありがと、な」
もう付き合ってる。お互いが好きだと言っていて、……キス、までしてるんだけど、それでもヤッパリくすぐったかったし、嬉しかったよ。
「いえいえ。でも　なんだか意外だったかなー。蓮ってそう言うの気にしたりするんだ？」
「あー、うん。……オレも戸惑ったりしてるよ、正直。……（絶対　真中のせいだ）」
「ふふっ。そんな感じだよね？　違う蓮の一面が見れてあたしは満足だよっ！　うーーん、明日の入試もこれでチャージ１００％！　合格率も１００％だよー」

油断しないようにー、なんて野暮な事は言わなかったよ。オレからこの流れにしたんだし。　西野は2，3歩前に出てくるりとこっちの方を見た。

「それに　あたしはねー、蓮に告白できて、想いが通じて、それで……き、キスまで出来たんだよ？　それも大好きな人とっ。あれ以上の幸せなんて他にはない、かな？　振り回される蓮も良いかもだけど、あたしは幸せだからね？　結果オーライだから良いじゃん」

「……っ。そう、か。そうかな。うん。オレも嬉しかった。はははは。何かゴメンな？　ちょっと振り回して」

「いーえ、こういうのは大歓迎っ！　あたしもすっごく嬉しい。ま、まぁ　ちょっと恥ずかしいけど……」

今更だけど、キョロキョロと周囲を見渡してたよ。

オレもつられて見た。誰もいなくて良かった。

そして、翌日。オレ達全員、すべり止めの高校を難なく合格。

昨日の事もあって、色々と感慨深まったからかな、皆いるのに、そっと西野に……抱き着いたりは流石にしなかったけど、そっと手を取った。西野も同じ気持ちだったみたいだ。

最高に綺麗な笑顔を向けてくれたから。

３５話

「ふーん。……オレさ、小宮山程は言ってないけど、今日ほど真中の事バカだと思った事は無い。……でもまぁ、最初の頃から薄々感じていた事は間違ってなかったんだなぁ、うんうん」
「ぶぇーーくっしょんっっ!!　しみじみ言うなっ！　妙な感情も込めるな!!　そんな演技できんなら、ぜーーったい俺の作る映画の配役にするからな！」
「なんでそーなるんだ。……そもそも、なんでオレにそっち方面を要求すんの？（歌がどーのこーのって言ってた癖に）」

集英高校への受験も終わって安心感に包まれてた。
難易度的には肩慣らし程度だったんだけど、まぁ所謂一山超えた、って気分だったんだろう。
そんな時に聞いたんだ。真中のアホが２階の窓からダイブしたって。その先が校長の池。そこに向かって２階からダイブしたんだって。
あまりに無茶苦茶な話だったから思わず２回訊いたよ。

なんでも、昼休みの時間に東城が書いてくれた小説読んで、またまた心を射貫かれた！　らしくてさ。その想いを言葉に変えて情熱をこめて　ぶつけようとした（大草談）らしい。

丁度　東城は、西野と勉強の事話してたらしく、そこに真中が抑えきれない欲望？を持って状況もちゃんと把握せずに窓からダイブ。それも２階の窓からだ。……まぁ　怪我しなくて良かったとだけは思うよ。馬鹿は風引かない～　って聞いた事あるけど、怪我はするだろうし。
兎も角、西野と東城に引っ張られながらそのまま保健室に直行。

でも幾ら私立の試験が終わったと言っても本命は泉坂だって事忘れてんじゃないか？　コイツって。って素で思ったよ。割と真面目に。
「本当にびっくりしたんだよ？　だって　突然　真中君が上から降ってきたから……」
「はは、まぁそりゃそうだ。でもアレだな。今度は真中が～　だ。上から降ってくる、なんて状況になるなんて滅多にない事だろうし」
「あ、あぅぅ……　わ、忘れてくれると嬉しいなぁ……神谷君」
ふと思い出したのは、東城と初めて出会った屋上での事だ。上手く助けられた、と思ってたのに、東城は落下してしまい、真中がそれを目撃した。……東城の見なくても良い所も見たらしいが　それはそれだ。オレは見てないし。
「とりあえず、だ。もう本命高校の受験日近いんだから。今はそっちに集中しろって」
オレは真中の机に　どんっ、と『わかりやすい高校入試対策』って言う参考書を置いた。
今更　勉強したって～、と思いがちだが　ボーダーラインも妖しい真中や小宮山は最後の最後まで無理にでも詰め込んだ方がまだ良い。身の丈に合ってないって先生たちにも言われるほどの難易度の高校選んだんだし、ちょっとでも足掻け、と思う。
「うげぇ……」
「うげぇ、じゃねーって。東城は真中の事宜しく。ああ、後ついでに大草は小宮山係で」
オレは東城にバトンタッチ。笑顔で頷いてくれた。
「オレはついでかよ」
「っつーか、俺係ってナンだ!!」
大草と小宮山辺りが煩い。主に小宮山だけだけど、オレはそのまんまの意味　って一言答えた後教室を出た。
実はついさっき携帯が鳴ったんだ。それで見てみたら西野からのメールだった。
呼び出しを受けた場所は屋上だから、直ぐに屋上へ。

教室～とかは　元々待ち合わせ場所として除外してる。西野がいたら男子が沸くからだ。……あんまり認めたくないけど、オレがいたら女子がちょこちょこ来るみたいだった。

何でも本当に西野と付き合ってるのかどうか自分の目で見て確認する、って事らしい。

間違えてないんだけど、人前で堂々と色々する程　オレは目立ちたがり屋じゃないし、西野もあまり人前では好ましく無いらしい。以前までは　普通だったんだけど、何だか最近は、だって。何か心境の変化でもあったのかな？　と思ったりもしてる。

「んー……、西野が来たら、それ訊いてみるのも良いかもな」

オレとしてはありがたい事だが、ちょっと気になったりする。男女問わずのクラスの人気者なのが西野。人目を避ける～なんて正直似合わないから。

と、色々考えながら　屋上の扉をガチャっと開いたら。

「やっほー！　れーんっ！」

ほんとナイスタイミングで西野が笑顔で迎えてくれた。

計ったのでは？　って思える程見事なタイミングで笑顔で迎えてくれると言う粋な計らい。ダメージがある意味溜まってるオレの心を癒してくれそうだ。（主に、お気楽組の勉強を教えてて負ったダメージだろう）

「おっす、西野」

「おっすっ！　蓮っ」

手を上げて応え、西野は笑顔で敬礼。うん　……やっぱりかわいい。

「それでどうしたんだ？　突然屋上にって。昼休みでもないのに」

「えー、今日は　朝の勉強会で以外　蓮に会えてなかったんだもん。ちょっとの休み時間でも、会いたい～って思うの普通じゃないのー？」

「あー……うん。同感。普通だなそう言われてみれば」
「えへへ」
人前、いやいや　いつものメンバー真中達の前でもあまりやらない受け答えだって自分も判るな。でも　自然で言えるようになれたのはやっぱりうれしいかもだ。自然に言いたいって想うくらい西野の事が好きだから。
「と言う訳で……、今から、蓮分を補充するのだーー！」
「っ！　っとと！」
がばっ、っと両手を広げて飛び込んでくる西野。これは予想してなかったので不意打ち気味だった。でも　よそ見してた訳ではないから難無く受け止めた。
「明日、泉坂だよね？　大本命の」
「ああ、そうだな」
「蓮分。蓮のエネルギーを、私の中に！　これで敵無しだねー。頑張れる！」
「お役に立てて何より。西野サマの仰せのままに～」
「ふっふっふ～　苦しゅうなーい苦しゅうなーい。えへへ」
ぐりぐり～　と二度三度と頭を摺り寄せて、満足したようで西野が身体から離れた。
「うんっ、よしっと。堪能したした！　それで、蓮。私に聞いてみたい事がある、とか言ってた気がするけど、なに？」
「ん？　あー、ほら　以前は普通に教室入ってきたり　呼んだりしてたけど、無くなったな～　って思っただけだよ」
「あー、それ。……だってさ、沢山来るでしょ？　色んな人が。蓮分は私だけのものだから」
べっ　と舌を出している西野の頬は仄かに赤く染まっていた。独占欲がある～　って西野は言ってたけど、それはオレだって否定しない。
他の女子達に悪いケド　やっぱり西野が一番可愛い。学校一の美少女と言う肩書は伊達じゃないって事だ。確かに東城も凄く綺麗だったがオレは西野だ。

「な、なーに？　あたしの顔ジーっと見て。何か変……だった？」
「いやいや。嬉しいなー、って思っただけだよ。ほれ、オレって引っ込み思案、だろ？」
「え？　あはははー。大草君や真中君、小宮山君たちと一緒にいるトコ見たら、全然なんだけどね？　普段はそんな感じかなっ、確かに」
「……あれはあいつらに良い意味で毒されてるからじゃないか？　まーそれは兎も角」
　オレは西野に向かって笑いかけたよ。
「オレは西野分を補充、って事で」
「わっ」
　きゅっ　と西野の頭を自分の胸に抱き込んだ。結構大胆な行動取ったな！　って我ながら自分を褒めてあげたいよ。……屋上で２人きりだからこそ出来た。うん絶対そうだ。
「え、えへへ～　あたしも更に補充～だね？　ん！　よーし、学校帰りにちょっとデートしない??　いいでしょ??」
「うん？　まぁ用がある訳じゃない、が……、明日だぞ？　大丈夫か？」
「此処まで来たら勉強したって今更だよ。今は英気を養って蓮分を更に補給して、心と身体をリフレッシュさせる方が良いじゃん」
「まぁ……　否定はしない。西野も十分ボーダーライン突破してるし、オレもそうだが、ケアレスミスが最大の敵っぽい。……そもそも　今慌てるって　確かにもう遅いし。うん。良いよ」
「ほんとっ？　やった。んじゃ　ぜーったいカラオケも行くからね！」
「おおせのままに。姫様」
　と言う訳で放課後デート。
　試験日前だけど、まぁ　良いリフレッシュになると思うな。真中とか小宮山にはああ言っといてなんだけど、嫌味っぽいが　ちょっとレベルが違う。
　……それで何処からともなく、小宮山辺りが嗅ぎつけてきたけど、一蹴したよ。帰って最後まで勉強しろ、って。

場所はカラオケｓｅａ。
前にも一緒に行った場所で店員さんも顔を覚えててくれたみたいで微笑ましそうに笑ってたのが印象的だった。行きも帰りも笑顔。『お楽しみでしたね？』とか言ってきた時は流石に　ぶっ！　って拭きそうになったが　西野はただただ笑ってるだけだったよ。
オレは何だか恥ずかしかったから、さっさとエレベーターに乗ったケド。
「あはははは　結構たくさん歌ったね――――。やーーっぱり、蓮って歌上手！　途中で何度うっとりしたか～。余は満足じゃぞ！」
「いえいえ、西野サンも素敵でしたよ、ハイ。ありがたき幸せ～ってな感じ」
まだ熱が冷めない、と言わんばかりに西野はハイテンション。当のオレも同じくだった。歌をうたうのが純粋に楽しかった、というのもあるけれど、やっぱり　西野と一緒が一番か。勿論、西野も上手かった。これはお世辞じゃない。
「ん～～、喉はだいじょーぶみたいだね。沢山うたったんだけど、まだまだいけるかな？」
「それはまた今度だな。……やっぱりさ、あまり心配をかけたくない」
「あっ……。えへへ。そーだね。ありがと」
西野は、にっ　と笑ってウインクした。
勿論、心配かけたくない相手は、西野のご両親だ。娘を心配するのは当然だと思う。一人娘であれば尚更だし、心配してて外にまで来てたから。今回はしっかりと事前に連絡を入れて、帰る時間も伝えてるし、部屋を出る時に西野はメールも送ってた。
名残惜しい気持ちはよく分かるけど、今日の所は終わりだ。明日入試だし。
「今度はちゃんとお母さんに紹介したいなー。あの時はちょっと私情けなかったし……」
「ん。ならオレも……、あ。うぅぅん……」

「あはは。蓮の事が大好きなお姉さんの事？」
「う……。全部　否定したい所だけど、……一部は出来ん」
　前半部分は赤くなる、後半部分は痛くなる。
　でも、以前はちゃんとした挨拶出来てないって思ってるから　いつかはちゃんとしたいよ。
「あはははー！　お姉さん蓮の事が大好きだもんねー。私とも気が合いそうだと思うんだ！　ちょーっと怒られちゃいそうかもだけど。……あ、そーだ。受験で受かったら――ッッ！」
　いきなりだった。いきなり、ガクッ！　と大きくエレベーターが揺れた。
「え……、何？　今の揺れ」
「……故障か？　ボタンの照光が全部消えた……」
「ええ!?　ほ、ほんとだ。た、確か　今2階くらいじゃなかったっけ？」
「ああ。カラオケが5階。はっきりと覚えてる訳じゃないが、表示灯の3が光ってるのは見たと思う」
「うぇ～～。じゃあ閉じ込められちゃったって事？　わーー、私のせーかも！」
「??　なんで西野の？」
　故障したのは吃驚した。エレベーターに閉じ込められるなんて経験は流石にないからな。でも、吃驚するよりも、西野に対する疑問の方があっという間に上回ったよ。
「だって、蓮ともっともっと一緒にいたいなー！　ってすごく考えてたら、ほんとになっちゃったんだもん……」
「……」
「って、黙らないでなんか言ってよ！　恥ずかしいじゃん！　せ、折角和ませようと思ったのに」
「あ、ああ。成る程……」
　和ませようとしたらしい。
　こういう事態ってパニックになる事が一番危険だって聞いた事ある。だから、オレは軽く深呼吸して、西野の頭をそっと撫でた。

「ありがとな」
「もー、遅いよっ」
「ははは。それは兎も角、早く店員呼ぼうか。非常電話」
オレはエレベーターに常備されてる緊急用の非常電話を手に取った。
ボタンを押すタイプじゃなくて受話器を取ったら自動的に繋がるみたいで、ものの数秒で繋がった。
「もしもし？　はい。ビル内のエレベーターが突然止まってしまいまして、ええ。多分2～3F辺りで停止したみたいです。はい。人数は私ともう1人の2人です。……はい。宜しくお願いします」
初めてかけてみたけど、存外噛む事なく言えたのは良かったな。横に西野がいるし、噛んじゃったら格好悪いし。
「どーだった？」
「ああ、『直ぐに調べるから待っててください』だって」
「りょーかい。んじゃ、座って待ってよう」
「だな。結構立ちっぱなしだったし」
動いてないエレベーター内って駆動音とか全く無くて凄く静かだ。それがきっと、不安感を煽るんだろう。閉所恐怖症だったりするとそれだけで大パニックになりそうだ。
暫く色々と話してて、西野もやっぱり不安になったんだろう。会話が途切れた後の間が凄く静かだったから、意識しだしたのかもしれない。
「――止まったエレベーターの中にこんだけ長くいるのって初めてだけど、ほんと静かだね。本当に直るのかなぁ……？」
「大丈夫だ。……安心しろ。傍にいるから」
「……あ」
西野は、マフラーに半分顔を埋めて不安そうな顔をしていた。
そんな西野をそっと抱き寄せたよ。やっぱり安心してもらう事。落ち着く事が何より一番大事だ。
「へへ。安心できた」
「ん。良かったよ。後ろ向きより前向きだ。きっと大丈夫。それに―

――笑う門には福来る、だろ？」
「うんっ」
オレのエゴかもしれない。でも少しでも沈んだ西野を見てるのは、嫌だった。
だからかな。西野が笑ってくれて本当に嬉しかったよ。
「ふ――――っ」
「ん？　どうしたの蓮」
「いや、結構タイムリーに、『人を笑わせること、これはいっちばん難しい』って訊いたからさ。西野が笑ってくれてよかったなぁ、と思って」
「あっ!!　それって桂歌丸！」
「――流石」
「もちっろんっ！　私ファンだもん」
程よく笑いあった後だった。
止まった時の様な振動があった後に、ウィーンって駆動音が聞こえてきた。
「ほっ。流石蓮だねー。早速福来る！　だよ」
「んんー、これはオレもビックリだ」
笑ってた時に動き出した。福か？　と言われればちょっと違う気もするが　兎も角安堵したよ。
……でも、その安堵感もすっ飛ばす出来事がこの後あった。
ぽーんっ、と音が鳴って、扉が開いたかと思ったら。
「れんっっっ！」
なんか、妙に聞き覚えのある声がエレベーター内に響いてきたんだ。
――妙に、じゃない。すげぇ聞き覚えのある声だった。

36話　ブラコン＋……

「「……」」

3人とも、時間が止まったみたいに固まってる。
いや、寧ろ状況的に考えたら故障したエレベーターの様に止まったって表現した方が正しい……。
ザ・〇ールドもそんなに長く止め続ける事は出来ないからな。

取り合えず、止めてられる限界まで来たせいか、いつの間にやら3人はエレベーター内から脱出して外を歩いていた。
いつの間に外に出たのか……、本当に思い出せないから不思議だ。
身体は動いているけど、……沈黙が続く。
西野、オレ、姉の順で並んで歩いて……。

「蓮。その子の事なんだけど」
「うん」

先に口火を切ったのは姉だった。
ついに来た……って思ったのは言うまでもない。
何せ姉は超がつく程の過干渉（ブラコン）だ。最近はより過激になってきているから過激派（超ブラコン）だって言っていい。
そんな荒ぶる姉から、西野の事を守れるのは一体誰なのか？
そんなのは決まっている。オレしかいないんだ。

「あっ……ぅ……」

それに、あの西野も流石に今回は緊張している様に見える。
突然会った事もそうだけど、何より姉の正体を知って驚いているんだと思う。

自分の姉である《愛》は有名な芸能人（アイドル）。その容姿は身内びいきが入っているかもしれないが、かなりのもの。完璧で究極で無敵だって思ったって良い。そこまで言えば自分も姉の様にシスコンか？　と思われるかもしれないので実際に口にはしないが、本心ではそう思ってる。

普段が普段だけにギャップが激しい。

今の本気モードな姉は纏うオーラが凄まじく、あの元気いっぱいの西野でも、やっぱり萎縮してしまうらしい。

「オレの大切な人だよ。……オレの好きな人。彼女。西野って言うんだ。西野――――つかさ」

「れ、れん……」

真面目な話であれば、基本的に姉は正しい事ばかりなので否定する事は少ない。従う事が多い。

でも、今回のこればかりは姉には従えない。ずっと世話になってるのは解ってる。姉のおかげで頑張ってこれたって自覚だってある。

でも自分が好きなのは……、大好きなのは他の誰でもない。隣にいる西野つかさなんだから。

「そっか。……そうだよね」

姉は何処か遠い眼をしている様に見える。

ひょっとしたら……まさか、もしかしたら……西野にナニカするかもしれない。宣戦布告のような事をして、色々仕掛けてくるかもしれない。

そう思った。

そして、もしも……しないと思うし思いたいが、万が一にも西野を傷つけるような事をするなら。例え家族であっても、例え姉であっても容赦する気はない。絶縁だってする。……相当へこむだろうし、今

後どうなるか解らなくも思える。
でも、それ以上に西野が悲しむ姿なんて見たくないから。

「あ、あの！」

西野が声を上げた。
上ずった声、高い声が周囲に響いてくる。

「わ、私は神谷蓮君とお付き合いさせてもらってる西野つかさと言いますっ！　え、えと紹介は、蓮君からして貰ってましたよね!?　ごめんなさいっっ！　そ、それと蓮君には凄くお世話になって、いつも迷惑ばかりかけちゃってて……、で、でも私はとても好きで、大好きで、えと、えと――――」

顔を真っ赤にさせながらテンパってる西野を見ると、本当にいとおしく思う。
自分の顔もきっと赤くなっている事だろう。周囲が暗くなって、夕焼けになっているから多少誤魔化せてるかもしれないが、絶対に赤くなっている。
心臓の音が大きく、速く脈打ってるのが手に取る様に解るから。

そんなとき、だ。
姉が何やら手を広げた。
もしや、西野を叩いたりするのではないか!?　と一瞬硬直し、直ぐに守ろうと行動に移そうとしたけど……何やら雲行きが……。
広げたのは両手。
もしも、叩いたりするのなら利き腕である右だけで良いだろう。
でも、姉は両手を広げている。
何をしてるの？　と疑問に思う間もなく。

「かっっっわいい〜〜〜〜〜〜♡♡」
「わぷっっっ!??」

西野に向かって盛大に、大胆にハグした。
姉の抜群なプロポーションと言うかスタイルと言うか……、兎に角同年代、日本人の平均よりも遥かに豊かな、豊満な身体で西野の顔をうずめた。

「わーわーわー！　エレベーターの中で見た時からピピっ！　ってきてた！　実は我慢してた!!　いきなりだとアレだし、ただの友達とかじゃ、アレだし！　ほんっとすっごいカワイイ！　こんなカワイイこ、芸能界（こっちゃ）でも私が知る限りいないよぉ!?　わーわーわーわー！　だって、こんなカワイイ子が私の妹になるんだよねっ!?　蓮言ったよね!?　わーーー最高だっっ!!」
「え、えええ……??」
「私が、今日からお姉ちゃん……、えっと、つかさちゃんのお姉ちゃんだからねっ！　よろしくねーーー！」

想像だにしなかった。
姉は、超が付く程のブラコン過激派な姉は……、まさかのシスコンでもあった様だ……。多分、誰でも良いとは言わないが、西野がカワイイのは自分も知っているから、ある意味お眼鏡に叶った、と言うのかもしれないが……。

「いや、ほんとゴメン、西野……」
「も〜、良いって。確かに窒息しそうではあったけど、何とか生きてるし？」

「あまりにも予想外な行動だったから、とめれんかった……。と言うか、姉と対決する気概でもあったからさ……」

その後、いつまでも離さない姉に四苦八苦。大好きホールド～～！とかなんとか言いまくってた姉だが、ある程度は満足したのか、西野を放してくれた。……西野は無事だったんだけど、何やら姉の胸を凝視して、見比べていた様な気がするが、その辺りは気づかなかったフリをしている。

「でも、まさかアイドルの愛ちゃんが蓮のお姉さんだったなんてね～～。すっごい驚いた！　実力派アイドルだった筈だし、蓮の歌が上手なのも納得だなー」

「……はははは」

「んー」

西野は何やら考え事を少しだけして、少し駆け足でオレの前に歩いて、振り返った。

「ひょっとして、だけど。蓮が他人に歌披露するのに抵抗もっちゃったのって、お姉さんが関係してる？　ほら、やっぱりアイドルやってるお姉さんだからさ？　負けちゃったり～とかで」

「っ……」

まさか……そこを突かれるとは思わなかった。この流れで言われるとは思わなかった。

だから、少しだけ固まってしまった。言葉が出てこなかった。

そんな姿を……西野は視たからだろう。慌てて手を振った。

「あ、いや。無理に言わなくて良いよ!?　ごめんごめん。ちょっと私も興奮しちゃって……デリカシーない事聞いたって今思った。ごめん！　今のなしなし！　忘れて！　ゴメン蓮っ」

ぶんぶん、と西野は手を振って謝った。
うん、ほんと今更だから別に良いよ。……いや、西野だから良い。それに今後ひょっとしたら真中の映画製作？　とかで色々とキャスティングされるかもしれないし……、何より、西野が好きだって言ってくれてるし。

もう、過去の事は良いだろう。

「いいや。大丈夫。そうだよ。そうだったんだ……。だって、オレは歌えてるんだ」
「え……？」

以前までの自分だったら……、きっとどんな状況だったとしても、他人の前で歌を披露したりしないだろう。
仮に聞かれたとしても……次はもっと注意したり、聞かれたくないと拒絶していた筈だった。

でも、相手が西野だから……、西野だから出来るんだって改めて実感した。
歌は、楽しいもの。聞いてもらえる事が、褒めてくれる事が楽しくて嬉しいものなんだ、って……思い出す事が出来たんだ。
こんなに簡単な事なのに、ずっとずっと忘れていたんだ。
西野と出会うまでずっと……。

「西野が傍にいてくれてるから、オレはなんだって乗り越えれそうだ。だから、大丈夫だ」
「ッ……」

笑顔。
西野の前ではなるべく笑顔でありたい。
西野の笑顔を崩さず、そして自分も笑顔でありたいんだ。

「ちょっと情けない話、なんだけどさ？　姉が芸能界に入って活躍してて、自慢の姉だった。だから、オレも一緒に頑張ろうって、追いかけようって、それがオレの道だって思ってた時期があったんだ。歌は昔からずっと一緒に歌ってて大人にも褒めて貰って自信はあったから。……でもやっぱり、ああいう世界って兎に角倍率が高いからさ。生き残りをかけた真剣勝負な世界で、……愚直で真っすぐなだけ通じないじゃない。楽しく歌ってるだけじゃ無理なんだって思い知ったんだ。……あまり綺麗な世界とも言えないからさ」

姉の影響は凄かった。

いつも一緒にいる所を見られているから、親類である、姉弟である事はもう周知の事実だったから……誤魔化しがきかなかったんだと思う。

どうせあの愛の弟だから。愛の身内、弟だから選ばれるんだろ。

そんなのずるい。……全然大した歌じゃないのに……ずるい。生まれで決まるなんて。

ウチの昌ちゃんの方がずっと上手いのに、結局コネがモノを言うって事なのね。どう足掻いたって無駄だって言うの？　すごく頑張ってきたのに。

これまで頑張ってきたのに、そんなので決まるなんて納得できないよ。

――うあああんっっっ!!!

ノイズが、不協和音が……沢山聞こえてきた。耳に入ってきた。気付いたら、歌をうたう事がもう楽しくなくなっていた。……人前で歌

う事が、嫌になってきた。
もう……嫌になった。

でも、歌そのものは嫌いになれなかった。
だから、1人で……1人きりでずっと、ずっと口遊んでいたんだ。

「今思えば、あの辺りから姉が異常にオレに執着する様になったのかもしれないな。……ひょっとしたら、弟が自分の事を嫌いになるのでは？　とでも思われちゃった……のかもね」
「……そんな事、ある訳ないのにね」
「え？」

西野が割って入る。

「だって、蓮は誰よりも優しいから。……大切な人を、大切な家族を嫌いになるなんて、絶対にない。そうでしょ？」

心を見据えてくる。
そんな目をしている。
導くであろう答えを最初から西野は解っていた。西野だから……解ってくれているんだ。

「……まぁ、うん。本人の前じゃ言えないけどね」
「ふふっ」

西野はぴょんっ、と前に出た。

「今日は本当にいろんな事が起きて大変だったね。ずっと一緒にいたい～～って願ったらエレベーターに閉じ込められちゃって、突然アイドルの愛ちゃん……愛さんが開いた先から出てきて、実は蓮のお姉さんだって。……ほんっと、短い間にこれだけの事があって……、改め

て実感したよ」

更に一歩前に出て……西野はそっと蓮に口づけをした。

「私、蓮のことが好きだって。大好きなんだ、って」